
実はカイザーはショタコンだった！？

なすび

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

実はカイザーはシヨタコンだった！？

【Nコード】

N3171V

【作者名】

なすび

【あらすじ】

遊戯王オタクの雷堂優、そんな彼の夢は遊戯王GXの世界に転生すること、そんな頭が少しおかしい少年はもう中学3年の受験生、しかしそんな事はない彼は今日もTUTAYAから初代遊戯王のDVDを借りてくるのであった、そして彼は今日も呟く、「はあ、転生したいなあ」

そんななかで転生に成功した、主人公、さらに偶然にもGXの原作キャラ丸藤亮の家に住むことになるしかし丸藤亮は実はシヨタ

コンだった！？

注意) 原作キャラは半分ぐらいキャラ崩壊してます。

注意2) 少し「腐」です。

注意3) オリジナル設定、作者の妄想もあります。

注意4) 原作に入るまで20話ぐらいかかります。

こんな小説でも読んでくれるのならとてもうれしい限りです。

第1話 「GXの世界に行くのが俺の夢だ」by主人公（前書き）

こんにちは…いやこんばんわかも…おはようございますの可能性も……いや、

面倒くさいからなんでもいいや、えっと改めまして、なすびです、感想くれるとうれしいです。

「クリボーにもわかるなすび（作者）の小説上達術！」

- 1、褒められると伸びます。
- 2、だけど、褒めすぎはいけません、天狗になります。
- 3、叩かれすぎると落ち込みます。
- 4、けどその失敗を糧にして改良しようと試みます。
- 5、感想くれると執筆スピードが上がります。
- 6、評価くれると執筆スピードが上がります。
- 7、作者は少し腐ってます。
- 8、エサをあげてはいけません。
- 9、ピーマンが嫌いです。

こんな我侷な作者ですがこれからよろしく願いします。

第1話 「GXの世界に行くのが俺の夢だ」 by主人公

『ブラックマジシャンで攻撃！ブラックマジック！』

『グワアアアア』

「やっぱり面白いな遊戯王」

おっす、オラ山田^{やまだ}、ゴメン今の嘘本当は雷堂優^{らいどうゆう}、どこにでもいる
極普通の少年さ！

今TUTAYAから借りてきた初代遊戯王のDVDを妹と二人で
見ていた所だ、シャキン！！

「遊戯はやっぱりかっこいいな、俺も言いたいぜブラックマジック！
って」

ついでに今の俺には夢がある、それは

「転生してGXの世界に行くことだ」

「兄さん、相変わらずバカな事言っでないで、受験勉強したらどう
ですか」

今ツツコンこんで来たのは俺の妹、
両親がいつも二人そろって出かけるため昔からよく二人で遊んでい
る。

「妹よ、おまえには夢が無いな、全国のデュエリストの共通の夢、遊戯王の世界に、転生！それしかないだろ！！」

「それは小説の中だけで本当は転生なんてできませんよ、そんな夢ばっか見てないで勉強しないと高校落ちますよ」

「転生術は本当に存在する！間違えて神に殺されて、そのお詫びに転生させられるというのが王道だろ！」

「いつまでもおめでたい頭ですな兄さん」

「行きたい行きたい！転生したい、したいよー、
したいしたいしたいしたいしたいしたいしたいしたいしたい
い」

「はあ、テレビが聞こえませんが、静かにしてください兄さん」

「やだやだやだ！俺は転生するんだ！」

「はあ……」

『ブルルルル』

「もしもし精神科ですか、兄の頭がおかしくなっただんですけ
」

「いや！病院に連絡するなよ！俺の頭は正常だよ！！」

俺は妹から携帯ととりあげる。

「転生したいとかほざく人間のどこが正常ですか、兄さん………」

「妹お前、転生をバカにしてるな！転生なめんなよ！」

妹も言ってみたいだろ、シンクロナ上」

「そんな中二くさい台詞言えるわけないでしょ兄さん」

「集いし星が新たな」

「本当に言ってる!」

「妹も言ってみろよ、スカツとするぜ!」

「謹んでお断りします」

まったく妹は照れ屋さんだな、一回言えばスカツとするのに。

「はあ、転生したいなあ」

マジで転生したいなあ、転生転生転生転生

「…兄さん、それは転生して、
私たち家族や学校の友達とも一生あえなくても良いとゆうことですか?」

転生転生転生転生転生転生転生転生転生転生

「私は嫌です、私は兄さんと一緒にいたいのです、
だから転生したいなんてバカなこと言わないでください
(ああ、私ったら兄さんにこんなことを、恥ずかしい、
でもこれで私の気持ちが兄さんに伝わったら………ウフフ)」

転生転生転生転生転生転生

「ん？なんか言ったか妹よ？」

「な、なんでもないです、
に、兄さんのバカ！！」

何なんだ、いったい、妹ったら顔を赤くして、熱でもあるのか？
今考え事していて、聞いてなかった。

「はあ、転生したいしたい、
デュエルディスクでデュエルやりたい！
やりたいやりたいやりたいやりたい！！」

「全く、次から次へと我儘わがままいつて、
(でも兄さんのそうゆう所も嫌いじゃないです)」

「やりたいやりたいやりたいやりたいやりたいやりたいやりたい
りりたいやりたい」

「(でも少し五月蠅いです)」

『プルルル』

「もしもし警察ですか？兄がさつきから殺りたい、
犯りたいと終始叫んでいるのですが」

「いや、警察に通報するなよ！！」

俺は再び、妹の携帯を取り上げ、

「すいませんすいません、間違えです、俺病んでません、本当にス
イマセン、じゃ」

と言い、携帯をきる。

「お前のツッコミはたまに度を超えてるぞ……！」

「誰のせいですか誰の」

「母さんかな？」

「兄さんのせいです」

「まあ、これが俺と妹の日常だ、
この話を読んで俺を転生してくれる神様どんどん募集中だぜ！ピカ
ーン」

「誰に言ってるのですか………」

第1話 「GXの世界に行くのが俺の夢だ」by主人公（後書き）

おもしろかったら次も読んでください。

第2話 「神は本当に存在します」 by 田中（前書き）

2話です、残念ながらまだ主人公の優は転生しません。

第2話 「神は本当に存在します」 b y 田中

次の日

「やっぱりそう簡単にはいかないか……………はぁ」

俺はパソコンの画面をみけに皺を寄せて見ている。

「ん？兄さん何をしているのですか？」

「おお、妹よく来たなちよっと聞いてくれ」

「……………いいですよ」

「すごく嫌そうだな」「気のせいです」

俺は妹に俺の悩みを話し始めた。

「実はな、昨日の俺と妹とのやり取りを小説形式にして、小説家になろう！って言うサイトに投稿して、

それを見た神様に転生させようとしたんだが、いまだに一人も来ない、

どうなっているんだ！俺はこの小説を神様に見せて転生しないと
いけないのに！

と言うわけだ」

「はぁ」

妹は大きなため息をはいて

「バカですね」

と言われた。

「神様がこの世にいるわけ無いでしょ、
そんなこともわから無いのですか兄さん」

「い、いやそれは俺たちが知らないだけで本当はいるかもしれない
だろ！」

「1億歩譲って神様がいるとしましょう」

譲りすぎだな、9桁じゃねーか。

「でも神さまがこんなサイト見てるわけ無いでしょ、
仕事しろって感じですよ！」

神様めっちゃダメだしされてます。

「1兆歩譲って神様このサイトを見たとしても」

ついに兆の桁突入ですか。

「こんな兄の書いた駄文で糞で屑な小説誰が読みますか、
粹がるのもいい加減にしてください、神様も転生する気もつけま
す」

「そんな悪かったか俺の小説」

「はい、そんなことするぐらいなら受験勉強でもしなさい、です」

「……………御もつとも」

「まったくこれにこりたら転生なんてバカなこと考えな」

『ピンポーン』

「神様キター……………」

「なぜネット用語的に!」

玄関のチャイムが鳴り俺は妹の説教を無視して全速力で玄関の扉を開けた。

『ガチャ』

玄関の扉を開けるとそこには1人の男性が立っていた。
そして一言

「私が神です」

「……………は？」

妹よ、どうやら神様本当に来たみたいだ。

第2話 「神は本当に存在します」 b y 田中（後書き）

どうせ、こないと思ったがこの作品にも感想かきました、うれしいです。

第3話 「今回は私が語り部です」by妹（前書き）

今のところ、毎日投稿してます、それもそのはず、書き貯めといていたのです、というわけで明日も投稿します。

第3話でやっと主人公は転生します、遊戯王の世界に転生するまで3話使う小説ってあんまないですよね。

第3話 「今回は私が語り部です」by妹

「 と言う訳で、神の田中さんに来ていただいた」

なぜこうなったのでしょうか、私の目の前には私の兄あにいもうと雷堂らいどう優よしと、
田中と名乗る神様がいます。

田中さんの身長は170後半あるんじゃないかというぐらい背が
高く、

顔は爽やかなイケメンさんです、
髪はサラサラで男性なのに腰ぐらゐまで伸びて後ろをゴムでとめ
ています、

あ、別にポニーテールではないです、ただ単にまとめてるだけ
です。

「私の顔に何か付いてますか？妹さん？」

「い、いえなんでもないです」

何でしょう、田中さんは凄くイケメンなのに何故か私のタイプじ
やないと言うか、

苦手と言うか、兄さんによくない影響を与えそうな人です、
理由？私の勘です！

「それで田中さんは神様なんですよね」

兄さんが田中さんに質問します。

「ええ、もちろん主に転生科の方を専門としています」

転生科！？神様にも専門科目があるんですか！
と言うより神様って1人じゃなかったんですか！

「えっと転生専門と言うことは、お…僕も転生してくれませんか？」

「はいもちのろんですよ」

何かギャグが古いです。

「ていうか転生科があるってことは他にもあるんですか分野が？」

ナイスです兄さん、私もそれ気になってた。

「はい、ありますよ、

流石の神でもたった一人で世界の人々を見守ることはできませんか
ら、

例えば、うまい棒科とか、カラスを見守る科とか」

「何ですかうまい棒科って？」

「主にうまい棒を食べるのが仕事です」

「いらなくね！その分野！」

「ごもっともです。

「じゃあカラスを見守る科と言うのはなんですか？」

「それはゴミをあさるカラスを暖かい目で見守るのが仕事です」

「それはもはやしごとではないっ（です）！！」

私と兄さんははもって田中さんにツッコみました。

「神様案外役立たずですね、

ほら、自然災害を事前に阻止するとか、

雨が全然降らない土地に雨を降らすとか？

そうゆうのはないんですか？」

「あ、無いですそんな便利な能力神にあるわけ無いでしょ、
もっと現実を見なさい」

この世の神も堕ちたな、です、
と言うかこの人が本当に神様かどうかも分からなくなってきま
した。

「まあ、では拙速転生の契約でもしましょうか？」

「あ、はいそうですね」

「……………うう」

もしこの人が本当の神様で兄さんが本当に転生してしまったら……

……………
でもそれが兄さんの考えた道なら私は止めません、
でも少し寂しいです、もう…会えなくなってしまうのですか……………

「じゃあまずどの世界に行きたいか、教えてください」

「遊戯王GXで!!」

「なるほど、メジャーですね、
では次に契約方法ですが、
お尻にネギを刺して、リンボーダンスを踊って下さい」

「無理だ!!」

「冗談です」

にっこり笑う田中さん、
と言うか神なのに田中って………地味です。

「本当はこの書類にサインしてくればいいです」

そう言って一枚の紙を出してきた田中さん。

「なんか、俺がよく読む小説と少し違うな」

「現実はこの様なものです」

「はあ」

少し納得いかない不陰気だけどしっかかり書類にサインする兄さん。

でもちゃんと内容を確認してから書いたほうが、
どうなっても知りませんよ、ってもう書いちゃったですか。

「はい、書きました」

「ククク、こいつ書いたな、本当はこの書類は」

「あの、田中さん、声に出ってますよ本音」

「ん、ん、ん、何でも無いです」

「いや聞こえてましたよ！！この書類本当は何なんですか！！」

「冗談です嘘です、ちよつとしたジョークです」

本当ですかね？

「では早速転生しましょう」

「え！今からですか！！」

「今からです」

「でもみんなにお別れの挨拶も」

「問答無用！！」

急に兄さんの足元に不思議な模様の魔法陣が現れました。

「あと、10秒で転生します」

急ぎますね田中さん！！

「6、5、4」

「あ、そうだ神様、遊戯王の二次創作となればつき物の、全カード9種類と大量の札束もつけてください」

「?何を言ってるのですか、私はただ貴方を遊戯王GXの世界に転生するだけ、

そんな夢みたいな機能、あるわけ無いでしょ」

「ええ!!それって!」

「1・0、契約成立です」

田中さんがカウントダウンを言い終わると、

兄さんの足元の魔方陣が光りだして、兄さんが一気に消えてしまいました!

「た、田中さん?これはどうゆう…」

「ふふ」

田中さんはいっこりと、爽やかや笑みで

「無事、転生は終了しました」

この人は本当神様だと言つのですか……………

第3話 「今回は私が語り部です」by妹（後書き）

思ったより読んでくれてる人が多くてすごくうれしいです。

第4話 「カイザー？まだ出ませんよ」bY作者（前書き）

今回は話がむちゃくちゃで分かりづらいかもしれません、スイマセン。

第4話 「カイザー？まだ出ませんよ」by作者

「……………う、うう、」

「ここは？無事、転生できたのか」

田中さんの転生術が成功したのか、目が覚めると自分の家ではなく道路の真ん中に立っていた。

自分の左腕を見て見ると、デュエルディスクは無かった、見事に俺の期待を裏切る神様だ、更には受験票と思われる紙さえなかった。

ショック……………

「ところでココどこだ？と言うより何か世界が広がった気がする」

何か俺の体に変な違和感を感じる、

お！あんな所に鏡が！

俺は道の端っこに何故かある鏡の方へ行き自分の体を確認してみた。

「な、何じゃこりややや！！！！」

え！？何これ俺の体じゃない、

まさか転生はできても体は引き継げないのか！

転生する前は色黒で若いのに少しオッサンっぽい俺の顔は何と色は白くなって、男なのに可愛い容姿をしている、

ロリシヨタって言うのかこれ。

更に顔のあちこちにあったニキビや普通の人より少し多く付いてるホクロも

無くなつて、自分の体なのに見とれそうだ。

「やばいなこれ、神様サービス利いてるな」

まあ、デュエルディスクは愚か自分のデッキすら付いてこなかったけど、

まあそれは何とかするか。

でも俺の体の変化はメリットだけじゃないっぽいぞ、

野球部で鍛えた筋肉もなくなつてるし、

全体的に体力が落ちてる気がする、

まあそれも仕方ないか、この顔と身長で筋肉ムキムキだったら逆に気持ち悪いな。

「しかも声も高くなつてる」

さて、それにしてもこれからどうするか、財布もない、

と言うことはもちろん家も無いだろうな、

財布があればインターネット喫茶で夜は越せるのについて中学生ホームレスかよ。

いや……………

「本当にホームレスだよ!!」

どうすんだよ俺！マジでホームレスかよ！
現実はそのなに甘くないか……………はあ。

そもそもココ本当に遊戯王の世界か、それと今は何年の何月だ、
この暑さと周りの人の格好を見る限り夏真っ盛りと言っ感じだな。

はあ、とりあえず、その辺でもブラブラするか。

俺は少しでもこの世界の情報が知りたいため、この町を探検する
ことにする。

「お、ゲームショップだ」

俺はゲームショップを発見し中に入ってみる。

デュエルディスクが売ってる、これは初期型だな、
バトルシテイ偏でアラオや社長が使っていたタイプだな、
値段は……………5480円意外と安いな別に買わないけど、あれ？
その隣にも別のデュエルディスクもある、

これはGXでカイザーやティラノが使っていたタイプ、つまり新
型か、

値段は……………ゲ！31500円！！高！流石新型、
でもアカデミアの人はみんなこれつけてたよな、
アカデミアに入学したらもらえるのかな？それとも無理やり買わさ
れるのかな？

ま、別にいいか今は。

ココが本当に遊戯王の世界と分かったただけでも収穫だ、俺はこのゲームショップを出ることにする。

夜

とりあはず俺は今日一日使って、情報を自分なりに集めてみた結果、今は8月の1日で、プロデュエリストを教育する学校デュエルアカデミアの受験日は8月21日、そして新学期は9月から始まるらしい、あとVジャンプの発売日は俺のいた世界と同じで21日発売で、任天堂とSONYもありWiiもPS3もあるらしい。

そして今の流行語は「ふう、危なかった」らしい。うん、後半はどうでも言いか。

そして、1000円拾った、が、これは大事にとっとくことにする。さて、そろそろ寝るか、どこで寝るか、もちろん、公園のベンチです。

「うっ、ひもじいよお」

これが俺の望んだ転生した世界か、嫌違う、俺はこんなんじゃない、もっと楽しい学園生活を送り

たかつたはずだ、

「現実もそんなに甘くないと言っことか」

第4話 「カイザー？まだ出ませんよ」by作者（後書き）

デュエルディスクの値段は僕の予想です、本当にこの値段かは分かりません。

第5話 「お休み、パトラッシュ」「b yネロ（前書き）

初めて、初めて予約掲載を使ったなすびです。

ついに次回初の原作キャラの登場です、長かった…のかな？

第5話 「お休み、パトラッシュ」byネロ

ホームレス生活2日目

「む、朝か、ふわあああ」

初めて公園のベンチで夜を越したな、これも転生したおかげ、田中さんに感謝、するわけないだろおお！！

転生したは良いけど、装備が全然無いつてどうよ！！
ここは家とデュエルディスクとデュエルアカデミアの受験票、そして全カード9種類ずつが常識だろ！

田中のヤロー神だろうと何だろうと次会ったら絶対一発はブン殴らないと気がすまないぞ！

「とりあいずどうすつか、食料でも探すか、腹減ったし」

俺はなぜ、こんな現代の街中でサバイバル生活をしなきゃいけないんだ、

全国のホームレスさん、いままで哀れみの視線を向けてしまつてごめんなさい、

貴方たちは毎日一生懸命生きていたんですね、本当にごめんなさい。

「腹減った、早く飯探さない」と

俺は今日も食料を求め町に行くのであった（まだ2日目だけど）

『グルウウウウウ』

うう、腹減りすぎて死にそうだ、
そういや昨日から何も食べてなかった、餓死する。

あ！あんな所にカレー屋が！

何々、カレー1つ525円、高いな、

昨日拾った1000円があるから買えなくもないが、此処は我慢、
この千円はいざという時に取っておくんだ！！

カレーは我慢した、その代わりにカレー屋の裏口の前にあるゴミ箱
を漁り、

食べ残しや、野菜の皮を食べて飢えをしのご事にした、

うう、ひもじいよお……………

「ううううううう、腹、いてええ……………」

俺はただいま公園のトイレで現在進行形でウ　コ排出中です、

やっぱゴミ箱の中なんて漁るもんじゃねえな、

マジ腹壊しました、畜生、この世界に来てまだ一回もデェエルし
てねえよ、

イテ、いたたたたたった！！でる！！でる！！

しばらくお待ちください。

ふう、やっと腹が治まった、俺はもうゴミ箱の中を漁らないと誓うぞ！！

誰に誓おう…よし！お天気お姉さんに誓おう！！

そうと決まれば早速尻拭いて此処から出よう、んでもって仕事でも探すか！

しかし！俺は大切なことに気づいてしまった！！

「……………紙がない……………」

「ふう、すつきり！いやーもしもの時気のために1000円札とっ
といてよかつたよ！」

って言い分けないだろおおおお！！！！！！！！

何屍拭くのに1000円使っちゃうんだよ！！！！

そんなことなら普通にカレー食った方がよかつたよチクショウ！
！！！！！！！！」

その日俺はショックのあまり、涙が止まらなかった。

ホームレス生活3日目

「……………腹…減った…し…ぬ……………」

転生して3日が経った、だが腹へって死にそう、

と言いかもう死ぬ、くそ、少しいらい原作に絡みたかった、

せめて、試験管のグラスンだけでも…見たかった……………

うつ、意識が、薄れていく、神のヤロー、

次会ったら…マジ…ぶん殴るぞ…てか…殺すぞ……………一生、怨んで

やる……

『ガクッ』

ついに俺の意識は落ちていった……。……。

「（おやすみ、パトラッシュ……）」

第5話 「お休み、パトラッシュ」「b yネロ（後書き）」

主人公の容姿、分かりづらいかもしれないので、ここにも書いてきます。

主人公・雷堂優

転生前15歳（受験生）（オタク）

転生後10歳（しかし本人は知らない）

容姿

黒髪で目の色も黒、

肌は白く、ニキビ、ホクロ、シミなどは一切無い、

顔はロリシヨタ系

分かりやすくすると『桜欄高校ホスト部』の埴之塚はにのつか 光邦みつくに先輩を黒髪にした感じですよ。

次回ついに丸藤先輩が登場する！？

そういえば、活動報告ってどんなこと書くんだらう？

書いたこと無いな(2011年8月1日現在)

第6話 「カイザーの家ってお金持ちだったんだ」 b y 優（前書き）

どうも、なすびです、ちょっと、どたばたあって、疲れているな
すびです。

今回ついに原作キャラが出ます、
誰かな？明日香かな？カイザーかな？
それは読んでからのお楽しみです。

第6話 「カイザーの家ってお金持ちだったんだ」 b y 優

丸藤亮 視点

ふう、気持ちいい朝だ、

長期休暇でアカデミアから久しぶりに実家に帰った、

やはり、地元の空気はいつきても心地よい、別に田舎だからという分けても無い、

ただの気分の問題だ。

俺は今近所の公園に来ている、昔はよくここで翔と遊んだな、

！？あれは！？

俺が公園を見渡していると、12、3歳程度の少年が倒れていた、俺は急いでその少年のところに行く。

「おい！君、大丈夫か！」

……ふう、ただ単に気絶しているだけだ、

それにしてもなぜこんな所に、家出か？

このまま、ほっとくのも何なので担いで俺の実家まで連れて行くか。

ふう、意外と軽くて運びやすかったな、この少年。
俺はこの少年を自分の部屋のベットに寝かせる、
ふむ、それにしても可愛い容姿をしているな、
似てないが、昔の翔と少し姿が重なる。

翔、元気にしているかな、

10年前のあの出来事以来俺と翔の間には妙な溝みそができてしまい
一緒に遊ぶことは愚か、話すことも少なくなってしまった。

更に、この後すぐに、親がケンカし別居してしまい、
翔は母親のところに行ってしまいこのギクシャクした関係のまま離
れ離れになってしまった。

そういえば、翔は今年のアカデミアの試験を受けるらしいな、
今の翔の実力で受かるかどうか……..
自分の弟に言う台詞ではないが、難しいな、精々レッドが限界か？

「それにしてもこの少年、少し汚いな」

何日も風呂に入っていない様子だぞこれは、
流石に汚いと思い、シャツ、ズボン、パンツ、靴下を全部脱がし
た、

別に少年だし、男同士だし、良いだろ、多分。

そして何故か家に調度いいサイズの衣服が一式そろってたからそ

れを着せた。

更に、汚れているところをウエットティッシュで拭いて汚れを落とした。

「ふむ、綺麗になった」

この少年、見れば見るほど、可愛いな、俺の隠された性癖が目覚めそうだ、俺の着せ替え人形にしたい、一緒に寝たいぺろぺろしたい。

「……………ん、ここは？」

「目が覚めたか」

雷堂優 視点

「……………ん、ここは？」

俺は、確か公園で腹減って力尽きたはず、なぜこんな所に。

「目が覚めたか」

目の前には、青と白のデュエルアカデミアの制服を着て、身長は結構高めで、髪は長いロンゲ？そして目は鋭く怖そうな目をしているが、なにか優しい感じの男性が立っていた。

ってあれ？原作キャラのカイザー？

「1111は？」

「ここは俺の家だ、君が公園で倒れていたの、ここまで運んできた」

「え！あ！そんなんですか！あ、ありがとうございます！」

俺は自分を助けてくれたカイザーと思われる人にお礼を言う。

「例には及ばん、そよより、君はなぜあんな所にいたんだ？」

それは自分が転生したから！ とは言えないな、
絶対変な目で見られる、どうしよう……

「……………」

「ふ、別に言いたくないなら言わなくてもいい」

「！あ、ありがとうございます！」

「そして、帰る場所が無いならここに住んでも良いぞ」

「ほ、本当にいいんですか！？」

「構わない、家は意外と裕福な家庭だ、人が1人増えようが、
構いわしない」

確かに、俺が今いる部屋を見る限り、この家はかなりお金持ちだと分かる。

大きいベットに高そうな家具の数々などで。

「あ、ありがとうございます!!」

カイザー、思ったより優しいな、

流石俺がGXで一番好きなキャラ!

ヘルカイザーになったときは凄く残念な気持になったな、
だってあんなデュエルをリスペクトするとか言ってた優しい人が、
勝つことが全てとか、冷たい人になっちゃったんだもん、
でもユベル偏のカイザーは感動したな

「えっと、俺は雷堂優と言います、不束者ふつつかものですがよろしくお願ひします」

「別にそう堅くしなくていい、俺は丸藤亮、
デュエルアカデミアという学校に通っている」

やっぱりカイザーだったか、
これはラッキーじゃないか、
俺が好きなキャラに会えたし、一緒に暮らせるし、
屋根が在る所で寝れるし。

『グウウウウウウウウウウウ』

ヤベ、腹が。

「腹が減ったのか?」

「は、はい／＼／」

「少し待ってる、何か食べ物を持ってきてやる」

「ありがとうございます」

丸藤亮 視点

俺は今食堂に向かっている、

あの少年、優と言ったか、

あの子のために何か食べ物を持ってくることにする、

それにしても…家に住んでくれるのか、

うれしいな、誰にも言えないが俺は幼い男の娘と暮らすのがゆ
なんでもない。

食堂に着いたか。

「理奈、理奈はいるか？」

俺が呼んでいる理奈というのは、我が家に昔からいるメイドだ。

「御呼びでしょうか、亮様」

調理室から出てきたこの女性が理奈だ、

長い金色の髪を後ろにまとめた髪型、

ハーフのため日本人の顔で目が綺麗なクリアブルーの色をしてい
る、

普通に美人だ。

「ご用件は何でしょうか、亮様」

「あ、ああ、
少し小腹が空いた、何か作ってくれるか？」

「かしこまりました、
ではいつものようにサラダでも作ります」

「い、いや、まて！」

きよ、今日はホットケーキが食べたい気分なんだ、
ホットケーキを作ってくれるか？」

「了解しました。」

(亮様がホットケーキ？いつもは甘いものなど食べないのに)

約10分後

「出来ました」

「ああ、ありがとう、

あと、ミルクも一杯入れてくれるか？」

「了解しました」

しばらくして、理奈がシロップ、バターが掛かったホットケーキ
と、

一杯のミルクをトレーに乗せて持ってきた。

「ありがとう」

俺はトレーを持って、食堂を出ようとしたら

「亮様、何処へ行くのですか？」

「いや、今日は自分の部屋で食べたい気分なんだ」

「そうですか、

それと亮様、旦那様は犬が大の苦手なのでこの屋敷では飼えませ
んよ」

「ち、違う！べ、別に犬を拾って来たわけじゃない」

拾ったのは人間だしな。

「それならいいのですが。

（亮様があんなに動揺している、珍しい）」

「い、犬なんて拾ってないからな、変な誤解はするなよ」

「はいはい、

分かっております」

「それならいいんだが」

俺は何とか、食堂を抜けて自分の部屋に戻る。

『ガチャ』

「待たせたな、もって来たぞ」

「いえ待ってません」

俺はトレーを優の前においた。

「さあ、食っていいぞ」

「（やったー！2日ぶりの食事かな！）
いただきますー！！」

……よく食べるな、そんなに腹が減っていたのか。

しばらくして、優がホットケーキとミルクを平らげる。

「うちそうさまでした、」

えっと、ありがとうございます………亮さん？」

「俺のことは亮でいいぞ、優」

「は、はい」

優は腹が満たされおち付いたのか、そわそわしたり、
部屋をキョロキョロ見渡したりしている、

「どづかしたのか？」

「い、いえなんでもありません」

フム、緊張してるのか、
俺に対して遠慮した態度だし…

そうだな、このままでは、優が居心地悪そうだし、
俺的にも楽にしてくれた方が気持ちいい、早く心を開いてほしいし、
……………そうだ、こんな時は…

「優、デュエルモンスターズを知っているか？」

「（デュエルモンスターズ？なんだそりゃ……………
あーこつちの世界での遊戯王のことか、思い出した！）
え、ええ知ってますよ」

「そうか、それはよかった、
じゃあ、ちょっと付いてきてくれるか？」

「は、はい」

「この部屋だ」

俺は優を連れて、ある部屋までつれてきた、
デュエル決闘をすれば、優もきつと心開いてくれるだろう。

俺はこの部屋の扉を開ける。

『ガチャ』

「わ~~~~~すごい!!こんなにたくさんカードが!!」

この部屋はこの屋敷のカード保管部屋、
さまざまなカードを、ここに保管している。

「この中のカードを好きなだけ使ってデッキを作っていい、
デッキができたなら、俺とデュエルしよう、いいか」

「はいわかりました!

(それにしても凄いなこの部屋のカードの量、
全てのカードがあるんじゃないかな?)

凄い量のカードですね、全種類のカードがここにあるんじゃない
ですか?」

「いや、流石に全てではない、

ブルーアイズホワイトドラゴン
青眼の白龍やブラックマジシャンは無い、

でも、大抵のデッキならこのカードを使えば作れるぞ

(でも、レッドアイズ・ブラックドラゴン
紅眼の黒龍は1枚あったかな)」

「凄いなあ……」

「じゃあ、俺はここら辺にいるからデッキができたなら呼んでくれ」

「はい!」

雷堂優 視点

さーて、デッキを作るぞー、

それにしても運がいい、
始めはデッキが無い、金が無い、家が無いで大変だったのに…
カイザーに拾われてよかった！。

「そついえば優」

「はい？呼びましたか？」

「ああ、そう言えば、お前の服を脱がしたとき、こんな物が入って
いたんだが………」

「え…、脱がした、
それって………」

「ち、違う！変な誤解するな！
優の服が汚れていたから、取り替えただけだ！」

あ、確かに服が変わってる。

「すみません、一瞬亮さんのことを、変わった性癖を持った危ない
人だと思っちゃいました」

「一瞬でも思っただのか………」

「い、一瞬ですって！それで、
何が入ってたんですか？」

「これなんだが」

亮さんの手には3枚のカードが。

「見たことの無いカードなんだが……」

あれ？このカード

「優のズボンのポケットに入っていたから、優のものだろ」

「あ、はい、どうも、」

（こんなカード入ってたっけ？田中のサービスかな？）

だが、このカードは都合がいい、

おかげで俺が作るデッキのテーマができた。

30分後

「亮さん亮さん！完成しました！

^{デュエル}決闘してください」

「出来たか、じゃあするか、」

それと俺のことは亮でいい……いや、お兄ちゃんがいい」

「え？最後のほうよく聞こえませんでしたけど……」

「な、なんでも無い！俺のことは亮と呼び捨てでいいし、敬語で話さなくていい」

「わ、わかった、亮がそれでいいならそうする」

「よし、じゃあ早速決闘場デュエルフィールドへ行こう、
付いて来い」

「はい」

「付いたぞ、ほら」

亮さんから何か、白い板状の機会を渡された。

「これって……」

デュエルディスク
決闘盤だ、しかもGXのつまり新型か。

「これは優にやる」

「え？でもこれ、高いんじゃない……」

「子供は余計な心配しなくていい、ほら決闘するぞデュエル」

「はい！」

俺と亮さんは決闘場の配置に向かい合って

「
「
決闘^{デュエル}！
」
」

第6話 「カイザーの家ってお金持ちだったんだ」 b y 優（後書き）

明日から土曜まで部活の合宿までいまませんで今日3日から5日までの3日分いっぺんに投稿します、

それで、水曜日から感想くれた方は帰ってくる土曜に一気に返信します、

これで感想0件だったらへこむな

と、いうわけで次の話も今日中に投稿します

亮と翔の溝というのは、原作7話か8話のパワーボンドの回です。

亮の実家がお金持ちなのは作者の予想です。

亮の両親が別居しているのは作者の予想です。

亮がシヨタコンなのは作者の妄想です。

亮の家にメイドがいるのは作者の妄想です。

第7話 「初デユエルが7話つてどじよ」「b y 優（前書き）

こんにちは、これは4日に投稿する予定の話です、

優のデッキは何でしょう？それは読んでみてからの楽しみです。

第7話 「初デュエルが7話つてどじよ」「b V 優

「「決闘^{デュエル}!!!」」

亮 VS 優

「先攻は譲ってやる」

「分かりました」

譲るとか言ってるけどただ亮のデッキが後攻に向いてるから譲っただけだよな。

「俺のターンドロー!!!」

俺はモンスターをセット！ターンエンドです」

凄い！俺の場に裏側のカードが出てきた！これが海馬コーポレーションの力か!!!

優 LP4000 伏せモンスター×1

手札 5枚

「俺のターン、

(裏側表示か、しかしリバーズカードが無いということは、攻撃を誘っているのか?)

相手フィールド上のみモンスターがいる時、

このカードは手札から特殊召喚できる！サイバー・ドラゴン(A TK2100)を特殊召喚!!!」

亮の場には白い機械の蛇が出てきた！リアルだな、本物みたいだ！

「バトルフェイズ、サイバー・ドラゴンで伏せモンスターを攻撃！
エヴォリユーション・バースト！」

「凄い！技名叫んでる！この世界では技名叫んでも変な目で見られないからな。」

「ぐっ！伏せモンスターはグレイブ・スクワーマー（DEF0）、
だけどこのカードが戦闘によって破壊された時、フィールド上の
カード1枚破壊する！」

「サイバー・ドラゴンを破壊！」

サイバー・ドラゴンの吐いた光線がグレイブ・スクワーマーに直
撃し破壊される、

けど、その後、サイバー・ドラゴンの下から沢山の包帯が出てき
て、

サイバー・ドラゴンを道ずれにする。

「く、やるな、俺はカードを2枚セット、ターンエンドだ」

亮 LP4000 モンスターなし

手札 3枚 伏せカード2枚

「俺のターンドロー！」

（よし、モンスターがない今が攻撃のチャンス！）

俺は暗黒界の狩人ブラウ（ATK1400）を召喚」

弓を持った悪魔が出てくる。

「ブラウで亮にダイレクトアタック!!」

亮 LP4000 LP2600

ブラウが亮の胸に弓矢を放つが、亮は何事も無かったような顔をしている、

ま、ソリットビジョンだし。

「カードを1枚セットしてターンエンド」

優 LP4000 暗黒界の狩人ブラウ ATK1400
手札 4枚 伏せカード1枚

「俺のターン、ドロー、」

俺はもう一枚のサイバー・ドラゴン（ATK2100）を特殊召喚、

更にサイバー・ドラゴン・ツヴァイ（ATK1500）を通常召喚

亮の場に2体の機械の蛇が、迫力が凄い！

「なら、^{トラップ}畏発動！暗黒の謀略、

お互いのプレイヤーは手札を2枚捨て2枚ドローする、
しかし相手は手札を1枚捨てればこのカードの発動を無効に出来る、

とうする、亮

「（折角相手が発動したカードを無効にするのは、

サイバー流のリスクデュエルに反する）

いいだろう、俺は暗黒の謀略の効果は無効にはしない」

「そうですね、なら2枚捨て、2枚ドロ、
更に今捨てたカード、暗黒界の刺客カーキと暗黒界の龍神グラフィの効果発動！

カーキの効果発動！このカードが手札から捨てられた場合フィールドのモンスター一体を破壊する、

サイバー・ドラゴンを破壊！

次にグラフィの効果発動このカードが手札から捨てられた場合フィールドのカード一体を破壊する、

サイバー・ドラゴン・ツヴァイを破壊！」

一気に亮のモンスター2体を破壊する。

「ふ、やるな、なら俺も手札を2枚捨て2枚引く、

フフ」

亮さんが笑った、だがもう亮さんはこのターン通常召喚をしたし、このターンの逆転は普通無理

「サイバー・ドラゴン（ATK2100）を特殊召喚」

「ええっ！！」

再び現れる機械の蛇。

「サイバー・ドラゴンでブラウを攻撃！エヴォリユーション・バースト！」

「ぐおお！！」

優 LP4000 LP3300

「俺はターンエンド」

亮 LP2600 サイバー・ドラゴン ATK2100
手札 1枚

流石カイザー、下手すりゃ十代以上のチートドロ―と決闘戦術デュエルクイクスの持ち主。

でも、俺も負けられないぜ！

「俺のターンドロ―、

暗黒界の策士グリーン（ATK300）を召喚」

「（攻撃力300を攻撃表示？何か策があるのか？）」

「墓地の暗黒界の龍神グラファの効果発動」

「墓地からモンスター効果？」

「自分フィールド上の暗黒界と名の付いたモンスター一体を手札に戻しこのカードを墓地から特殊召喚する！」

「自身の効果で蘇生か、珍しい効果だな」

「蘇れ！暗黒界の龍神グラファ（ATK2700）！」

俺の後ろからグラファが『ズズズズ』と床から這い出てきた、かっこいい！

でも、出てくるの遅い！と言うかグラファの顔近くで見ると怖い

な！

「暗黒界の龍神グラファ……… 悪魔の龍か……」

「行くぞ！グラファの攻撃！ダークネスフレイム！！」

あつ！技名言っちゃた！恥ずかしい、でも一回言つと癖になるかも、気持ちいいし。

亮 LP2600 LP2000

「カードを2枚伏せターンエンド」

優 LP3300 暗黒界の龍神グラファ

手札 2枚 伏せカード×2

「俺のターン、ドロー！！」

フフフフ」

「何笑ってるんですか？」

「いや、面白かったな、この決闘^{デュエル}」

「まだ終わってませんよ、この決闘^{けつとつ}」

「フ、そうだな、悪かった、俺は手札から強欲な壺を発動、デッキからカードを2枚ドローする」

強欲な壺！そうか！この世界では禁止カードじゃないのか！忘れてた！

「手札から魔法カード発動、大嵐！フィールドの魔法、罾を一掃する！」

フィールド全体に風が吹き、俺の伏せカードが吹き飛んだ、うう、俺のセイバリ、マジシリが……

「更に融合魔法、パワーボンドを発動！

これは機械族専用の融合カード、融合した融合モンスターの攻撃力を倍にする！」

「倍！！でも亮さんの手札はもう1枚、

融合には、融合カードを含め最低3枚は必要なはず……」

「甘い、俺は最後の手札、サイバネティック・フュージョン・サポート、

このカードの発動によりこのターン機械族の融合は

手札、フィールド、墓地のカードを除外すれば融合素材に出来る」

「な、なんだつてー！！！」

「墓地のサイバードラゴン3体を除外し、

サイバー・エンド・ドラゴン（ATK4000）を…融合召喚！

「！」

「で、でかい」

亮の場には、首が3つあるサイバー・ドラゴン、いや、よく見ると首1つ1つ顔が

「パワーボンドの効果で、サイバー・エンド・ドラゴンの攻撃力倍にする」

サイバー・エンド・ドラゴン ATK4000 ATK8000

違っつて！攻撃力8000！？サイバー・エンドの首なんて関係ないよ！

そうだ！確かマジシリを伏せていたような
いや！！大嵐で破壊されたんだった！！！！

「りよ、亮、タンマ」

「サイバー・エンド・ドラゴンの攻撃、
エターナル・エヴォリューション・バースト！」

サイバー・エンドが3つの首からそれぞれ光線を吐いてくる。

そしてサイバー・エンドの光線がグラフィアの胴体を丸々飲み込んで

「ぐあああああああああ！！！！」

優 LP3300 LPO

デュエル
決闘が終わりフィールドに唯一残っているサイバー・エンドが消えた。

「流石亮、強いな」

「まあ、デュエルアカデミアでは実力1位とは言われているからな」

「ははは」

「ふふふ」

「よし、次は負けないぜ、そのときはまた俺と決闘デュエルしろよ！亮」

「ああ、元論だ。」

（よかった、優ももう俺に心を開いてくれた、そっちの方が俺も話しやすい）

「よし、次は勝つぞー！」

「それと優」

「ん？何だ？」

「その、優は自分の一人称は俺より僕の方がいいと思っぞ」

「何でだ？」

「そっちの方が好　ん　ん、
折角こんな可愛い容姿をしているんだ、
もっと、可愛い喋り方をした方がいいぞ」

うーん、確かに、折角良い容姿になったんだから、
そうゆう喋り方をしたほうがモテるのかな？うーんと……

「わかった、これからよろしくね！お兄ちゃん」

うーん、少し声を高くして可愛く言ってみただけど、こんなんでいいのかな？

やっぱ、お兄ちゃんはまずかったかな？一樣亮には弟いるし……

「お、おお、おおお、

（可愛すぎるぞこんちくしよ

）「

「ど、どうしたの亮！大丈夫、
凄くふらふらしてるよ！」

「だ、大丈夫だ今少し、お花畑に天使が飛んでる風景が流れてきた
だけだ」

「それって、結構危ないんじゃない……」

そんなかなで、転生して俺おれの、いや、僕ぼくの初めての決闘デュエルは終わっ
たよ！

次も読んでくれるかな？これからも応援よろしくね！

.....
「こんなんでも良いのかな、俺おれの喋り方.....」

第7話 「初デュエルが7話ってどうよ」b y 優（後書き）

優VS亮の初デュエルが終わりました、

誤字、デュエルでおかしい部分、あつたら感想でお願いします。

サイバー・ドラゴン・ツヴァイはGXでは無いカードですが、サイバーなので出しました、いいですよね……

優のデッキは暗黒界デッキ、しかも最近発売したストラクのもの、理由は作者が最近一番使ってるデッキだから。

第8話 「さりげなく6話にも出ています」「bY埋奈(前書き)

書き貯めておいた話がなくなりつつあります……

今回の話は少し分かりづらいかもしれないです。

第8話 「さりげなく6話にも出ています」by理奈

丸藤亮 視点

「実はみんなに1つ言いたいことがある」

「何でしょうか、亮様」 「一体何事でございますか、亮殿じやんの」

「実はな…」

ここは食堂、今は家に住んでいる使用人全員をここに集めている、全員といってもメイドの理奈と料理長の二人しかこの屋敷に住んでいないが…

「優、入っていいぞ」

俺が合図をすると食堂への出入り口が開きそこから小柄な少年、雷堂優が入ってきた。

「りよ、亮様、この少年は誰ですか？

（な、なんですかこの愛らしい少年は！可愛すぎますよー！！） 「

「亮殿、何処で拾ったでございますか？

（はあ、はあ亮殿、一体何処でこんな少年を買ったでございますか） 「

「子供を拾ってな、何かわけありで親も家も無いらしい、だからこの屋敷に住んでもらおうとな………」

「旦那様が留守にしている間この屋敷の主は亮様です、私は亮様の

おうせのとおり」。

（OKにきまつてるじゃないですか！ここで飼うんですか！マジですか！ハッスルしちゃいますよ！

良いんですか！）」

「拙者は構わないで」

（え！？マジでござるか！と言つことは拙者もお世話して良いでござるか！拙者やっちゃうでござるよ）」

「それはよかった」

雷堂優 視点

何だろう、ここに住んでいいことになったらしいけど、この人達、なんか嫌な気がする。

「とりあえず自己紹介を優」

「あ、はい！

えっと、雷堂優です、これからよろしくお願いします」

「こちらこそよろしく申し上げます優様、私、丸藤家のメイド東雲理奈と申します。

（雷堂優：何と可愛らしいお名前、私命を賭けてご奉仕させていただきます）

理奈さんか、というか日本に本物のメイドとかいるんだ。

そんなことより理奈さんって、美人だな、

髪は長い金髪で、目は青色、外人かな？ハーフかな？

「優殿でござるか、拙者は代々丸藤家で料理長を務めている坂本武蔵でござる」

えっと……サムライ？この屋敷の料理長？

料理長、格好は着物で腰には黒い棒、日本刀？をつけている、

顔は少し薄汚いオジサン顔で髪型はチョンマゲ、口調は何故かサムライみたい、

というか、サムライじゃん！！

「ところで亮様、優様は何処の部屋で住まえますか？

（というより、私の部屋で預かりたいです）」

「ああ、俺の部屋の隣の空き部屋を使ってもらう」

「左様ですか……………」

「亮殿、ここは拙者の部屋に住ませたいでござる」

「（料理長、抜け駆けですか！）」

「どうしてだ」

「それは……………」

「それは？」

「ここだけの話、拙者がチホモでござる」

「よし、料理長、お前解雇だ」

「えつつつつ!!!」

「俺はこれから優と風呂に入ってくる、食事の準備頼むぞ」

「りよ、亮さま、何を、い、一緒にお風呂なんて、不謹慎です!」

「優は暫く風呂に入っていないらしい、
しかも優はまだ子供だぞ」

「僕、これでも15ですけど」

「な、本当ですか!」

「ええ、まあ」

「ええい、子供でも15でも関係ない、俺は優と風呂に入ってくる、
理奈、料理長、食事の準備頼んだぞ」

「はい、かしこまりました」 「了解でござる」

「いくぞ、優」

「はい」

この屋敷の人たちみんな優しそうな人でよかった、
でもなんか、何かわから無いが嫌な気予感ががする……

第8話 「さりげなく6話にも出ています」b y埋奈(後書き)

よし、3日分終わった、これで安心して合宿に行けます、と言っ
わけで次の更新は土曜になります。

ネ、ネタが尽きて後書きに書くことが無い…

じゃあキャラ紹介でもします。

キャラ紹介

東雲理奈19歳 **メイド**

金髪で青い目の美女のメイド

坂本武蔵 **意外と若い28歳!?**

なぜに、チヨンマゲ!? 尊敬する戦国武将は宮本武蔵。

第9話 「拙者、実はガチホモでございます」bY料理長(前書き)

疲れた、どうも、合宿から帰ってきて、死にそうだなすびです、

だんだん、文章がへたくそになってきています、なぜだ!?

第9話 「拙者、実はガチホモでござる」b y料理長

「ふう、気持ちいい」

「それはよかった」

凄いな、亮ん家の風呂は、大浴場って言うんだっけ？銭湯みたいに大きい。

そしてなぜか亮は頭の上に畳んだタオルを頭に乘せるという漫画でよくあるスタイルをしている、あれやってる人始めてみたよ。

「どうした？優？」

「い、いやなんでもないよ」

「それならいいんだが」

丸藤亮 視点

優とお風呂、ふふふふ、

優やっぱいつ見ても可愛いなあ、

白い肌と、男なのにとても細い手足、やはり優は男の子というより男おにいのこ（の）娘こだな。

「亮どうしたの？」

「な、なんでもない」

「それならいいけど」

「（なんでタオル乗せてるんだらう？）」

「（どうしてこんなに可愛いんだらうか）」

雷堂優

「ふう、さっぱりした！」

「体はよく拭くんだぞ」

「はい、分かってるよ」

「よし、着替え終わった、亮早く行こうよ！」

「まで、優、ちょっとこっちに来て」

「ん？」

僕が優のとこに行くと、いきなり頭の上にタオルをかけられた。

「え、何！？」

「よく拭けと言ってるだろ」

そう言っつて亮は僕の頭を丁寧に拭いてくれた。

「よし、これでいいぞ」

「あ、ありがとう／＼」

／＼／＼
なんか、少し恥ずかしいな、何か、お兄ちゃんが出来たみたいだ

「いくぞ、優」

「はい」

食堂

「どつぞ、召し上がりください」

僕と優がお風呂から、上がって食堂へ行くと、
メイドの理奈さんと、料理長の武蔵さんが料理の準備をすませ、
僕と亮を迎えてくれた。

「いただきます」 「えっと、いただきます」

よくテレビで見る長く長いテーブルの上に二人分の食事がおいてある、

主食はクロワッサンに何枚かに切ったフランスパン、

主菜は美味しそうさステーキ、

副菜はレタス、プチトマト、コーン、ツナマヨのサラダ、

どれも綺麗に盛り付けされてて美味しそう。

「ふう、美味しかった」

「そうでござろう、何せ拙者が作った料理でござるからな」

料理長、サムライなのになぜ洋食？とは聞かないでおこう。

「デザートです」

そう言って理奈さんは僕の前によくファミレスなどで見るパフェをおいてくれた。

「わぁ、おいしそうー！」

「それは、よかったですね」

「拙者が作ったでござるよ」

そして亮の前には理奈さんが紅茶を置いた。

「亮はパフェ食べないの？」

「ああ、甘い物は苦手だな」

「そうやって紅茶を飲む亮。」

「ふーん」

「うん、パフェもおいしい！」

第9話 「拙者、実はガチホモでござる」bY料理長（後書き）

今回の話、デュエル無し、ギャグ無し、面白いところ何も無い9話です、

何ででしょう、凄く疲れたからだだと思います。

第10話 「はぁ、優、可愛いぞ、ぺろぺろ」b y 亮(前書き)

今回のついに亮の変態度が80パーセント突破!!
するの
か?

相変わらず、デュエルが少ないこの物語です。

第10話 「はあ、優、可愛いぞ、ぺろぺろ」b y 亮

雷堂優 視点

夜

美味しい夕飯を食べた後、僕と亮は今亮の部屋にいる。

「ふあああああ」

ん、あくびが。

「どうした？眠いのか？」

「え、うんだぶんそうかも」

おかしいな、まだ9時半だよ、いつもは深夜0時以降に寝るのに…
やっぱ、この体になったからかな、
この体になって時間が経てば経つほど僕の頭もだんだん、変わってきた、

口調を変えて数時間たっただけで意識しなくてもこの口調になるし、

全体的に子供っぽくなってる。

「ねむ……」

あれ、頭がくらくらして、ホームレスの時の疲れが一気にまわって

『バサッ』

ああ、気持ちい、そうか…ベッドに倒れたのか…
でも…ここ…亮の部屋じゃ、まあ、……………いっか……………

そして、僕は深いまどろみにはまっていた……………

丸藤亮 視点

優がふらふらしたと思うと、急にベッドに倒れこんだ。

「スースースー」

「寝たのか、早いな」

優は俺のベッドでとても気持ちよさそうに寝ている、
いままで、色々あったんだな。

相変わらず可愛い寝顔だな。

思わず俺は優の頭をなでる。

「にゅふー」

優は気持ちよさそうに笑った。

このままにしとくか、優を隣の部屋まで連れて行くことは出来るが
とても気持ちよさそうに寝ている優が起きたりでもしたら悪いし。

俺はもう一度優の頭をなでる。

「にゅー」

やばい、凄く可愛い、可愛い可愛い、
にゅーて、可愛すぎるだろ、こっぴつたら

「よし、少し早い俺ももう寝るか」

俺はデュエルアカデミアの制服を脱ぎ、寝巻きに着替える、
寝巻きは全体的に黒色の服、
さて、寝るか、

俺は優が寝ているベットの中に入る、
いいだろ別に一緒に寝ても、優はまだ子供だし……15歳？知っ
たこととか！

まだ眠くないが、いいか、目でも瞑れば時期に眠くなるだろ。

『ギョ』

！っ、ゆ、優が俺に抱き付いてきた！
な、何でだ！でも……暖かいな、
子供は体温が高いとたまに聞くが、確かに暖かい。

俺も優のことをそっと抱きしめた、
優しく、優しく、壊さないように、そっと……

そしたら優はもっと強く抱きついてきた、
小さな体、小さな手で、強く、強く抱きしめてきた、

そうだ、こいつ、優はこの前まで一人ぼっちだったんだ。

家も無く、

家族も無い、

不安だったんだろう、

寂しかったんだろう、

それでも、優は生きてきた、

どれくらい一人だったか何て関係ない、

優は、優は……………

そう思うと心が痛くなる、苦しくなる、

辛かったんだな、分かる、俺にもわかるぞ、

その気持、でも、今は俺がいる、いや、これからも俺が付いてい
る、

だから

これからも、一緒にいてくれ……………優

俺はもう一度、優の頭をなでる。

「にゅー」

また優は気持よさそうに笑う。

第10話 「はぁ、優、可愛いぞ、ぺろぺろ」b y 亮（後書き）

僕が小説を書いて一番嬉しいのは、感想の返事を書いてるときです、

さて、次回ですが、デュエルは……無いです、

ごめんなさい、デュエルないです、遊戯王小説なのに、でもその次の回はきつとデュエルします（多分）

第11話 「今日はZEXALの放送日」by作者(前書き)

最近暑いですね、暑いと言えば夏、それはおいといて、

デュエルアカデミアって新入生が入ってくるの秋だったような…

違つかもしれませんがこの物語は9月から新学期ということをお願いします。

第11話 「今日はZEXALの放送日」by作者

雷堂優 視点

「……………んん、もう、朝かな……………」

あれ、どこどこ？

……………ああ！亮の家に住むことになったんだっただ僕。

それにしても暖かいな、ここ。

「……ああ！りよ、亮！」

なんと、僕の前には、亮が寝ていた！な、何で！

……………あ！たしか昨日僕、途中で亮の部屋で寝ちゃったんだっけ
！？

だから、一緒に布団で、

でもいいや、暖かいし、いい匂いがする、亮……

「もう少し、寝よう……………」

僕は亮の背中に両手を伸ばして、顔を亮の胸に付けた。

暖かいな……そして、聞こえる

トクン、トクンと、亮の心臓の音、

体が違うから僕の心臓とは、音も大きさも動くスピードも違う、

でも、こうしているだけで、気持が落ち着く、
一人ぼっちだった時の不安が無くなる。

僕と亮は男同士だから、恋愛感情のような物かどうかは知らないけど、

亮いるだけでとても安心する、

なんだろう、この気持……………

まあ、いっか、今はもう少し寝よう、お休み……………

丸藤亮 視点

『P i P P i P P i P P i P P i P P i P P i P P i P P i P P i P P i P P i P P i P P i P
i P P i P P i』

ん、ケータイの目覚ましアラーム…………朝か、そうだ、
今日は大切な用事があるんだった、起きなければ。

『ピ。ッ。』

ケータイのアラームを消す、これでよし、
さて、起きるか。

しかし、起きようとしても体が動かない、なぜだ！

自分の体をよく見てみると俺の体に小さな天使、じゃ無くて、優が抱きついていて、優くっ付きすぎだ、

でも、か、可愛い、このまま起こすのがもつたいない、

ならば……………

「もう少し寝るか」

俺は再び布団に入　　りはしない、だから今日は大切な用事が

あるんだ！

俺は優を起こさないように優を放して、着替えることにする。

さつきも言ったが今日は大切な用事があるため外出する、だから服装はいつもはデュエルアカデミアの制服ではなく、私服を着る。

「ふう、着替え終わった、そろそろ優を起こすか」

今の時間は7時30分、

そろそろ料理長と理奈が朝食の用意をし終える時間だろう。

「優、優起きろ、朝だ」

「んん、た、頼む、命だけは勘弁してくれ！」

どんな寝言だ！え！『命だけは勘弁してくれ』悪夢なのか！助けたほうがいいのか？

「ゆ、優……」

「わかった、うまい棒3本でどうだ！……
よし、契約成立だな」

何か知らないが助かったらしいぞ！しかし相手のほうは30円でいいのか！

とか言ってる内に時間はもう35分、そろそろやばい。

「優、起きるんだ、朝だぞ」

「んー、あれ、ここは？」

あーりよ、亮、おはよう」

「ああ、おはよう、早速だがそろそろ朝食だ、
着替えはここに置いておく着替えておけ、

今着ている服はその辺に置いておいてくれ、じゃあ俺は部屋を出て
るから、

着替え終わったらこい」

「うん、わかった」

雷堂優 視点

「うん、わかった」

僕がそう言うと亮は部屋を出て行った、
そっぴゃ僕この服のまま寝ちゃったんだ。

「えっと、服服、これが」

僕は机の上にTシャツと半ズボンがおいてあったので、
着替えることにする。

僕が服を脱ごうとすると、後ろから視線が……

振り向いてみると、ドアの隙間から、亮が僕を覗いていた。

「亮、何してるの?」

「!」

すると亮は驚いた顔をして

「ち、違う!覗いていた訳じゃない!

本当だ、少しドアが開いていて、閉めようとしたら、中が少し見えただけだ!」

「本当?」

「ほ、本当だ……お、俺がう、うしょしょ、つく訳にやいだろ」

「亮、日本語でお願いします」

「だ、だから俺が嘘をつく訳無いだろう！」

必死になっている亮、
なんか、逆に怪しいです。

「わかったよ、じゃあ僕もう着替えるから」

「わ、わかった、着替え終わったら来てくれ」

閉まる扉、
別に着替えぐらい見られても僕的には困らないんだけどな……
男同士だし。

しばらくして、無事着替え終わった僕は、亮の部屋から出る、

そして部屋の外は赤い絨毯とんないまじが引かれた大きな廊下、
相変わらず大きいな、亮の家。

「着替え終わったのか、優？」

「うん」

「じゃあ行くか」

「はい」

先に行く亮の後姿を僕は付いて行く。

第11話 「今日はZEXALの放送日」by作者（後書き）

〜作者のどうでもいい話コーナー〜

やってきました新コーナー、このコーナーでは作者の本当どうでもいい話をここに書くというどうでもいいコーナーです、でもやります、では第一回！いってみよう！

第一回「どうでもいい話」

今日部活があつて、電車で学校まで行ったんですよ、そしてその帰りのどが渴いたので「スーパーで飲み物でも買おうかな」と思いスーパーに入ったらなんとかなり安い値段でソーダが売ってたので買うことにしました。

レジに並んでPASMで払おうとしたら使えないと言われ仕方なく小銭が無かったので野口さんで買ったんです、そしてやっと飲めると思いソーダを飲もうとするとソーダというよりただの炭酸水で甘くなく味が無かったので凄くショックでした。

まあこんな感じですが、ホントどうでもいい話でしたね……………

第12話 「優様と2人っきり」フッフ」by理奈（前書き）

つ、ついに書き貯めが無くなった、よって明日から毎日投稿できるか分かりません。

そういえばZEXALの世界では表側守備でモンスターを召喚しませんね、GXや5D'sのせいで表側守備で召喚できると勘違いする小学生がたくさん出るからだろうか？しかもZEXALってなんか初心者に優しい物語だし。

最近勉強が難しい、娯楽遊樂が断ち切れないです、しかも最近アニメが面白い。

第12話 「優様と2人つきり…フッフ」by理奈

食堂

「おはようございます、亮様」

「おはようございます、亮殿」

食堂に着くと、テーブルの上にはもう朝ご飯は並べられていて、この屋敷のメイド、理奈さんと、料理長さんがあいさつをしてくれた。

「おはよう、理奈」

「おはようございます、理奈さん」

僕と亮は理奈さんに、挨拶をする。

「おはようございます、優様」

「優殿、おはようございます」

「理奈、今日の朝食は何だ？」

「はい、こちらでございます」

理奈さんは僕たちをテーブルまで連れて行き、イスに座らせてくれた。

朝ご飯は、パンに、スクランブルエッグ、ベーコンとサラダ、そしてコーンスープだ。

「わぁ、おいしそう!」

「そうでござろう、拙者が作ったでござ」

「それは、よかったですね、優様」

「……………」

「では、冷めない内にどうぞ」

「うむ、いただきます」

「いただきます!」

うん、おいしい、特にコーンスープ、

転生前に妹とよく飲んだインスタントのコーンスープは、
味が濃かったり、薄かったり、しておいしくなかったからな
最後のほう溶けてないし、これだから安物は。

「（優様、とっても美味しそうに食べていらしています、
可愛いですわ、キョートですわ、ラブリーですわ）」

「（なんだろう、背筋に寒気が…………）」

「ごちそうさま」

僕が朝ご飯を4分の3ぐらい食べ終わると、

亮はもう食べ終わっておりごちそうさまも言っていた。

「理奈、いきなりで悪いが俺は出かけてくる、家の事、優の事頼んだぞ」

「そう言えば、今日でしたね、行ってらっしゃいませ、亮様」

「ああ、行ってくる」

「今日どっか行くの？」

「ああ、少し用事があったな、夕飯までには、帰ってくる、それまでいい子にしているんだぞ」

「はい」

「いい返事だ」

亮は僕の頭を撫でる、気持ちいいな

「（優様の頭…私も撫でたい……………）」

「亮行ってらっしゃーい」

「行ってくる」

亮は食堂から出ようとする、

亮、今日はないのか、

寂しいな…まあ用事があるのなら仕方ないか。

「亮殿、行つてらっしゃいでござる」

「……………」

「（なんでだろうか、今日はいまだに人と会話していないでござる）」

しばらくして、僕も朝ご飯を食べ終わった。

「「ごちそうさま！」」

そう言つと理奈さんが僕の食器を片付けてくれた。

亮がないのか…じゃあ今日はどうやって過ごそう…

とりあはず自分の部屋に行こうかな？

「じゃあ僕、部屋に戻ってるね」

「そうですか……………」

僕は自分の部屋に戻ることにする、

少し、理奈さんが残念そうな顔をしたのは気のせいだろうか…

「えーっと、たしかここが亮の部屋だから……ここか」

自分の記憶をたどり、食堂から亮の部屋まで戻った、
ふう、よかったじゃあ部屋に入るか。

『ガチャ』

「わああ！綺麗な部屋だ！」

昨日亮が使っていていいと言われた僕の部屋は、
転生前住んでいた、自分の部屋より広くて、綺麗だ、
うん、広い、ベッドに机とダンスしか家具が無い……

なんか…綺麗過ぎて寂しい部屋だな。

「とり合図、何かしようかな……」

何もしないのは、好きじゃないのでとり合図この部屋にあるものを確認してみる。

まずはダンス……中身は

お！たくさんの子供服が、この家は亮と理奈さんと料理長の
3人で暮らしていると言ってたのにどうしてこんなに服が……

「あれ？」

そう言えば、原作キャラの翔って、亮の弟だよな、
なんで一緒に住んでないんだろう……謎だ。

ま、それは置いていて、次は机の中をしてみる。

「何も入っていない……」

1つ分かった……この部屋、何も無いな……

「……ひまだ」

.....

「ひまだ」

な、なんてこった！これ以上になく暇だ、
どうしたものか…今の時間は…9時、
朝ご飯からまだ2時間経ってない…

「ひまだな」

！そうだ！！探検でもしよう！！」

このままだと暇すぎて、死にそうな勢いなので、
この屋敷の探検に行こうと思う。

じゃあ、早速屋敷探検に出発だ！

亮の家の探検中、広いな、亮の家は、

大きい廊下に、壁には、高そうな絵が何枚も架けられている。

更に暫くこの屋敷を探検していると、金髪の女性が窓を拭いていた、

と言うか、理奈さんだね、この家今は亮と理奈さんあと料理長の4人しか住んでいないみたいだし。

声かけてみようかな？

「おい、理奈さん！」

「あ！ゆ、優様！」

「理奈さん、何してるの？」

「まあ、仕事です」

「仕事？」

窓拭きが仕事？

「はい、私の仕事は、この屋敷の掃除、洗濯、買出し、調理、などの家事全てをするのが仕事です」

「ホント！すごい！大変じゃないの!？」

「はい、確かに大変ではありますが、もう慣れました、さらに、料理は料理長がほとんどやっていますし」

この屋敷の家事をほとんど1人で、凄いなあ、
どっかの借金執事レベルだ。

「じゃあ、僕も手伝うよ！」

「えーいや、めっそも無い、優様に私の仕事を手伝わせるなんて
「！」

「いいよ、いいよ、僕も暇だし」

「しかし……………」

「…だめ？」

「（やっぱり優様は可愛いですわ！）

分かりました、でしたらお言葉に甘えてさせてもらいます
じゃあ、この雑巾で窓を拭くのを手伝ってください」

「うん、わかった！」

僕は理奈さんから雑巾をもらい、窓拭きを手伝うことにする。

「ところでさあ、理奈さん」

窓を拭きながら理奈さんに声をかける。

「何でしょうか？優様？」

「この屋敷ってさあ、今は僕と亮、
理奈さんと料理長の4人しか住んでいないんでしょう」

「はい、そうですが」

「亮のお父さんや、お母さんとか、弟さんとかいないの？」

僕の質問に対して理奈さんは、

動かしていた手を止めた、そしてしばらくして、喋りだした。

「旦那様は、仕事でしばらくこの屋敷には帰ってきません、

そして奥様は……数年前、亮様の弟の翔様を連れて、

この屋敷を出て行ってしまいました」

「…そ、そうだったんですか」

離婚、別居ってやつかな、あまり、いいことではないよね。

「もしかして、聞いちゃいけないことだった？」

「い、いえ！そうゆうことではないです！」

少し、暗い感じになってしまったが僕と理奈さんは無事この屋敷の掃除を終えた。

「ふうう〜、おわったー」

「ありがとうございます、優様」

「いいよお礼は、暇つぶしにやってただけだもん」

「そうですか、時間はまだ10時、
昼食まではまだ時間がありますね、どうしましょう」

『グウウウウウウ』

あれ？お腹が……

「ふふ、何かお作りになりましたか？優様？」

「お願いします」

ここは、理奈さんの優しさに甘えることにする。

食堂

いま僕は食堂にいる、掃除を手伝ったお礼に
理奈さんが何か作ってくれるらしい。

「お待たせしました」

理奈さんがホットケーキを焼いて持ってきてくれた。

「いただきます」

うん、おいしい。

「よかった、美味しそうに食べてくれますわ、
ああ、優様はいつ見ても可愛いわぁ」

僕がホットケーキを食べている間、
理奈さんはずっと僕の顔を見ていた、何か怖い…

「あ！そう言えば理奈さんってどうしてここで働いているんですか
？」

ホットケーキを食べながら理奈さんに質問する。

「ここで働いている理由？」

そうですね、話すと長くなりますが

「

10年以上前のことで、よく覚えていませんが、
私の父が自殺して、母が事故で死んでしまって、

私は1人きりになってしまったのです。

周りには頼れる親戚がいなくて本当に1人になってしまって。

しかし雨の日に、近所の公園で雨宿りしていた時です、
亮様が現れて、私を家まで連れて行ってくれたのです、

家の人たちはみんな優しい人たちで、私はこの屋敷に住んでいいことになりました、

そして私はその恩返しとしてこの屋敷のメイドになることを決意したのです。

「ま、簡単に言うところな感じですが、
すいません、かなり昔の話なのでうまく話せなくて…」

「そ、そうか、理奈さんにそんな過去が……………」

と、いうことは僕は亮の執事ならぬといけないのかな？

とか思っている内にもうホットケーキは全部食べ終わっていた。

「ふう、おいしかった、

「ごちそうさまでした」

「それは良かったです、

しかしまだ11時、

「昼食までまだ時間がありますね」

「そっか、掃除はもうしたし、

他に何か手伝うこと無い？」

「い、いや、もう優様に手伝ってもらうことは無いですね

（私は優様に掃除を手伝ってもらっただけでも十分ですわ！）

「じゃあさあ、決闘デュエルしようよー！

時間があるんでしょ!」

「でゆ、決闘デュエルですか?

一様できますが」

「じゃあ決まり!早速決闘場デュエルフィールドに行こうよ!」

僕は理奈さんの手をつかみ、決闘場デュエルフィールドに行こうとする。

「(ゆ、優様の手………小さくて暖かい……)」

「どうしたの?早く行こうよ!」

「はい、そうですね!」

東雲理奈しのめりな 視点

私と優様は決闘場デュエルフィールドに行く前に優様の部屋に向かっています、理由はデッキと決闘盤デュエルディスクをとりに行くため。

そういえば私もここしばらく決闘デュエルしてませんでしたわ、

昔は料理長デュエルとよく決闘したものです、

ま、1日中決闘デュエルしてて旦那様に昔とても怒られた事もありました
が……

「ついた、少し待ってね、すぐ取ってくるから」

「はい、了解しました」

しばらくして、優様がデッキと決闘盤デュエルディスクを持ってきたため、次は私の部屋に向かっています。

久しぶりの決闘デュエル、ワクワクしますわ、さらにお相手が愛いとしの優様だなんて、今日はとてつもなく付いてますわ！！

デュエルフィールド
決闘場

今私と優様は決闘場デュエルフィールドにいます、そして2人は向かい会い決闘デュエルできる状態です。

「理奈さん、行くよ！」

「ええ、いつでもどうぞ」

「「決闘デュエル！！」」

第12話 「優様と2人つきり」フッフ」by理奈（後書き）

ふう、疲れた、この話、アニメの遊戯王見ながら作ったため凄く
下手な文です。

（作者のどうでもいい話コーナー）

やってきましたこのコーナー、2回目本当にあったのが、見たい
な感じですがあります、では行ってみよう!!

第2回「どうでもいい話その2」

最近オタクの部活友達からギャルゲーを借りてやってみたところ、
凄く面白くていままでギャルゲーをバカにしていた自分をぶん殴り
たい気分になりました。

終わりです、うん第一回より話のボリュームが落ちたな、まあい
つか、どうせどうでもいい話なんだし、きつとみんなこのコーナー
飛ばしてると思うし……………

第13話 「理奈殿！抜駆けでござるか！」 b y料理長（前書き）

長かった、そして明日は投稿できそうでないです、
更に、書き貯めが無くなったと同時にネタも無くなった、
ネタを考えとかないと。

第13話 「理奈殿！抜駆けでござるか！」 by 料理長

「決闘^{デュエル}！」

「先攻は理奈さんにあげるよ、

レディーファーストってやつだよ」

「紳士ですね、ではお言葉に甘えて、

私のターンドロ、私は手札からヘカテリスを捨て効果発動」

ヘカテリス？まさか天使デッキ！？

「ヘカテリスの効果、このカードを手札か捨てる事で

デッキから神の居城 ヴアルハラを発動」

これはまた厄介なカードを…

「ヴァルハラの効果発動、自分フィールドにモンスターが存在しない場合、

手札から天使族モンスター1体を特殊召喚する、

私は手札から光神テテユス（ATK2400）を特殊召喚！」

大きな羽が生えた天使だ、綺麗だな……………

「更に、手札から代行者と名のついたモンスター1体をゲームから除外し

マスター・ヒュペリオン（ATK2700）特殊召喚する」

今度はとても大きな天使？なのかな？

何か炎の翼を持ったおっさんが出てきたと言った方が合ってるかもしれない……………

「更に私はモンスターをセット、ターンエンドです」

理奈 LP4000 光神テテユス ATK2400 マスターヒ

ユペリオン ATK2700

手札 1枚 伏せモンスター 神の居城 ヴァルハラ

やばいな、理奈さんの場には2体の上級モンスターが、さて、とりあはずカードを引いてから考えるか。

「僕のターン、ドロー、

僕はカードを2枚伏せ、魔法カード手札抹殺を発動、

お互いのプレイヤーは手札を全て捨て、捨てた枚数カードをドロする

僕は3枚ドロー！」

「私は1枚ドロー」

「行くよ！今墓地に送った暗黒界の武神ゴールド（ATK2300）の効果発動、このカードが手札から捨てられた場合、

このカードは特殊召喚できる」

ゴールドってゴールドを文字った感じだから金色してると思いきや暗い黄色だな、ま、いいか。

「更に、ゴールドと一緒に墓地に送った暗黒界の龍神グラファの効果発動、

このカードは手札から墓地に送られたとき相手フィールド上のカ

ード1枚を破壊する、
理奈さんのマスター・ヒュペリオンを破壊！」

「く、ヒュペリオンが、
しかし優様のゴルドの攻撃力は2300、
私のテテユスの攻撃力2400には100ポイント足りませんよ」

「分かってます、僕は暗黒界の尖兵ベージ（ATK1600）を召喚」

「しかし、このカードの攻撃力は1600、伏せモンスター狙いで
すか？」

「うっん、両方だよ、僕は場の暗黒界の尖兵ベージを手札に戻すこ
とで、

墓地の暗黒界の龍神グラファ（ATK2700）を特殊召喚する
！」

亮のときみたいに僕の後ろからグラファが『ズズズズ』
と音を立てて床から這い上がってくる。

「いくよ！バトルフェイズ！
ゴルドで伏せモンスターを攻撃！」

「伏せカードはライトロード・ハンターライコウ（DEF100）
このカードがリバーズした時フィールド上のカード1枚を破壊す
ることができます」

「えええええ！！！」

「暗黒界の龍神グラファを破壊します」

「ゴールドが伏せカードを攻撃すると、伏せカードからライコウが現れ、

ゴールドの攻撃をかわした、そしてそのままグラファに噛み付いた、グラファは何故か攻撃力200のモンスターに噛まれただけで破壊されてしまった。

「グラファ!!!」

ライコウはグラファを破壊した後、
時空を歪めて、どっかに行ってしまった、
ジャステイスワールドにでも帰ったのかな？

「攻撃する順番を間違えましたね、優様」

「くっそう、僕はカードを1枚伏せターンエンド」

優 LP4000 暗黒界の武神ゴールド ATK2300
手札 2枚 伏せカード×3

理奈さん、強い……でも、負けないぞ！

「私のターン、ドロー、」

このとき、テテユスの効果を発動、

ドローしたカードが天使族モンスターだったとき、

もう一度ドローできる、私が引いたカードは天使族の神聖なる（
シャイン）球体（ATK500）

よって一枚ドロー、引いたカードは神聖なる球体よってもう一枚
ドロー、

引いたカードは神聖なる球体、よつてもう一枚ドロ、
マスターヒュペリオンドロー……………これで終わりです」

神聖なる球体3枚つて……………手札に来ててもそんな意味無いな……………

「バトルフェイズ！テテユスでゴールドを攻撃します、
シャインスパーク！！」

「なら、畏発動、聖なるバリア ミラーフォース、
相手の攻撃宣言時に発動でき、相手攻撃表示のモンスター全てを
破壊する」

テテユスの攻撃が弾き返され理奈さんの場合は、
永続魔法のヴァルハラのみ。

「…少し油断しました、
メインフェイズ2に入ります、

ヴァルハラの効果で手札の神聖なる球体（DEF500）を守備
表示で特殊召喚、

さらにもう一体神聖なる球体を守備表示で召喚、ターンエンドで
す」

そうか、そついやこの世界では表側守備ができたんだつげ。

理奈 LP4000 神聖なる球体DEF500 x2
手札 3枚 伏せカード無し 神の居城 ヴァルハラ

「僕のターンドロ、魔法カード闇の誘惑を発動、
デッキからカードを2枚引き、その後手札の闇属性モンスター1
体をゲームから

除外する、僕は2枚ドロ、そして暗黒界の軍神シルバを除外」

「手札を2枚補充するカード、だったら強欲な壺の方がいいのでは？」

「それを言うてはだめです

でも、このカードを使えばどうか……… 畏発動！闇次元の開放、ゲームから除外された闇属性モンスターを蘇生させる、

さつき闇の誘惑で除外した暗黒界の軍神シルバ（ATK2300）を特殊召喚！」

ゴルドの次はシルバ、なんか金閣、銀閣みたいだな、ほら瓢箪のあれ。

「さらに暗黒界の尖兵ベージを召喚、

そしてさっきのようにベージを手札に戻し、

墓地からグラフィア（ATK2700）を特殊召喚する」

「自分で何度も蘇るモンスターですか……… 厄介です」

僕の場合には攻撃力2300のゴルドとシルバ、更に切り札のグラフィアもいる、

そして理奈さんに場に伏せカードは無い、これはチャンス！！

「バトル！ゴルド&シルバで球体^{ボール}を攻撃！」

ゴルドは斧、シルバは剣^剣で球体^{ボール}を破壊する。

「そしてグラフィアで理奈さんにダイレクトアタック！

ダークネスフレイム！」

「グラフィアが理奈さんに黒い息？光線？ゲロ？を吐く、多分光線かなんかだろう。」

「きゃああ！！」

理奈 LP4000 LP1300

「ターンエンド」

優 LP4000 暗黒界の武神ゴルド ATK2300 暗黒界の軍神シルバ ATK2300

手札 4枚 暗黒界の龍神グラフィア ATK2700

闇次元の開放（シルバ対象）伏せカード×0

「やりましたね、優様、なら私も行かせてもらいますよ、

私のターン、ドロ、ヴァルハラの効果でマスター・ヒュペリオ

ン（ATK2700）

を特殊召喚！」

再び出てくる、天使。

「更に死者蘇生を発動、墓地の光神テテュス（ATK2400）を蘇生」

コイツもさつき見たやつ。

「そして私の墓地の天使族モンスターが4体のみの場合、大天使クリスティアは特殊召喚できる、

私はの墓地にはヘカテリス、マスター・ヒュペリオン、

そして2体の神聖なる（シャイン）球体、よって現れなさい！」

理奈さんの場の上空に大きな雲の渦ができて、そこから赤い羽根をもった光輝く天使が降りてきた。

「大天使クリスティア（ATK2800）光臨！」

やばいな…理奈さんの場には、攻撃力2000以上の上級天使が3体もいる、

しかもクリスティアがいる限りモンスターの特殊召喚は出来なかったような……

つまり手札のバトルフェーダーが使えないだと！

「マスター・ヒュペリオンの効果を発動します、墓地の天使族、光属性のモンスター1体を除外することで、フィールド上のカードを1枚選択し破壊します、墓地のヘカテリスを除外して、グラファを破壊します、ビッグバンスヒィア！」

ヒュペリオンが手に真つ赤な球体を作り出し、グラファに向かって放った。

ヒュペリオンが放った、球はグラファに直撃し、そのまま溶けてしまった。

「このカードは、自身の効果で何度も蘇生する厄介なモンスター、しかし私の場にクリスティアがいる限りお互いに特殊召喚は出来ませんよ、

つまり、もうグラファは無力です」

「く、くそう……」

「行きます！テテユスとヒュペリオンでゴールドとシルバを攻撃」
ゴールドはテテユスのビームで、
シルバはヒュペリオンが作り出した赤い球体で破壊された。

優 LP4000 LP3500

もう僕の間にはカードが無い、このままじゃ危ない。

「クリスティアで優様にダイレクトアタック！」

「あわああ……」

ソリットビジョンだと分かっててもモンスターのダイレクトアタックは怖いなあ……

優 LP3500 LP700

「私はターンエンドです」

理奈 LP1300 光神テテユス ATK2400 マスター・
ヒュペリオン ATK2700
手札 1枚 大天使クリスティア ATK2800 伏せカード
x0

「くそう、僕のターン、ドロー！」

こ、このカードは、よし！僕は手札から魔法発動強欲な壺
効果でデッキからカードを2枚ドロー

（よかった、昨日夜ご飯食べた後亮に頼んでデッキ編集させても

らったから)」

「この状態からの強欲な壺、偶然か、優様の引きの強さか……………」

僕がドロ―したカード、それは……………」

「きた！やったあ！」

「（な、何を引いたのでしょ…）」

「行くよ！僕はフィールド魔法、暗黒界の門を発動！」

僕の後ろから、『ガガガガ』と音を立てて、
大きな門が現れた。

「早速、暗黒界の門の効果を発動、1ターンに1度墓地の悪魔族モンスターをゲームから除外し、
手札を一枚捨てる」

「一見デメリットまみれの効果と思いきや、
手札から捨てられることで発動する暗黒界デッキにとっては十分にメリットがある。」

「墓地の暗黒界の斥候スカーをゲームから除外し、
手札の暗黒界の刺客カーキを捨てる、

そしてカーキの効果、このカードが手札から捨てられたとき、フィールド上のモンスター1体を破壊する、
大天使クリスティアを破壊」

「しかし、クリスティアは墓地に行くときデッキの一番上に戻りません」

クリスティアは光の粒子になって理奈さんのデッキの上に集まり、カードになった。

でも、山札の上に戻っても関係ない、
このターンで決着を決める！

「暗黒界の門の効果はまだ続いている！
手札を1枚捨てた後、デッキからカードを1枚引く」

僕が引いたカード、それは

「今引いたカード、暗黒界の門を発動！」

「に、2枚目ですか！」

後ろにある門が鏡のように『パリン』と割れたと思うとすぐにまた門の形に戻った。

「暗黒界の門の効果発動！墓地の暗黒界の刺客カーキを除外し、手札の暗黒界の龍神グラファを捨てる」

僕は手札のグラファを上投げると、門が少し開き吸い込んでいった、

これ本当にソリットビジョン？

「グラフィアが捨てられたとき、フィールド上のカード1枚を破壊する、

マスター・ヒュペリオンを破壊」

グラフィアのカードを吸収した門からいきなり黒いビーム砲が飛び出し、

マスター・ヒュペリオンに直撃した、

もちのろんでマスターヒュペリオンは破壊されたよ。

「く、私の天使が2枚も……」

「そして、門の効果で1枚ドロー」

引いたカードは……

ふふ、今日は付いてる。

「僕は暗黒界の尖兵ページを召喚、

そして例の如くページを手札に戻し、墓地のグラフィアを特殊召喚
！」

今回3回目の登場ページさん、

でも全部グラフィア蘇生のために手札に戻されている気が………気のせいだよね！

暗黒界の龍神グラフィア ATK2700

ATK3000

「グラフィアの攻撃力が上がった!?」

「何と、暗黒界の門にはまだ効果があつて、場の悪魔族の攻撃力・守備力を」

「300ポイント上げる効果があるんです」

「万能ですね、その門」

「そして最後に死者蘇生を発動、墓地の2枚目のグラフアを蘇生！」

後ろにある門が『グラフア』とゆれると、門が『バン』と大きな音を立てて開き、そこにはグラフアが立っていた。

『グラフアアアアアアア！！！』

大きな雄叫びを上げるグラフア、何故か門があると、決闘デュエルの演出が濃くなるな……………

「僕の場合には攻撃力3000となったグラフアが2体、理奈さんの場合は攻撃力2400のテテユス、理奈さんの場デュエルに伏せカードは無し、つまりこの決闘僕の勝ちですね」

「甘いですよ優様、私のこの手札、これはオネストです、攻撃した瞬間、カウンターで私の勝ちですよ」

「いや、これ3枚目の神聖なるホーリー（シャイン）球体ボールでしょ、テテユスの効果で引いた」

「……………記憶力がいいですね……………優様」

理奈

LP1300

LP0

「ありがとうございます、優様、久しぶりの決闘^{デュエル}、楽しかったです」

「いや、いいよお礼は、さっきも言ったけど、僕も暇だったし、悪く言っちゃうと暇つぶしの決闘^{デュエル}だったし」

「いえ、それでも、十分に楽しめました、ありがとうございます、優様」

「じゃあ、僕も、理奈さんと決闘^{デュエル}して、楽しかった、ありがとうございます、理奈さん」

「あら、うふふ」

理奈さんは上品に笑う。

「あはは」

僕も笑う。

今日は、僕と理奈さんが少し仲良くなった気がする日だった。

夜
食堂

亮は夕食前に帰ってきて、今僕と亮は一緒に夜ごはんを食べている、

理奈さんと料理長はいつもの通り僕たちが食事している所を見ている、

いつも思っけどこの2人はちゃんと僕たちが食べた後、しっかり食事とってんだよね、たまに不安になる………

「えー！理奈殿今日優殿と一緒に掃除して、ホットケーキ食べて、決闘デュエルしたのでござるか！」

料理長がいきなり叫び出した、その言葉に亮が、反応した。

「料理長、今何て言った？」

「え、いや、だから、優殿と理奈殿が今日2人っきりで、掃除したり、決闘デュエルしたらしいでござるよ」

「ほ、本当か理奈？」

「はい、もちろんです」

何故か自信満々に答える理奈さん。

「（う、うらやましい…）」

「優殿、では明日は、拙者と優殿の2人っきりで料理したり、決闘デュエルしたり一緒に寝たり、楽しいことしようぞる」

「な、何で………」

「拙者、実はガチホモでござる」

「亮、いままでありがとうございました」

「ま、まて！優ここは料理長を解雇にするから、それだけでいいだろ」

「うん、わかった」

「優殿、何で拙者が解雇になるとこんな満面の笑みになるでござるか！」

そんなかなで今日も、1日楽しかったな。

「優、明日は俺と一緒に決闘したり、遊んだり、お話しおはなししよう！」

「りょ、亮まで……………」

第13話 「理奈殿！抜駆けでござるか！」 by 料理長（後書き）

ふう、皆さんお気づきだと思いますが優のデッキはSD『デビルズゲート』を少しいじったものです、デッキの内容はSDデビルズゲートを3つ買って、使える罠・魔法カードを何枚か入れた感じですが、詳しくは言いません、理由は作者の都合によってデッキの内容が変わることがあったりするためです、

だから優のデッキは暗黒界デッキだと思ってくれればいいです。
はい！優のデッキ紹介終わり。

ところで遊戯王のルールの『コスト』って何でしょう？
少しなら分かるんですが、詳しくは分かりません、
知ってる人がいたら教えてください！

自分で調べるよという感じですが、僕のパソコン『遊戯王Wiki』が見れないのです、くそ、無念……………

作者のどうでもいい話コーナー

後書き結構書いてるのに、このコーナーはやりませ、一様2000文字まで入力できるらしいので。

第3回「どうでもいい話その3」

遊戯王カードが付いてくるといのでジャンプを買ったんですが、いつの間にか知らない漫画がふえてて話が全然分かりませんでした、付録のカードも自分のデッキとはあまり合わないし、使い難かったです。

うん、なんか遊戯王小説っぽい後書きが書けた気がします。

第14話 「料理長の部屋汗臭っ！」 b y 優（前書き）

今回の話しは文がいままで以上に下手糞でした、いいですよねた
まには、

え？いつもそつだつて、そんな事言わないでください、心が折れそ
うです……………

第14話 「料理長の部屋汗臭っ！」 b y 優

『ミーン、ミン、ミンミンミン、ミーン、ミン、ミンミンミン』

「う、うるさい」

今日僕は、聞いてるだけで暑苦しくなるセミの鳴き声で目を覚ました。

「どつせなら、小鳥の囀りたぐりで目を覚ましたかったな……………」

まあ、その程度のことのでグチグチ言っても無駄なので、早速着替えることにする。

今着ているパジャマを脱いでベットのの上に置く、
そしてタンスの中から適当にTシャツと半ズボンを取り出し着替える。

「よし！こんなもんか」

着替え終わったので、隣の亮の部屋に行こうと思う、
まだいまいちこから食堂までの道のりがよく分からないから、
広すぎるよ丸藤家。

『コンコン』

「亮、起きてる？」

亮の部屋の扉をノックする。

『ガチャ』

「早いな、優」

暫くしてデュエルアカデミアの制服を着た亮が出てきた、
亮いつもこの格好なのかな？

「おはよう、優」

「あ、うん、おはよう亮」

「さあ、朝食を食べにいくぞ」

「うん」

僕と亮は食堂に行つて朝食を食べた、
今日も料理長がガチホモ発言して亮が解雇しようして、
料理長が命乞い、いや解雇乞いしている感じだった。

「亮は今日も用事があるのか」

ここは自分の部屋、亮は今日も用事があるらしく
何処かへ行ってしまった、よって今日もヒマだ、どうしよう………

「昨日みたいに探検に行こうかな？」

今の時間は9時、亮は今日もないからつまらない、
と、言う訳で僕は再び探検に出発する。

10分後

ただいま丸藤家を探索中、

うーん、少し遠くまで来ちゃったな、

自分の部屋まで戻れるかな？って家の中で迷子ってシユールすぎるな………

とゆう不安を抱えながら屋敷を歩いていると、何か普通とは違う

部屋を見つけた、

何故かこの部屋だけ扉ではなく襖ふすまだった。

僕は好奇心で襖を少し開けると

「ふんっ！……ふんっ！……ふんっ！……」

中には着物を着てチヨンマゲで30代後半ぐらいのおじさん

んが
木刀をもって素振りをしていた、

というか料理長だよね……この家僕と理奈さんと亮と料理長の4人しか住んでないもん。

「む、何者！？……なんだ優殿でござるか」

「こ、こんにちは、料理長さん」

「何か用でござるか？」

「いや、別に、特に用はないよ、

偶然通りかかっただけ」

「そつでござるか、でも折角来たんだし、

お茶ぐらい出すでござるよ」

「そつ、じゃあお言葉に甘えて」

僕は料理長の部屋に入る、

この部屋だけ畳みだ、そして汗臭っ！

「お茶でござる」

そう言つて料理長から紅茶をもらった、
ここは日本茶じゃないんだ。

とりあはず、料理長からもらった紅茶を飲んでみる、あ、意外と
おいしい。

「意外とおいしいですね」

「意外は余計でござる……………」

「ははは、」

それはそうと、何をしていたの？」

「ああ、ちよつと鍛練を」

「たんねん？」

「そつでござる、」

毎日の日課で空いた時間に修行を……………」

「修行……………」

何の修行？

剣道かな？

「そつだ優殿、折角来たのだから何かしていくでござるか、
ふとんならもう用意してあるでござる」

「いえ……結構です」

「ははは、冗談でござる、
デュエリストデュエル
では決闘者らしく決闘でもしてくでござるか」

デュエル決闘か、まだ料理長とは決闘したことなかったな。

「うん、いいよ」

「じゃあ決まりでござる」

「あ！でも決闘盤部屋に忘れた、
デュエルディスクデュエル
デッキなら持ってきたけど………」

「それなら心配無用、拙者決闘盤2つ持っているでござる」
デュエルディスクデュエル
そう言つて料理長は決闘盤を1つ渡してくる、
う、汗臭！

「さあ、決闘でござる」
デュエルデュエル

「う、うん……」
デュエルディスクデュエル
（どうしよう、この決闘盤使ったら、デッキがこれ以上になく
汗臭くなるなる事は確実だよ」

「どうしたでござる？」

「い、いや、なんでもない」

とりあはず持っていたウェットティッシュで軽く決闘盤を拭いて
デュエルディスクデュエル

おく、

「これでなんとか……………」

「^{デュエル}決闘!!!」

第14話 「料理長の部屋汗臭っ！」 b y 優（後書き）

次回料理長VS優、どちらが勝つのか？

そして料理長のデッキは何なのか！？

～作者のどうでもいい話～

このコーナーいつまで続くんだろう？まあ続けば続くほど僕の人
生に無駄が多いことが証明されますね。

第4回「どうでもいい話その4」

この前遊戯王の映画を動画で見たんですが、映画のSinの効果
ってOCGとかなりちがいますね、映画のSin強すぎ。

なんかもうどうでもいい話じゃなくなってきましたね……………次回
からやめよっかなこのコーナー。

第15話 「理奈殿、これでおあいこでござる」b y似非侍(前書き)

一週間連続投稿達成！次は2週間連続投稿を目指そうかな？無理っぽいなもう書き貯めないし、今週は親がいなくて、1日中PCの前にいられたからできたわけだし。

第15話 「理奈殿、これでおあいこでござる」by似非侍

「決闘^{デュエル}!!!」

「先攻はいただくでござる、拙者のターンドロー!

拙者はクイーンズ・ナイト(ATK1500)を召喚でござる」

西洋の鎧を着けた金髪の女性騎士……

料理長のことだから侍系のカードを使うと思ったのに……

「そしてカードを2枚セット、ターンエンドでござる」

料理長 LP4000 クイーンズ・ナイトATK1500

手札 3枚 伏せカード×2

「僕のターン、ドロー!

僕は暗黒界の狂王ブロン(ATK1800)を召喚」

狂王ブロン、王ってことはコイツが暗黒界の親玉かな?

「ブロンでクイーンズ・ナイトを攻撃!

イビル・ハンド!!!」

ブロンが腕を伸ばしクイーンズ・ナイトの心臓を貫いた、クイーンズ・ナイトは消滅してしまった。

料理長LP4000

LP3700

「ブロンの効果発動、このカードが相手に戦闘ダメージを与えた時、自分は手札を1枚捨てる事ができる」

「自分の手札を捨てるって、そんなデメリットしかないモンスターなんで入れてるでござるか？」

「それがそうでもないんですよ、

僕は手札の暗黒界の尖兵ベージ（ATK1600）を捨てる、

このとき今墓地に送ったベージの効果発動、

このカードが手札から捨てられた場合、

このカードを墓地から特殊召喚する」

地面から槍を持った人型の悪魔のようなモンスターが出てきた。

「今召喚したベージで料理長にダイレクトアタック！」

「ぐぼあっ！」

料理長LP3700 LP2100

「やるな、優殿、なら拙者も…」

^{トランプ}畏発動ダメージ・コンデンサー

手札を1枚捨て発動でき、今受けたダメージ以下のモンスター

1体をデッキから特殊召喚する、

拙者は攻撃力1200のコマンドナイトをデッキから特殊召喚するでござる」

料理長がデッキからカードを1枚手札に加え、

そのカードを決闘盤^{デュエルディスク}セットした。

そして出てきたモンスターはコマンドナイト、赤い鎧を着た女性戦士だ、さつきから女性のモンスターしか出てきてないような……

気のせいですよね料理長!!

「じゃあ僕はカードを1枚セットしてターンエンド」

優 LP4000 暗黒界の狂王ブロン ATK1800 暗黒界
の尖兵ベージ ATK1600
手札 3枚 伏せカード×1

「拙者のターンドロォー!!

^{トラップ}罠カード発動、リビングデットの呼び声、

これは墓地のモンスター1体を蘇生させるカード、拙者は墓地のクイーンズ・ナイト(ATK1500)を蘇生」

再び現れる女性騎士。

「そしてキングス・ナイト(ATK1600)を通常召喚」

あ、よかったちゃんと男性モンスターも入ってるじゃん。

「キングス・ナイトの召喚に成功したとき、自分の場にクイーンズ・ナイトが

存在する場合デッキからジャックス・ナイト(ATK1900)を特殊召喚するでござる」

オレンジ色の鎧を着けたオジサン戦士が出て、その隣に青い鎧を着けた青年戦士も出てきた。

「クイーンズ・ナイト、キングス・ナイト、ジャックス・ナイト、
絵札の三銃士、ただいまケンザン!!」

少し危ないな……………一気にモンスターが4体も並んだ……………

「まだまだ!コマンドナイトの効果発動、

自分フィールド上の戦士族モンスター全ての攻撃力を400ポイ
ント上げる」

クイーンズ・ナイト	ATK1500	ATK1900
キングス・ナイト	ATK1600	ATK2000
ジャックス・ナイト	ATK1900	ATK2300
コマンドナイト	ATK1200	ATK1600

もっと危なくなってきたな……………

ここで料理長に負けるのは何故かプライドが許せないな、

亮や理奈さんなら1回負けたくらいじゃなんとも思わないけど

料理長にだけは負けたくないな……………

「行くでござるよ!」

クイーンズ・ナイトで暗黒界の尖兵ベージを攻撃、クイーンスラ
ッシュュ!」

「このままじゃ危ない!

畏発動、暗黒の謀略、

お互いのプレイヤーは手札を2枚捨て、2枚引く

しかし相手は手札を1枚捨てることでこのカードの発動を無効に
出来る」

「手札を交換するだけでござるか、
なら拙者は2枚捨て2枚引くでござる」

「じゃあ僕も、手札を2枚捨て2枚ドロ」

「ではクイーンズ・ナイトの攻撃続行!!」

「まだまだ！今捨てた暗黒界の導師セルリの効果発動」

「すてて発動する効果モンスター!?!」

「このカードが手札から捨てられたとき、相手フィールド上に特殊召喚する」

「拙者の場に?ではいただくでござる」

「そしてセルリが暗黒界と名のついたカードの効果によって特殊召喚されたとき、

相手は手札を1枚選び捨てる、

セルリは今料理長のフィールドにいる、

よって手札を捨てるのは僕」

「優殿が手札を捨てる?」

やはりデメリットまみれのカードござるね」

「油断こいていられるのも今のうちですよ、

僕はセルリの効果で暗黒界の魔神レインを捨てる、

そして！墓地に送られたレインの効果発動！

相手によって捨てられた時、墓地から特殊召喚する」

僕の決闘盤の墓地が黒く光りだした、

デュエルディスク

そして黒い煙が出てきて、部屋の天井に集まり渦を作り出す、
渦の中心から雷が降ってきた、

そして天から光臨する巨大な悪魔、

そう、口であらわすなら…『悪魔』としか言い表せないモンスター

それが！

「暗黒界の魔神レイン（ATK2500）特殊召喚！」

大きな角、大きな翼、そして全てを貫きそうな巨大な槍

「く、だがクイーンズ・ナイトの攻撃は続行！」

「え、無理だよ？」

レインがこの効果で特殊召喚に成功したとき、
相手のモンスターを全て破壊する」

「な、なんですと！！！」

「暗黒地獄炎！」

レインが持っている槍を地面に突き刺すと

料理長のフィールドが青い炎に包まれモンスターが全て燃え尽きた。

「く、拙者はカードを2枚セットし、ターンエンドでござる」

料理長 LP2000 伏せカード×2

手札 0枚

「僕のターン、ドロ―

暗黒界の魔神レインでダイレクトアタック!

暗黒地獄斬!」

「ぐべりゃ〜」

料理長LP2000

LPO

「負けたでござる」

なんだ、伏せカードはブラフか。

「流石優殿、お強いですがな、あの理奈どのに勝っただけのことではある」

「亮には負けたけどな」

「お!そろそろ昼食の支度をせねば、

優殿、申し訳ないが手伝ってくださいるか?」

「うん、いいよ!」

「今日の昼食はスパゲッティでござる」

「僕スパゲッティ好きだよ!」

「それは良かった」

夜
食堂

夕方ぐらいに亮が帰ってきた、
そして今は亮と一緒に夜ごはんを食べていると

「料理長、あなた今日優様と一緒に決闘デュエルしたり食事の準備をしたの

ですか！」

その言葉に亮が反応した。

「理奈、今なんて言った？」

「え、ですから優様と料理長が今日2人つきりで、
食事の準備したり、決闘デュエルしたらしいですよ」

「ほ、本当か料理長？」

「もちろんでござる」

何故か自信満々に答える料理長。

「（う、うらやましい…）」 「（まあ私は昨日優様と2人つきり
でしたし）」

「優、明日は俺と一緒に決闘デュエルしたり、遊んだり、お話しはなししよう！」

「それ、昨日も聞いたよ……………」

第15話 「理奈殿、これでおあいこでござる」b y似非侍（後書き）

よし、これで丸藤家全員のデュエルが終わった、次は亮VS理奈や亮VS料理長とかしてみようかな？

（作者のどうでもいい話コーナー）

やめるといつときながら、結局続くこのコーナー、いつまでたってもこのコーナーのネタは尽きない、きつとどうでもいいことばっかしてるからですよね。

第5回「どうでもいい話その5」

ティッシュペーパーってどうして2枚1組になってるんだろう。

お！今回はこれ以上になくどうでもいい話でした、てかここに書かなくてよくな、今の。

と、いうわけで今回でこのコーナーは本当に終了、丁度5回で区切りいいし。

第16話 「僕が寝ている間に何やってんの!」b y 優(前書き)

最近感想が増えてきて『ウツヒヨウウウ!』な気分のなすびです。

今回ネタバレすると………いやしません、言ったらつまらないので、では本編スタートオオオ!!!

第16話 「僕が寝ている間に何やってんの！」 by 優

僕が亮の家に来て早くも一週間がたった、

この家の人はみんないい人ばかりで僕もすぐなじめた、

この一週間でこの家の探検もしたため、

半分ぐらいはどこにどの部屋があるのかわかった。

「と言うより、一週間たって半分だけか……… どんだけ広いんだよ」

ふあああ、何か今日は暑いというより暖かいな、少しお昼ねしようかな？

「おやすみ………」

丸藤亮 視点

「ではこの条件で…よろしいですね」

「ああ、構わない」「拙者も大丈夫でござる」

ここは決闘場、今丸藤家でこれ以上にならない緊張感が漂っている。

「……………」

それもそのはず、俺、理奈、料理長の3人はこれからあるデュエルトーナメントするところだ、このトーナメントの名前は

「……………」

優を1日デートに誘う権利争奪戦！

「……………」

内容はその名の通り優勝したものが優に1回デートに誘うことができる、

権利を得ることができる。

つまりこの決闘デュエル

「「「（ ）（ ）負けるわけにはいかない（ ）（ ）「「「

「では対戦表はさっき決めたように、

1回戦『亮様VS料理長』

2回戦『1回戦の勝者VS私、東雲理奈』でよろしいですね」

さりげなく自分に有利な対戦表にしている理奈だが俺には関係ない、俺はただ全力で相手を倒すだけだ。

「構わない、さっさと始めよう、

昼食に優の食事にだけ入れた時間差で発動する睡眠薬の効果はそんなに持たない、

早くしないと優が起きてしまう」

「そうでござる」

「そうですね、では『第1回、優様をデートに誘う権利争奪戦』第1回戦を開始します！」

俺と料理長は決闘場に立つ、
そして決闘盤の電源を入れ

「「決闘!!!」」

「先攻はいただくござる、ドロー！」

切り込み隊長（ATK1200）を召喚」

傷だらけの戦士……たしか厄介な効果だったな。

「切り込み隊長の効果発動、このカードの召喚に成功した時手札のレベル4以下のモンスター1体を特殊召喚する、

拙者はクイーンズ・ナイト（ATK1500）を特殊召喚する」

切り込み隊長に続いて金髪の女性騎士が出て来た。

「カードを1枚セットし、ターンエンドでござる」

料理長 LP4000 切り込み隊長 ATK1200 クイーン
ズ・ナイト ATK1500

手札 3枚 伏せカード×1

「俺のターン、ドロー、相手フィールド上にのみモンスターがいる時このカードは特殊召喚できる、

サイバー・ドラゴン（ATK2100）を特殊召喚」

俺のフェイバリットモンスターサイバー・ドラゴン、
今回もよろしく頼む。

「サイバー・ドラゴンで切り込み隊長に攻撃！
エヴォリューション・バースト！」

料理長 LP4000 LP3100

「く

（だがクイーンズ・ナイトは守れた、次のターンキングス・ナイトを出せば）」

「カードを3枚セットし、ターンエンド」

亮 LP4000 サイバー・ドラゴン ATK2100
手札 2枚 伏せカード×3

「拙者のターンでござる、ドロー！
魔法カード、増援を発動！

デッキよりレベル4以下の戦士族モンスター1体を手札に加える、拙者はデッキよりキングス・ナイトを手札に加えるでござる」

キングス・ナイトか…料理長お得意の戦術だったな。

「拙者は増援で手札に加えたキングス・ナイト（ATK1600）を召喚するでござる、

そして、キング、クイーンがそろったとき、

デッキからジャックス・ナイト（ATK1900）を特殊召喚するでござる」

料理長の場にそろった絵札の三銃士、

だが最高攻撃力のジャックス・ナイトでも攻撃力は1900、

俺の場のサイバー・ドラゴンの攻撃力は2100には200足りない、

だが何も考えず三銃士をそろえた料理長ではあるまい。

「装備魔法、稲妻の剣をジャックス・ナイトに装備、

装備モンスターの攻撃力は800ポイントアップする！」

ジャックス・ナイト ATK1900 ATK2700

「攻撃力が上がったジャックス・ナイトでサイバー・ドラゴンを攻撃！
稲妻斬り！」

電気を纏った剣でサイバー・ドラゴンが2つに割れる。

亮LP4000 LP3400

「そしてクイーン、キングでこゝ」

「^{トランプ}畏発動、時の機械タイムマシン、
戦闘で破壊されたモンスターを特殊召喚する、
サイバー・ドラゴンを特殊召喚」

黒い機械が現れ、その中からサイバー・ドラゴンが出てきた。

「く、ならクイーンズ・ナイトを守備表示に変更し、ターンエンド
でじゅる」

料理長 LP3100 クイーンズ・ナイトDEF1600

手札 2枚 キングス・ナイトATK1600

ジャックス・ナイトATK2700（稲妻の剣

装備）

伏せカード×1

「俺のターン、ドロウ、
魔法カード、融合を発動、場と手札のサイバー・ドラゴンを融合、
サイバー・ツイン・ドラゴン（ATK2800）を特殊召喚」

首が2つあるサイバー・ドラゴン、たまにサイバーエンドより使
えると思うときがあるのだがそれは気のせいだろうか……

「バトルフェイズ、サイバー・ツイン・ドラゴンでジャックス・ナ
イトを攻撃、

エヴォリューション・ツイン・バースト！」

料理長LP3100 LP3000

「サイバー・ツイン・ドラゴンは2回攻撃が可能、サイバー・ツイン・ドラゴンでキングス・ナイトを攻撃、エヴォリューション・ツイン・バースト！」

料理長LP3000 LP1800

「ぐ、畏発動、ダメージ・コンデンサー、手札を1枚捨て発動でき、

今自分が受けたダメージ以下の攻撃力を持つモンスター1体をデッキから特殊召喚するでござる！

拙者は攻撃力1200のコマンド・ナイトを特殊召喚」

コマンド・ナイト、戦士族モンスターを強化する実質攻撃力1600のモンスター。

「甘いな、速攻魔法発動、融合解除、

サイバー・ツイン・ドラゴンの融合を解除する、

そして融合が解除されたサイバー・ドラゴンは攻撃が可能！

サイバー・ドラゴンでクイーンズ・ナイトを攻撃！」

「さらにサイバー・ドラゴンでコマンド・ナイトを攻撃！」

「ぐ、モンスターが1ターンで全滅……………」

流石でござる」

料理長LP1800 LP1300

「サイバー・エスパー（DEF1800）を守備表示で召喚し、ターンエンド」

亮 LP3400 サイバー・ドラゴン×2 ATK2100
手札 1枚 伏せカード×1

「拙者のターンドロ―」

「その瞬間サイバー・エスパーの効果発動、
相手がドロ―したカードを確認できる」

サイバー・エスパーが超音波のようなものを出すと、
俺の目の前にソリット・ビジョンでカードが現れた。

「（ふむ、魔法再生か、しかもコストが要らないほう、厄介だ）」

「男性に手札を見られるのって……………ドキドキするでいじめる」

「だまれ料理長、お前のストライクゾーンはどんだけ広いだ」

「男性なら誰で」

「さっさとしろ、エンドでいいのか？」

「いや、だめでいじめる」

「それとも貴様の人生のターンを終了させてもいいんだぞ」

「亮殿…怒ってるでいじめるか……………」

「いいからやれ……………」

「わ、わかったでいじめる」

「（この状況を見る限り圧倒的に亮様が有利、さてどうするのです料理長、これは優様とのデートをかけた戦い、そう簡単に負ける料理長ではないはず……………」

「亮殿、悪いがアンチカードを使わせてもらおう！」

「何…？」

「魔法カード発動、酸の嵐、

フィールド全体の機械族モンスター全てを破壊する」

「何！？」

フィールド全体に雨が降り、サイバー・ドラゴンたちはみな錆びて破壊されてしまった。

「更に戦士の生還を発動、墓地の戦士族モンスター1体を手札に戻す、

クイーンズ・ナイトを手札に戻し、クイーンズナイト（ATK1500）を召喚、

そしてクイーンズ・ナイトで亮殿にダイレクトアタック！クイーンスラッシュ！」

「くっ……………」

亮LP3400 LP1900

「（凄い！あの状況から一気に逆転ですか、

やりますね料理長………）」

「ターンエンドでいじめる」

料理長LP1300 クイーンズ・ナイトATK1500

手札 1枚 伏せカード×1

「俺のターン、ドロー、

プロト・サイバー・ドラゴン（DEF600）を召喚、ターンエンド」

亮 LP1900 プロト・サイバー・ドラゴンDEF600

手札 1枚 伏せカード×1

「拙者のターン、ドロー！

拙者は魔法再生を発動、墓地の魔法カード1枚を手札に加える、酸の嵐を手札に、そして酸の嵐を発動、

再びフィールド全体の機械族モンスターをすべて破壊する」

「ぐぐぐ………」

錆びるプロト・サイバー・ドラゴン、かなりまずい状況だ………

「クイーンズ・ナイトでダイレクトアタック！」

「……………くそ」

亮LP1900 LP400

「ターンエンドでいじめる」

料理長LP1300 クイーンズ・ナイトATK1500
手札 2枚 伏せカード×1

や、やばい、かなりまずい、アンチカードを使われたとはいえ、料理長にここまで追い詰められるとは、丸藤亮一生の不覚……

「お、俺のターンドロ、サイバー・フェニックス（DEF1600）を守備表示で召喚、ターンエンド……」

亮 LP600 サイバー・フェニックスDEF1600
手札 1枚 伏せカード×1

「行くでござるよー！ドロー！！拙者はブレイドナイト（ATK1600）を召喚そしてミストボディをブレイドナイトに装備、これでブレイドナイトは戦闘で破壊されないでござる、そして自分の手札が1枚以下の時ブレイドナイトの攻撃力は400上がる」

装備モンスターに戦闘耐性を持たせるカード、ますます厄介になつてきた…

「ブレイドナイトでサイバー・フェニックスを攻撃！」
剣で首を切られ破壊されるサイバー・フェニックス。

「サイバー・フェニックスが破壊されたとき、カードを1枚ドロースする」

「だがこれで終わりでござる、
クイーンズ・ナイトでダイレクト・アタック！」

剣を構え、こっちに向かってくるクイーンズナイト

「（つ、ついに拙者が亮殿を！）」

「（亮様が料理長に負けるなんて……………）」

「^{トラップ}畏発動、ガードブロック、

戦闘ダメージを1度0にしその後デツキを1枚ドロウする」

「く、流石亮殿、しぶとい……………」

「（はあ、はあ、あ、危なかった……………）」

「仕方ない、だがまだ拙者のほうが有利！ターンエンドでござる」

料理長LP1300 クイーンズ・ナイトATK1500 ブレイ

ドナイトATK1600（ミストボディ装備）

手札 1枚 伏せカード×1

「俺のターン…………サイバー・ヴァリー（DEF0）を召喚、ターン
終了」

亮 LP400 サイバー・ヴァリーDEF0

手札 3枚 伏せカード×0

「拙者のターン、ドロウ！」

「拙者は荒野の女戦士（ATK1100）を召喚」

「（金髪で西部劇のような格好をした女性、

カウボーイでしたっけ？いや女性だからカウガールですね、

それにしてもクイーンズ・ナイトにコマンド・ナイト、

そして今出た荒野の女戦士、妙に金髪の女性が多いですね、

料理長の好みでしょうか……………

あ！私も金髪！いや…まさか、ね、料理長、ゲイだし…

イヤ…もしかすると……………）」

「バトルフェイズ、荒野の女戦士でサイバー・ヴァリーを攻撃！」

「まだまだ！サイバー・ヴァリーの効果！

このカードをゲームから除外しバトルフェイズを終了させる、

更にその後デッキからカードを1枚ドローする」

「し、しぶとい！悪足掻きもいい加減にしてほしいでござる、

見苦しいでござるよ」

「く（た、確かにこの状況は危ない、俺は、負けるのか…料理長に）

「ターンエンド、次こそとどめをさすでござる」

料理長 LP1300 クイーンズ・ナイトATK1500

手札 1枚 ブレイドナイトATK2000（ミストボデー

イ装備）

荒野の女戦士ATK1100

伏せカード×1

ま、負ける…俺が、汗臭くて、変態で馬鹿で実は水虫で似非侍でござるござるばっか言ってるてふけ顔でガチホモな料理長に……………負ける

もし俺が負けると優は料理長と1日デートすることになる、
そしたら料理長は優を自分の部屋に誘って布団の中ででででで
ででででででででででででででででででででででででで
ででででででででででででででででででででででで

「……………ゆるさん」

「?なんでござるか亮殿?

さあ早くカードを引くでござる、
サレンダーしてもいいでござるよ」

「……………いやだ」

「は?」

「……………いやだ!負けたくない!!
俺は今まで自分のリスペクトする決闘デュエルができればいい
と思っていた、だが今は違う!
勝ちたい!優のためならどんな手段も使おう!
汚くもなるう!人から何と思われても構わん!
俺は勝つ!そして優と一緒にデートしてみせる!」

「(亮殿の目付きがいつもと違う……………)」

「(亮様……………あんなこと言う亮様始めてみました)」

「俺のターン！ドロオオ！！」

魔法カード強欲な壺を発動、デッキからカードを2枚ドロウする！
相手フィールドにのみモンスターがいるとき

サイバー・ドラゴン（ATK2100）を特殊召喚する！」

俺のデッキの最後のサイバー・ドラゴン。

「そして魔法カード、融合を発動！」

それにチェインしてサイバネティク・フュージョン・サポート！
ライフを半分払い、場、手札、墓地のカードを除外し
融合素材にする！」

亮LP400 LP200

「場のサイバー・ドラゴンと墓地の2体を除外し、

サイバー・エンド・ドラゴン（ATK4000）を融合召喚！！

！」

「甘い！畏^{トラップ}発動！挟み撃ち！」

自分のモンスター2体と相手のモンスター1体を墓地に送る」

クイーンズ・ナイトと荒野の女戦士がサイバー・エンドの左右に

回りこみ

左右同時に攻撃した、流石のサイバー・エンドも2対1じゃ
部が悪かったのか爆発してしまった。

「これで拙者のか 」

「まだだああ！！！！」

「何!？」

「魔法カード発動!オーバー・ロード・フュージョン!!
場と墓地の融合素材を除外して、
機械族、闇属性の融合モンスターを融合召喚するううう!!!!
墓地のプロト・サイバー、サイバー・エスパー、サイバー・フェ
ニックス、
サイバー・エンドを除外し、現れる」

俺の墓地のモンスターが融合し、
火花を散らし爆発した、そしてその爆発の後に現れた
穴がたくさん空いた銀色の物質、
その物質の穴から融合素材と同じ4つサイバー・ドラゴンの
首が出てくる。

「キメラテック・オーバー・ドラゴン(ATK3200)!!!!!!」

「こんなカード、始めてみたでござる」

「キメラテック・オーバー・ドラゴンの攻撃いい!
エヴォリューション・リザルト・バーストオオオ!!」

料理長LP1300 LP100

「だがライフは1000のこるでござる、
しかもブレイドナイトはミストボディを装備しているため破壊さ
れない!

(次のターンブレイドナイトを守備にし、時間を稼ぎ
酸の嵐のようなカードを引けば拙者の勝ち………)」

「はあん、残念だったな…」

キメラテック・オーバー・ドラゴンは4回攻撃できる」

「な、なんですと!」

「(よ、4回攻撃ですって!?)」

「キメラテック・オーバー・ドラゴン!

エヴォリューション・リザルト・バースト!!!!

サンレンダアアアア!!!!!!」

「ぐびよあああああ!!!」

料理長LP100 LP0

「ぐ、ま、負け……た」

「フッフ、これだ、この力だ!

さあ待っている優、今行くぞ…ハハハハハハハ」

「りよ、亮…様…?」

「んん?

そうか、次は理奈か、

さあ、理奈、決闘だあ………」

「(ち、違う、亮様はこんな目をしていない、

それとも我を忘れて、いや、どちらにせよ今ここで亮様を
決闘で倒さないと優様の貞操がリアルに危ない!!!)」

「デュエル
決闘だああ、理奈あ」

「は、はい、分かりました……………」

「デュエル
決闘！！」

第16話 「僕が寝ている間に何やってんの！」 b y 優（後書き）

今回アンチまで使って勝とうとしたのに原作入ってないのにヘル可した亮に負けた料理長、残念すぎ

次回は『理奈VSヘル？カイザー』理奈が勝たないと優が危ない！！！！

そして自分の小説を読み返してみるとなんか話の展開がBFまでとは行きませんが意外と速いことに気づきました、よって感想などにこの物語の質問などを書いてくれれば可能な限り返します、なにかあったら言ってください、何でもいいので。

僕のプライベートのことも少しなら答えます（使用デッキや好きな食べ物位なら）

うーん少し眠い、一昨日パソコンに触れられず、昨日ほとんど書いてなかったため今日がんばりすぎました、これ投稿したら寝ます、おやすみなさい。

第17話 「ジユウサンレンダアアアア！！！」 b y ヘル？カイザー（前書き

意外と長い17話、今回はR15指定しなかったことに少し後悔する話です。

お盆休み、部活も無ければ何処にも行かないなすびです（別にいっか）

第17話 「ジユウサンレンダアアアア！！！」 b y ヘル？カイザー

「……………うう、むにや…？
ふう、少し寝ちゃった……………
……………みんなは……………探しに行こうかな」

東雲理奈 視点

「「^{デュエル}決闘！！」」

「私のターン、ドロー、
永続魔法神の居城 ヴァルハラを発動、
自分フィールドにモンスターがいない時手札の天使族モンスター
を特殊召喚できる！」

マスター・ヒュペリオン（ATK2700）を特殊召喚！」

炎の翼を持つ代行者の長、

1ターン目から攻撃力2700のモンスター、どうします亮様。

「更にコーリング・ノヴァ（DEF800）を守備表示で召喚しターンエンド」

理奈LP4000マスター・ヒュペリオンATK2700コーリング・ノヴァDEF800

手札 3枚 伏せカード×0 神の居城 ヴァルハラ

「フッフ……俺のターン、ドロオオー！」

マジック魔法カード、融合を発動、手札のサイバー・ドラゴン（ATK2100）

3体を融合！サイバー・エンド・ドラゴン（ATK4000）を融合召喚！！」

1ターン目から、サイバー・エンド！？
亮様いきなり本気ですか！？

「バトル・フェイズ！」

サイバー・エンド・ドラゴンでマスター・ヒュペリオンを攻撃！
エターナル・エヴォリューション・バースト！！！」

サイバー・エンドの口からそれぞれ光線が吐き出される、
く、私の場にサイバー・エンドの攻撃を防ぐカードは無い…………

理奈LP4000 LP2700

「まだだああ！速攻魔法、融合解除！」

サイバー・エンドの融合を解除しサイバー・ドラゴン3体を特殊召喚！」

サイバー・エンドの融合が解け、3体のサイバー・ドラゴンになる、

厄介なサイバー・エンドがいなくなったのは良かったのですが、融合が解除されたサイバー・ドラゴンたちはこのターン攻撃が可能……

「サイバー・ドラゴンでコーリング・ノヴァを攻撃、エヴォリユーション・バースト！」

破壊されるコーリング・ノヴァ、けれどコーリング・ノヴァはリクルートモンスター、
ただじゃやられません！

「コーリング・ノヴァが戦闘で破壊されたとき、デッキから攻撃力1500以下の天使族、光属性のモンスターを特殊召喚する！

私はデッキからもう1体コーリング・ノヴァを守備表示で特殊召喚」

「なら2体目のサイバー・ドラゴンでコーリング・ノヴァを攻撃！エヴォリユーション・バースト2発目え！」

「くう、ですがコーリング・ノヴァが戦闘破壊されたため、最後のコーリング・ノヴァを守備表示で特殊召喚！」

「3体目のサイバー・ドラゴンでコーリング・ノヴァを攻撃！エヴォリユーション・バースト3発目えええええ！」

「く、だがデッキからシャインエンジェル(DEF800)を特殊召喚します」

「カードを1枚伏せ、ターンエンド」

亮 LP4000 サイバー・ドラゴン×2 ATK2100
手札 0枚 伏せカード×1

「私のターンドロ、よし。」

私の墓地に天使族モンスターが4体のみのとき、
このカードは特殊召喚できる！！

大天使クリスティア（ATK2800）光臨！！」

出ました、私の切り札、クリスティアがいる限り
お互いにモンスターの特殊召喚は出来ない、

よって亮様のデッキをこれで半分封じた様なもんです！（どうだー）

「さらにこの効果でクリスティアが特殊召喚に成功したとき
墓地の天使族1体を手札に戻す、ヒュペリオンを手札に
バトルフェイズ！クリスティアでサイバー・ドラゴンを攻撃！
シャイン・スパーク！！」

「馬鹿め！畏発動！フローラル・シールド、
相手の攻撃を1度無効にしデッキからカードを1枚ドロウする」

クリスティアの攻撃を花びらの盾でガードする亮様、
でも機械族にこんな植物族みたいなカード使うなんて
いや、どんなデッキにも使えそうなカードですが……………

「勝つためなら使えるカードは全て使う！！」

心が読まれてる！？

「仕方ありません、カードを2枚伏せターンエンド」

理奈 LP2700 大天使クリスティア ATK2800 シャ
インエンジェル DEF800

手札 2枚 神の居城 ヴアルハラ 伏せカード×2

「勝つためなら……いや！優のためなら何でもしよう！！
俺のターン、ドロー！！魔法カード、エヴォリユーション・バ
ーストを発動」

「サイバー・ドラゴンと同じ攻撃名のカード!？」

「エヴォリユーション・バーストは俺の場にサイバー・ドラゴンが
いるとき

場のカードを1枚破壊する、クリスティアを破壊！」

「しかし、クリスティアは破壊されるとき、
墓地ではなく、デッキの1番上に戻る」

「強欲な壺を発動、デッキからカードを2枚ドロウそして、
サイバー・ヴァリー（ATK0）を召喚」

あれは確か、自らを除外してバトルフェイズを強制に終了させる
カードのはず……

「魔法カード、機械複製術を発動攻撃力500以下の機械族を選択
して

デッキから特殊召喚する、もう1体サイバー・ヴァリーを特殊召
喚」

もう1体出てくるサイバー・ヴァリー、これで亮様のモンスターゾーンは

すべて埋められた、まさか！キメラテック！？

「サイバー・ヴァリーの効果発動、

このカードと他のカード1枚をゲームから除外しデッキを2枚引く、

サイバー・ヴァリーとサイバー・ドラゴン、それぞれ2枚ずつ除外し

デッキからカードを4枚ドロー！！」

「よ、4枚も……………」

（俺がサイバー流を卒業したときに師範からサイバー・エンドと一緒にもらった

3枚のカード、このカードたちはサイバー流のリスpektデュエルとは

あまりにもかけ離れているため滅多なことが無い限り使うなど言われている

だが俺は、勝つためにこのカードたちを使う！）

魔法カード、エマーゼンシー・サイバーを発動、

デッキからレベル8以上のサイバーと名の付くカードを手札に加える」

レベル8！？亮様のデッキのサイバーは融合モンスターを除くとレベル7のサイバー・レーザー・ドラゴンが最高のはず！？

「デッキからサイバー・エルタニンを手札に」

エルタニン？こんなカード、いままで亮様使ってたでしょうか？
でも亮様の場にはサイバー・ドラゴン1体、
しかもこのターン通常召喚は行っています。

「更に手札から魔法発動、ボーン・フロム・ドラゴニス、
場と墓地のサイバーと名の付くカード全てを除外し、
手札のレベル10のサイバーと名の付くカードを特殊召喚する、
場のサイバー・ドラゴンを除外し、サイバー・エルタニン（AT
K？）を特殊召喚！」

巨大なサイバー・ドラゴンの顔、その周りに5つの竜型ユニット
が、

ファ、ファンネル……………？

「サイバー・エルタニンが特殊召喚に成功したときゲームから除外
されている

サイバーと名の付くカードだけ相手モンスターを破壊する、

俺の墓地に除外されているサイバーと名の付くカードは5枚よって
理奈の全てのモンスターを破壊！

コンステレイション・シュージュー！！」

エルタニンの5つのドラゴンユニットが口からレーザーをはく
キュ、キュベレイ？

「エルタニンの攻撃力は除外されてるサイバーと名の付くモンス
ター×500となる、
よって攻撃力は2500」

サイバー・エルタニン ATK？ ATK2500

「エルタニンで理奈にダイレクトアタック！
ドラコニス・アセンション！！」

エルタニンの周りの小さなドラゴンの顔……もうファンネルでいいですよね、

ファンネルが私の周りを囲んで一斉にレーザーを出したって怖っ
！！

「きゃああー！！」

理奈 LP 2700 LP 200

「カードを2枚伏せターンエンド」

亮 LP 4000 サイバー・エルタニン ATK 2500
手札 0枚 伏せカード×2

「わ、私のターン、伏せカードオープンサイクロン、
亮様の右の伏せカードを破壊します」

「……………勝手にしろ」

破壊したカードはトラップ・ジャマー、
バトルフェイズに発動した罠カードの発動を無効にして破壊する
効果。

「私は手札の代行者をゲームから除外します、
マスター・ヒュペリオン（ATK 2700）を特殊召喚します、
ヒュペリオンの効果、墓地の天使族、光属性のモンスターを除外し
相手のカード1枚を破壊する、シャインエンジェルを除外し

サイバー・エルタニンを破壊します」

ヒュペリオンが出した赤色の球体がエルタニンに当り、爆発した。

「ふふふ、はははははははは！！！」

「な、何をそんなに笑っているのですか」

「貴様がこのターン引いたカードはクリスティア、

そしてお前の墓地の天使族は4枚だった、

しかしお前がヒュペリオンの効果を発動したため墓地の天使族は3体、

クリスティアを特殊召喚してからヒュペリオンの効果を使っていれば

貴様の勝だったんだがな」

「！（た、確かに……………く、でも今亮様の場にモンスターは0、失敗を後悔してはいけませんわ）

マスター・ヒュペリオンでダイレクトアタック！」

「ふふふ、畏発動、パワー・ウォール、

俺が受ける戦闘ダメージをデッキのカードを1枚墓地の送るたびに100減らす、俺は23枚墓地に送るよってダメージは400！

！」

亮LP4000 3600

「23枚デッキから墓地に送ったら…亮様のデッキは 」

「1枚だ！貴様を倒すのにはあと1ターンで十分！」

「なんという自信、
それはそうと亮様パワー・ウォールなんてカード、持ってました
っけ？」

「それは袖に隠 サイドデッキに入れていたのだ！
俺のターン、ドロー！！魔法カードマジックオーバー・ロード・フュー
ジョンを発動、

墓地のサイバー・ドラゴンを含む13枚の機械族を除外し
キメラテック・オーバー・ドラゴン（ATK10400）！！！！
融合召喚！！！！」

やはり出ましたねキメラテック、しかし今度の首の数は13個
料理長のときの倍以上ですね、どうやら融合素材の数と首の数が
関係しているようです

って！こんなこと言ってる場合じゃないです！

「キメラテック・オーバー・ドラゴンの攻撃！
エヴォリューション・リザルト・バースト！
ジユウサンレンダアアアアアアアアアアア！！！！！！」

「きゃあああああああ」

理奈LP200 LPO

「はははははははは、はははははははははははは、
俺が1番だ！さあ優待っている、グハハハハハ」

「（もうあれは、亮殿じゃ、無いでござる、
優殿と暮らして性欲が押さえきれずに飢えた若者でござる）」

「う、このままでは優様が……………」

と、思っていると決闘場の扉デュエルフィールドが開いて中から小柄な少年が入ってきました

って！優様！これ以上に無く悪いタイミング！！

『ガチャ』

「あれ、みんなどうしたの、みんなが集まって？
料理長は寝てるし……………」

雷堂優 視点

「あれ、みんなどうしたの、みんなが集まって？
料理長は寝てるし……………」

みんなを探して決闘場デュエルフィールドに来てみると
床で倒れている料理長、肩膝を付けている理奈さん、高笑いして
いる亮、

何かわけのわからない3人がそこにいた。

「優……………よくきたな……………グハハ、グハハハハ」

亮が僕のことを見つけると亮は僕に向かって走ってきた。

「優殿！速くここから逃げるでござる！！」

「え？何、料理ちよ」

っっておわあ！走ってきた亮が僕を押し倒してきた！え、な、何で！？

「優…優、はあ、はあ…」

「りよ、亮、何！よだれ出てる、汚い」

「何を言う、俺はまだ綺麗な体だぞ………さあ、優、速く始めないか？」

「な、何を！もう何に言ってるのかわかんないよ！？」

「優う、優う、優！」

「だからなにー！！」

「というか服脱がさないでよー！！」

亮は僕を押し倒した後、服のボタンを乱暴に外していったってやめてー！！

「理奈殿、このままでは優殿が危ない、ここは協力して」

「料理長と協力するのはかなり不本意ですが優様のピンチです、行きますよー！」

「了解でしるー！」

「や、や、やめてー！」

あんっ、く、くすぐりたい、うっ」

あうう、服のボタンを全て外されると次はズボンを脱がされそうになる、

もうこれ冗談じゃすまないよ！

「あああ、うう、や、やめ……………いやっ」

「目を覚ますでござる亮殿！」

「落ち着いてください亮様」

「うがああー！」

は、はあ、気づくと料理長と理奈さんが2人で亮を取り押さえていた、

亮は『うがああ』とわけのわからない叫びを上げている、

理奈さんと料理長は2人で抑えているのに苦しそうだ。

「りよ、亮殿、速く逃げ　　やっぱり亮殿の気を失わせてほしいでござる」

「え？え？どうやって」

もう、色々ありすぎて何が何だか分からなくなってきたよあ！！

「はなせええ！！はなせええ！！」

「い、いいから、今は鈍器のようなもので亮様の頭を思いっきり叩いてくださいー！」

「えええ、なんで！」

亮が暴れて服を脱がそうとするし、理奈さんと料理長は亮をおさえてるし、鈍器で亮の頭を叩けとか言っし、もつてっすねば……………」

「は、はやく、とにかく速く亮殿を気絶させてください」

え、気絶させる、鈍器、亮の頭、
そしてふと左手を見たとき視線に入った白い機械……………」

「もつとつにでもなれええ！！！」

僕は左手の決闘盤デュエルディスクを亮の頭目掛けて振りかざす。

『ガコッ』 『バタン』

何か嫌な音があったと思うと亮が床に倒れる。

「はあ、はあ、はあ、りよ、亮…？」

「はあ、助かりました、ありがとうございます優様」

「え？あ！うん、何か助かったのは僕みただけど……………」

「ふう、一見落着いでっせぬ」

「えっと、まだ何がどうなってるのかわからないのだけど……………」

「そうですね、では順を追って説明していきます」

理奈さんはここで一体何があったのか分かりやすく説明してくれました。

ふむふむ、僕の許可を取らずに僕と1日一緒に過ごす権利をかけた戦いがあつて、亮がリスクトする心を捨ててまで勝とうとしたそして亮の精力？が抑えきれなくなり僕を襲ってきたと……ふむそれって

「僕の許可も取らずに何やってるのみんな!!」

「いやー、それがなんかその場の空気でもいい拙者の言葉がどンドン発展していつの間にかこうゆうルールになつてしまった、みたいな」

「みたいな、じゃないよ！僕死に掛けたよ一瞬！なにが起こっているのかわからないまま亮に服脱がされそうになつたよ！」

「いやー、面目ない」

「申し訳ございません」

「それと、もしかして亮って、世に言うゲ」

「ち、違いますよ！亮様はそんな性癖の持ち主ではないです！優様が可愛いから亮様は弟のようなかんじで優様のことを愛しているのです」

「それってブラ」

「違います、亮様はそんな性癖の持ち主ではないです！
しかし亮様はとにかく優様を愛しているのです、変な意味では
ないです」

「あ、うん、自分で言うのもなんだけど、多分そうだと思うよ、
じゃなかったら亮は僕を捨ててくれなかったし、
亮といてこんなにたのしい気持になることも無かったと思う、
だから僕も亮のことが好き！あ！もちろん友達みたいな好きで！」

「わかっていきますよ」

にっこり笑う理奈さん

「そうゆう意味では理奈さんも好きだよ！」

「え／／ゆ、優様／／」

少し照れる理奈さん。

「優殿！拙者は？」

「……………」

「なんで黙るでござるか！？」

拙者は優殿のこと恋愛的な意味で愛してい

「デュエルの神様ごめんなさい！」

『ゴボツ』

「ぐぎょあ」

急に床に倒れる料理長、どうしたのかなー？

「あはは、とりあいず今は亮様を亮様の部屋に連れて行かないと」

「うん、そうだね、あと料理長は？」

「置いていきましょう」

「賛成」

てなやり取りをしながら僕と理奈さんは亮を部屋に運んでいった。

「それと優様」

「ん？何？理奈さん」

「もし亮様の意識が戻ったら」

丸藤亮 視点
亮の部屋

「……………ん、こ、こは」

気が付くと俺の上には知ってる天井が、
まあそうか、ここ俺の部屋だし。

「あ、目が覚めた、亮」

俺の隣には優が椅子に座っていた

「ゆ、優　　うぐっ、あ、頭が痛い、俺は何を……………」

「えー、なんか廊下に倒れてたからここまで運んできたんだよ」

「え？そ、そうか、」

「なんだか、これ以上に無く悪い夢を見ていた気分だ……」

「まあまあ、いいじゃん！夢なんだし、それとさ亮！ついい？」

「何だ？」

「あのを、明日、僕と！ロゼートして」

「……………え」

数十分前

ある居候とメイドの会話

「亮、意外と重いね」

「そうですね、料理長がいたら少しは楽になったのですが…」

「ぐ、すみません」

「いや、優様を責めているわけではありません、それと優様？」

「ん、何？理奈さん」

「もし亮様の意識が戻ったら、

優様、亮様とデートしてもらってもいいですか？」

「な、なんで!？」

「いや、優様には許可を取っていなかったとはいえ
そうゆうルールで決闘デュエルしましたので」

「……うーん、」

うん！別にいいよ」

「よかった、亮様もきつと喜びます」

「そうかなー？」

「そうです」

第17話 「ジユウサンレンダアアアア！！！」 b y ヘル？カイザー（後書き

ボーン・フロム・ドラゴニスはトラップカードですが手札の都合
上魔法カードにしました。

それとサイバー・エルタニンは漫画効果です。

ここだけの話、僕、遊戯王GXは再放送のやつしか見ていないた
め最終回まで見ていません、まあいいか、そんなことよりGXの再
放送が終わるころ、この小説まだ続いているでしょうか？途中で終わ
らないようにがんばります！！

第18話 「もそもそ……そもそも」 bY埋奈&料理長(前書き)

今回は短いですが、あと自分で自分の小説を読むとなぜか、話の展開が早く感じてしまいます、みなさんはどう思いますか？

第18話 「もそもそ……そもそも」 b y 理奈 & 料理長

数時間前

丸藤亮 視点

今日は早く起きたから1人で食堂まで行った、
優は置いてきてしまったが優ももう1人でこれるだろう。

「亮殿、亮殿！」

「……………」

「亮殿、少し相談が」

「……………」

「亮殿！無視しないでほしいでござる！」

「USA」
「おっさんおっさんがあつた」

「なぜ略した!？」

さっきから俺の隣から料理長が話しかけてくる、
無視しようとしたが、しつこいため仕方なく返事をしてやった。

「朝からうるさいな料理長何のようだ？」

「あ、あれ、亮殿今日冷たい……」

それはそうと拙者、亮殿に言いたいことが」

「何だ？」

「拙者、優殿のことが好きすぎて、夜も眠れないのでござる、だから優殿と一緒に夜を過ごしたいのでござる、でその許可を……………」

「俺がその許可を出すと思っているのか!?!」

「お待ちください亮様」

「理奈までなんだ!?!」

「料理長の言うことにも一理あります」

「何が一理あるんだ」

「私も優様と一緒に夜を越したいです!」

「お前たち今日はどうした!?!」

「はあ、つまり優と長い間一緒にいるせいで性欲が押さえきれなくなって我慢限界と……」

「はい」

はもって返事する理奈と料理長。

「そんで色々話あつた結果決闘デュエルでの勝者が優と寝る…
までは行かないがデートする権利をかけた戦いをノリで行ってしまつたというわけです」

「そういや、そんな感じだつたでござるな」

「何か、その日の朝はテンションが異様に高くなって、
優様の昼食に睡眠薬をいれる所まで行ってしまいましたね」

「なんだかんだ言っ
て亮殿が1番性欲溜ま
ってでござるな」

「そうですねえ」

「そうですねえ」

第18話 「もそもそ……そもそも」by理奈&料理長(後書き)

うん、流石に短すぎた、17話書いた後にすぐ書いたため集中力もほとんど残ってなかったため文もメチャクチャです、次はちゃんとしたのを書きたいなあ〜

第19話 「遠足の前日って緊張して眠れないよね」b y 優（前書き）

最近短い、そして雑だ、どうしよう夏ばてかな書く速さを遅くして中身をもっとしっかりさせようかな？

第19話 「遠足の前日って緊張して眠れないよね」b y 優

丸藤亮 視点

「あー、どうすればいいんだ！デート、デート！

俺が優とデート！もう死んでもいいかもしれぬ、

いや、死んでたまるか優とデートするまで死んでたまるか！」

あー、どうすれば、何か知らんが俺は優とデートすることになっ
た。

デートって言ったらあれだろ、とりあはず最後はホテルに行くあ
れだろ、

そこまでの過程は知らないが最終的ホテルに行く奴だろ！

「お、落ち着け、まずは深呼吸だ、

スーハースーハ……ふう、落ち着いた」

ここだけの話、俺はデートと言うものを1度もしたことがない、

17年間決闘デュエルばかりしてきた男だ、こんな時こうゆうことに慣れ
ている友人がいれば……

くそ、吹雪め、話したくないときに限っていつも電話かけてくる
のに、

必要なときに限って行方不明って何だよ！

特待生だからって調子こいてるから行方不明なんかになんだよ！

「お、落ち着け、俺としたことがつい熱くなってしまった……」

落ち着くんだ、順番に考えて行こう……

まずは服だ、何を着ていくか、どうする、

いつも理奈に適当に買ってきてもらっていたから何を着ていくか
……
くそ、吹雪が読んでいたファッション誌1度だけでも読んどけば
良かった……

「そしてデートって何するんだ、
ホテル意外に何かするの？」

「はあ、はあ、まあ、こんなもんだろ、
早く明日に備えて寝よう」

パジャマに着替え布団の中に入る…

.....
.....
.....

「.....」

.....

「.....眠れない.....」

なんだ！なぜ眠れない、き、緊張してるからか！

『チツク、タツク、チツク、タツク、チツク、タツク、チツク、タツク、』

気づくと時間はもう2時半、早く寝ないと寝坊する！

俺は布団に入り目を瞑る、早く、寝ないと！

次の日

「あ、亮おはよう」

「お、おはよう……」

結局デュエルアカデミアの制服で来てしまった、
いいよな別に、俺いつもこの格好で過ごしてるし……
優の格好は普通のTシャツに半ズボン、まあそうたる
優の服は全部昔翔が使っていた奴のお下がりだし。

「じゃあ、行こうか」

「あ、ああ……」

俺と優は2人で家をでて町へ行く。

第19話 「遠足の前日って緊張して眠れないよね」b y 優（後書き）

色々な遊戯王小説読んでたら時間が無くなった……………
次はもっと長くて中身もしっかりしてる話を書きます！

あといつの間にか総合評価が100超えてた、やったー！。

第20話 「初デート、相手は同性ですが……………」 b Y 優（前書き）

ついに優と亮のデート、そしていつになったら原作に入るんだ！
まさかこのまま入らない方向に……………

第20話 「初デート、相手は同性ですが……………」 b Y 優

「とりあはず何処行く?」

現在亮とデート?中、亮が何か少しふらふらしてて目の下にクマがあるけど亮は『大丈夫だ』としか言わないし、どうしたのかな?

「ああ、何処行こうか?」

「僕が聞ってるんだけど……………」

「そ、そうだったな、俺は…何処でもいいぞ」

「そう」

何処でもいいって何処に行けばいいんだろう、

僕転生前1度もデートなんてしたこと無かったから……………」

- 1、映画館
- 2、カラオケ
- 3、ホテル

うん、3は無しとして、僕の思っているデートと言ったらそれくらいかな?

うーん、どうしよう……………」

ん?あれはゲームセンター、そう言えば暫く行ってなかったな!

「じゃあさ、亮ゲームセンターに行こうよ!」

「ゲームセンター、ああいぞ
（ゲームセンター、中学の時吹雪に誘われて1度だけ行ったことがあつたな）」

「じゃあ決まり、早く入ろうよ！」

僕と亮はゲームセンターの中に入る。

「何からしようかな？」

「どれがいい、亮？」

「な、なんでもいいぞ」

（あのときは吹雪に誘われ勝手に色々やらされたから何が何だかよく分からん

やはり最近の若者はゲームセンターとかよく行くのか……………」

「じゃああれしようよー！」

いたって何処にでもあるシューティングゲーム、
出てくる敵をひたすら銃で撃ち続けるゲーム。

「どうやってやるんだ？」

「もしかして亮ってゲームセンター行ったこと無い？」

「まあそんな感じだ」

「えっとねえ、簡単に説明するとこの銃で画面に出てきた敵を撃って

弾が無くなったらリロードする所を引くんだよ、
とりあはず1回やってみようよ」

「そうだな」

「あと2人で200円ね、僕お金持って無いから亮が払って」

「（まあそれ位はいいだろう、パツクぐらいしか買わないからお金は結構余ってるし）」

亮が200円を入れてゲームが始まる。

「亮始まるよ！」

「わかった…これで撃って、こっちがりロード……………」

ゲームが始まり、画面の中にターゲットが現れる、それを亮と僕は撃ち続ける。

10分後

しばらくプレイしていると亮のHPが0になって画面にはGAME OVERの文字が浮かぶ。

「あー、終わっちゃった」

「意外とおもしろかったな」

「よかった！」

本当にそう思ってるのかな？

亮基本無表情だし実際どんなこと思ってるのかわかんないな

その後色々なゲームをしていった、

亮は太鼓を叩いて達人を目指すゲームにはまって1時間ぐらいやつてた。

「亮そろそろ、他のゲームしようよ」

「ん？そうだな、すっかりはまって軽く10回はやってしまった」

「次は何しようか？」

「優、あのピンクの機械は何だ？」

「あー、あれはプリクラといって、

写真を撮る機械だよ、入ってみる？」

「よし、行ってみよう！」

亮すっかりゲームセンターにはまってる、

あんま表情変わってないけど楽しんでるのが分かる。

「まずここにお金入れて」

「（400円、意外と高いな、たかが写真ごときに）」

「設定はどつする？」

「よくわからいから適当にやっといてくれ」

「うん、分かった！」

えーと、こつして、背景は

「よしできた！」

「亮そろそろ撮るよ！」

「わかった」

『ジジジジジジジジジ…パシヤ』

「もう、撮れたのか？」

「うん、もう1枚とるよ！」

次は何かポーズして」

「ポ、ポーズ!？」

その後2枚写真をとって2枚目は亮がテンパってよくわからないポーズで

3枚目は僕の提案で『ガツチャ』のポーズで撮った。

撮れた写真は2人で半分にした、デート？の形に残る思い出が出
来たから良かったと僕は思う。

「ゲームセンターは意外と面白かった、
いつかまた行こうか、優」

「うん、そうだね！」

そうして僕たちはゲームセンターを出た。

「次は何処行こうか？」

ゲームセンターを出て少し歩いた所にある公園まで来た。

「どこでもいいぞ……」

うーん、だから何処でもいいが1番難しいんだよな。
ん？あれは！

「じゃあさ、亮クレープ食べよう！」

クレープ屋の屋台を見つけた、
最近クレープ食べて無かったな、転生前はよく友達と行ったな。

「ク、クレイプ？」

不思議そうに言う亮。

「もしかして、食べたこと無い？」

「あ、ああすまない、デュエルアカデミアは全寮制で中学のときから基本的学校から出たことが無いんだ……」

世間知らず？お坊ちゃま？何か違うな……

学校での生活が長すぎてそうゆう所にあまり行ったことが無いのか……

小学生じゃ買い食いやゲームセンターは行かないと思うし……

「じゃあ初体験だね、初クレイプ！食べてみようよ！」

「わかった」

クレイプ屋の屋台まで行く。

「すみませーん！」

「うーい、いらっしやい！」

中から少し太った中年のおっちゃんが出てきた、おそらく店長だと思っ。

「ク、クレ何とか？」

「クレープね、おじさんクレープください!」

「いいぜ!君たち兄弟?

兄さんはイケメンだし弟くんは可愛いし、
きっと父ちゃんのイケメンポイントは160超えてるんじゃないか
い?」

「1ポイントどれくらいだよ……………」

「好きなを選びな」

おじさんがメニューをくれる。
どれにしようかな?

「どれにする、亮?」

「そうだな……………店長」

少し考えて決まったのか亮が店長に声をかける。

「なんだい?兄さんの方?」

「皮だけのヤツは無いのか?」

「何言ってるの亮!??」

亮が何か変なこと言い出した、なぜ皮だけ?

「もしくは、具なしのヤツ」

それ皮だけと同じだよね！

「えー、作ればあるけど、いいのかいそれで……………」

困った顔をする店長。

「構わん」

「…じゃあ、弟くんは……………」

「イチゴのクレープで」

注文すると店長は手馴れた手つきでクレープを作ってく、

店長は皮を作った後『本当にこれでいいのか？』

みたいな顔をして亮に皮だけ（具なしとも言つ）クレープを渡す。

「イチゴクレープが450円、クレープの皮は……………100円でいいよ……………」

凄く変な顔をする店長…なんかごめんなさい、
とりあはず謝るときます……………

クレープをもらって丁度誰も座っていないベンチがあったからそこで座ってクレープを食べることにする。

「（味が無い……………）」（でしようね）

「（おいしいな、おっとクリームがこぼれる！…ふう、危ない）」

「優、頬にクリームがついてるぞ」

そう言って亮は指でクリームを取ってくれる。

「食べるか？」

亮がクリームが付いた指を僕に向けてくる。

「うん」

どっせって取るう、手はクレープでふさがってるし………口でいっか。

『ぱく』

クリームが付いた亮の指を直接指でなめる。

「ありがとう、亮」

「（ゆ、優の唾液、これなめたら間接キスに………いやそれはだめだろ、なんかそうしたら男として、いや人間としてアウトな気がする）」

「どっせしたの、亮？」

亮が自分の指を見て難しい顔をしている。

「いや、この手は一生洗わないと誓っただけだ」

「それは汚いと思う………」

クレープを食べ終わり、少し休憩しようということになった。

「そろそろ行く？りよ」

「……………」

「うっ？」

寝てた…目の下にクマがあっただし寝不足なのかな？
じゃあ僕も寝ようかな、クレープ食べて眠くなっちゃった。

「少し、肩借ります……………」

僕は亮の肩によっかかって目を閉じる……………」

そしていつの間にか意識が落ちていった……………」

丸藤亮 視点

「……………う、

寝てた…のか？」

折角優とデートのデートで寝てしまうなんて、
一生の不覚う……………

「優、すまな……………」

なんだ優も寝てたのか」

優は寝息を立てて眠っていた。

「すう、すう」

相変わらず可愛い寝顔だ、
綺麗な肌、柔らかそうな頬、長いまつ毛、小さな唇、
女子みたいな容姿だな………！
まさか優は女だったのか！

いや、それは無い、多分無い、この前優と一緒に風呂入ったし……

……
しかも俺幼い男の子しか興味ないし……今の台詞はNGだったな……

……
結構寝てしまって時間も遅くなってきたから帰るか。

優、起こすのも悪いしおんぶしてくか。

優を背中に乗せるとあることに気が付いた

「そういえば、優と初めて会ったのも、この公園だったな」

優にであつてもう1週間ぐらい経つのか……優が来て色々あつたな、
これからも、よろしくな……優。

俺は優を連れて家に向かって歩き始めた。

「あ、ホテル行くの忘れた…」

第20話 「初デート、相手は同性ですが……………」 b Y 優（後書き）

亮が具なしクレープを頼んだのはTFで亮の好物が具なしパンだからです、きつとクレープも具なしが好きなんだろうと思います。

そろそろこの物語も原作に突入します、と言うことは、
サンダーさんやガツチャさんや空気君もでるということですね！

第21話 「机の角に小指ぶつけたでいじめる」bY料理長(前書き)

今回は亮と優のデュエルです。

第21話 「机の角に小指ぶつけたでいじめる」b y料理長

亮とのデートから早くも1週間がたった、つまり僕がこの家に来て2週間、

僕が転生して16日が経った、つまり今日は8月16日、8月も後半、

9月になったらデュエルアカデミアの新学期で亮がいなくなる、あれ……………そしたら僕、どうしよう……………

「ん、どうした優、廊下の真ん中で？」

「亮！9月から亮がいなくなたら僕どうしようー！」

「？何を言っているんだ優、お前も来るんだぞ、デュエルアカデミアに」

「……………え？」

「えー！僕、デュエルアカデミアを受験するの！！」

「そうだけど、嫌か？」

「いや、嫌とかそうゆう問題じゃなくて初めて知ったよそれ！
願書とか出してないし、学校説明会とか受験勉強とか！」

「それなら心配ない、願書なら俺が先日出してきたし、
学校のパンフレットだってある、受験勉強なら俺が教えてやる、
しかも優15歳だろ、なら丁度デュエルアカデミアの高等部から
入れるし」

「いや、そうだけど、」

もう色々ごっちゃんになってわけわかんないよー！！！！」

状況把握中

「はあ、はあ、

つまり僕は来週デュエルアカデミアを受験して
受ければ9月から亮と同じデュエルアカデミア高等部に通つと

「ああ」

「そして願書とか色々受けるのに必要なものは全て亮がそろえてく
れて

僕は筆記テストと実技テストを受けるだけと…」

「そうゆうことだ」

「もし落ちたら？」

「そのときは普通の勉強をして、冬に普通の高校を受けてもらう」

「そ、そうだよね…」

だったら、頑張つて勉強してデュエルアカデミアに通おう！
転生までして普通の高校行ったら転生した意味無いよね、
それに亮と同じ高校に行きたいし。

「わかった！僕デュエルアカデミアに行くよ！」

「いい返事だ、じゃあ早速勉強だ」

「う、うん大丈夫かな……………」

そうして僕はデュエルアカデミアに行くために残りの夏休みを勉強に使うのであった。

8月18日

亮の部屋

「ふうー、つかれたー」

亮の部屋で勉強中、国語はカードの漢字を書いたりカード効果を書いたり、

数学はLPの計算関係、社会はデュエルモンスターの歴史についてetc

「優は読み込み速いな、もう半分は終わった」

「でもつかれたよぉ」

「じゃあ休憩がてらに決闘デュエルでもするか？」

「うん！やろう！」

受験勉強は大変だけど亮に分かりやすく教えてもらえるし、亮と同じ学校に行きたいから頑張って勉強する！

デュエルフィールド
決闘場

「亮と決闘するの久しぶりだね」

「そうだな、だが相手が優でも全力で行かせてもらっぞ」

「全力じゃないとつまらないよ」

「そうだな……………」

僕と亮はお互いに向かい合って決闘盤デュエルディスクを構えた。

「「決闘デュエル!!」」

「先攻は優に譲ろう」

「じゃあ遠慮無く」

だから譲ったんじゃないかって亮のデッキが後攻に向いてるだけだよ
ね。

「僕のターン、ドロー、」

暗黒界の騎士ズール（ATK1800）と召喚、
カードを1枚セット、ターンエンド」

鎧をきた悪魔、攻撃力は暗黒界の王ブロン様に匹敵するぞ！
(某ポケモン博士的な感じ)

優 LP4000 暗黒界の騎士ズール ATK1800

手札 4枚 伏せカード×1

「俺のターンドロ、相手フィールドにのみモンスターが存在するとき

サイバー・ドラゴン(ATK2100)は特殊召喚できる」

亮が後攻をとると必ず1ターン目から出してくるモンスター、まさか仕込んで……いや、亮に限ってそんな事無いよ、きっと神に与えられた反則引き(チートドロ)だよ、まてよ……田中にそんな力あるわけないだろ！
と言うことは才能か。

「更にサイバー・フェニックス(ATK1200)を召喚」

サイバー・ドラゴンが機械の蛇だとしたら、
サイバー・フェニックスは機械の鳥だね。

ドラゴン 蛇

フェニックス 鳥

「……………」

「どつした優この顔は！」

「いや、なんでも無い、少し考え事してただけ」

「それならいいんだが……」

まあいい、バトルフェイズ、

サイバー・ドラゴンでズールを攻撃！

エヴォリユーション・バースト！」

優 LP4000 LP3700

サイバー・フェニックスの効果は

攻撃表示のとき機械族1体を対象にする魔法罠トラップを無効にし破壊する、

だから僕の伏せカード炸裂装甲が使えない、
正確には使っても意味が無いだけだ。

「続けてサイバー・フェニックスで優にダイレクトアタック」

優 LP3700 LP2500

「カードを1枚伏せ、ターンエンドだ」

亮 LP4000 サイバー・ドラゴン ATK2100

手札 3枚 サイバー・フェニックス ATK1200

伏せカード×1

1ターン目から結構ライフもってかれたな、
でも決闘デュエルはまだ始まったばかり、まだまだ逆転のチャンスはある。

「僕のターン、ドロー！」

魔法カード、手札抹殺を発動、

お互いのプレイヤーは手札を全て捨て、

捨てた枚数カードを引く、
僕の手札は4枚、だから4枚ドロー」

「俺は3枚ドロー」

「そして今墓地に送ったグラファアの効果発動、
このカードが手札から捨てられたときフィールド上のカード1枚を
破壊する、亮の伏せカードを破壊」

破壊したカードはサイバネティク・ヒドウン・テクノロジー、
効果は……知らない、多分マイナーカードだろう、
サイバー・ドラゴン関係と言うことは分かるが。

「暗黒界の狩人ブラウ（ATK1400）を召喚、
そしてブラウを手札に戻し墓地の暗黒界の龍神グラファア（ATK2
700）
を特殊召喚する」

いつものように床から這い出てくるグラファア、
やっぱり顔は近くで見ると怖い……

「グラファアでサイバー・ドラゴンを攻撃！ダークネスフレイム！」

「……………」

亮 LP4000 LP3400

「ターンエンド」

優 LP2500 暗黒界の龍神グラファア ATK2700

手札 4枚 伏せカード×1

「俺のターンドロワー、

魔法カード融合賢者を発動、デッキから融合を手札に加える、
そして今手札に加えた融合を発動、それにチェインし

サイバネティック・フュージョン・サポートを発動、

ライフを半分払い場、墓地の融合素材を除外して

融合モンスターを融合召喚する」

亮 LP3400 LP1700

「墓地のサイバー・ドラゴン3体を除外し、

サイバー・エンド・ドラゴン（ATK4000）を特殊召喚！」

亮の場に現れる巨大な首を3つ持つサイバー・ドラゴン、

やばいな、リミッター解除なんか使われたら僕の負けだぞ……

「サイバー・エンド・ドラゴンでグラフィアに攻撃！

エターナル・エヴォリューション・バースト！」

「く………やばい」

優 LP2500 LP1200

「サイバー・フェニックスでとどめ！」

「まだまだ！手札のバトルフェーダー（DEF0）を特殊召喚！」

サイバー・フェニックスが口から火を吐きだしたが、

僕のフィールドに振り子のようなモンスターが現れ攻撃を防いだ。

「何？」

「バトルフェーダーはダイレクトアタックされるとき、手札から特殊召喚でき、バトルフェイズを強制終了させる」

「粘るな……カードを2枚セットしターンエンド」

亮 LP1700 サイバー・エンド・ドラゴン ATK4000

手札 0枚 サイバー・フェニックス ATK1200

伏せカード×2

「ぼ、僕のターンドロ、

カードを1枚伏せ、ターンエンド」

優 LP1200 バトルフェーダー DEF0

手札 3枚 伏せカード×3

「俺のターン、ドロ」

サイバー・フェニックスでバトルフェーダーを攻撃」

さつきはカッコ良くサイバー・フェニックスの攻撃を防いだのに今回は呆気無くやられてしまった、もうちょっと粘ってよ、ま、守備力0に言っても無駄な話か……

「これでトドメだサイバー・エンド・ドラゴンで攻撃！

エターナル・エヴォリユーション・バースト！」

「まだ粘らせてもらいます、ガードブロック、

戦闘ダメージを1回0にしデッキからカード1枚ドロする」

「粘るな」

「最後まで諦めないよ」

「そうか、なら精々粘ってみろ」

「言われなくとも」

亮 LP1700 サイバー・エンド・ドラゴン ATK4000

手札 1枚 サイバー・フェニックス ATK1200

伏せカード×2

「僕のターンドロ、

罨カード罰則金を発動、自分は手札を2枚捨てる、

手札の暗黒界の武神ゴールド（ATK2300）、軍神シルバ（ATK2300）

捨てる、そしてゴールド、シルバは手札から捨てられた時

特殊召喚される」

でた暗黒界の最強コンビ！力のゴールドと知恵のシルバと言った所だろうか。

「一見使えないと思うカードも、

他のカードと組あわせることで力を十分に発揮することが出来る、か」

「そのとおり！

そして更に魔法カード、ユニオンアタックを発動、

僕のモンスターの攻撃力を1つにする」

暗黒界の武神ゴールドATK2300 + 暗黒界の軍神シルバATK
2300 = 4600

「攻撃力4600!？」

「行くよ!ゴールド&シルバでサイバー・エンド・ドラゴンを攻撃!
ダークネスコンビアタック!」

ゴールドとシルバのナイスコンビネーションで2体1だが
サイバー・エンドを破壊する。

「ユニオンアタックを使ったターン、
戦闘ダメージを与えることは出来ない、ターンエンド」

優 LP1200 暗黒界の武神ゴールドATK2300 暗黒界の
軍神シルバATK2300

手札 1枚 伏せカード×1

「ふ、面白くなってきた、

俺のターンドロー!!」

サイバー・ヴァリー（ATK0）を召喚、
サイバー・ヴァリーの効果、このカードと他のカードを
ゲームから除外しデッキからカードを2枚ドロウ」

2枚ドロウか、常にデステニードローしてるような人が
2枚引いたら勝ちルートに入ったようなもんだよ!

「^{トランプ}畏カードオープン、ボーン・フロム・ドラゴニス、
場、墓地のサイバーと名の付くカード全てを除外し

手札のレベル10のサイバーと名の付いたモンスターを特殊召喚できる」

「レベル10サイバー!？」

「サイバー・エルタニン（ATK?）を特殊召喚!」

亮の場に現れた機械で出来た大きな竜の頭、
そしてその周りに飛んでいる6体の小さい竜の頭。

「サイバー・エルタニンの攻撃力はゲームから除外されているサイバーと名の付くカード×500となる、ゲームから除外されているサイバーと名の付いたモンスターは6体、

よって攻撃力は3000」

攻撃力3000か、強いな、でも僕のモンスターの攻撃力は2300

攻撃されてもライフは500残る。

しかも始めのターンにセットした炸裂装甲がある、しかも今亮の場にサイバー・フェニックスはいない。

「サイバー・エルタニンが特殊召喚に成功したとき、ゲームから除外されているサイバーと名の付いたカードだけ相手モンスターを破壊する!コンステレーション・シュージュ!」

「ぐわああ」

く、僕のモンスターが一掃された、

でもまだ炸裂装甲がある。

「これでトドメだサイバー・エルタニンで優にダイレクトアタック」

僕の横前後ろ、上に小さなドラゴンの頭が……………これぞ四面楚歌だが、僕には最後の切り札が！

「^{トラップ}罠発動！^{リアクティブジャマー}炸裂装甲！攻撃してきたモンスターを破壊する！」

僕の周りに光る板がはられる、これに触れると爆発する仕組みになっっているらしい。

「もう、サイバー・エルタニンの攻撃は止まらないよ！残念だったね亮」

「それはどうか……^{トラップ}罠発動、^{トラップ}トラップジャマー、^{トラップ}バトルフェイズに発動した罠の発動を無効にし破壊する！」

「ななな、なんだってー！！」

僕の周りの光る板がどんどん無くなって、

僕の周りには僕の方を向いている6つの竜の頭、
ば、万事休す……………か。

「ドラコニス・アセンション！！」

「うわあああ！……！」

優LP1200 LPO

「また負けた……………」

「そう気を落とすな、優」

「うん、そうだよね、次また頑張ればいいよね」

「次も俺が勝つがな」

「それはやってみないとわかんないよ」

「そうだったな、

さあ、勉強の続きだ、夕飯までまだ時間があるし」

「うん、わかった！」

そうして僕と亮は決闘場を後にする。

デュエルフィールド

第21話 「机の角に小指ぶつけたでござる」by料理長(後書き)

この話、前書き後書きはかなりハイスピードで書いたため、誤字
多いかのせい大です、あつたら感想にお願いします、いそげいそげ
! ! ! !

サイバー・エルタニンは漫画の亮が使うカードですがこっちの亮
は使うことにします、漫画でも亮サイバー・ドラゴン使ってたし、
いいんじゃないかな？

第22話 「人差し指を見るたびなめるか悩む」bYカイザー（前書き）

さっさと原作に入るか、日常をもっ少しやるか悩む……

第22話 「人差し指を見るたびなめるか悩む」byカイザー

「ふう〜、つかれた〜」

今日亮は用事があるらしく、家にいない、だから今は亮がくれた問題集をひたすら解いている最中、でも疲れたから少し休憩。

「それにしても暑い……………」

丸藤家、お金持ちなんだけど地球温暖化がなんだかんだでクーラー使ってないんだよね、現代の若者である僕にはちとキツイです……………」

「汗かいたしお風呂に入ろうかな？」

今日亮はいない、理奈さんは仕事、料理長は多分剣道の練習、そして僕は試験勉強、勉強ばっかじゃ疲れるし休憩がてらにお風呂に入ろうと思う。

風呂場

「おつふるー、おつふるー、おつ、おふるー」

何かよくわかんない歌を歌いながら、

服を脱ぐ、亮の家の風呂は大きいからいつも入るときテンションが上がる。

服を脱ぎ終わりタオル1枚持って風呂場に行く、風呂場には誰もいない、と言うことは貸しきりだああ！

「はあくいい湯だ」

この風呂に1人で入るのはもしかして初めてかもしれない、いつも亮と入ってたし、僕が入ろうとすると亮が

「お、俺も一緒に入るぞ、優に拒否権はない」といつも言い張るから仕方なく一緒に入ってる。

「1人で入るのが怖いのかな？」

意外と亮は怖がりなのかもしれない、

理奈さんは女性だし、料理長は臭いから僕と入ってるのか：なるほど、亮も可愛い所があるんだな。

「はあくそれにしてもいい湯だ、これ温泉じゃないかな？」

それは流石に無いか、温泉掘り起こすの凄く大変って聞いたし。

『ピチャ』

「！」

ん、何か今音が、誰かいる？

まさか……………幽霊、ま、まさかね、

僕はおそろおそろ音が鳴った方を見てみると……………

入浴中の理奈さんがいた。

「きゃあああああああ！！！！！！」

大きな悲鳴を上げる

僕が

「優様、この台詞は本来女性が出す台詞です」

「い、ごめんなさい、理奈さん！

は、入ってるとは思わなくて、わ、わざとじゃないんです！

僕出て行きますから！！！！」

僕は急いで湯船から上がろうとすると

「待ってください優様！」

理奈さんに手を掴まれた。

「は、はなしてください！」

「だから待ってください優様」

「お願い！放してっ！」

「台詞だけ聞いたら優様が痴漢に襲われる光景ですね」

「きゃああああ！助けてえええ！！」

「だから落ち着いてください優様！」

僕の必死の抵抗もむなしく、僕は理奈さんに捕まってしまった、
ううう、何されるんだらう僕。

「い、ごめんなさい理奈さん」

いつも上に上げて止めている理奈さんの髪は下ろしてあって、

化粧もされていない、あれ？理奈さん化粧しないほうが可愛いかもしれない、

いつもは綺麗な理奈さんだけど可愛い理奈さんも

いいかもしれないってそんなこと言ってる場合じゃないよ！

「だから、私は怒ってませんよ」

「え？」

ドムコト???

「別に私は優様に裸を見られたからって特に気にしません」

「……………どうして…?」

「だって優様子供ですし」

あー、そうゆうことかなら納得

「 じゃないよ！

僕これでも15だよ！中学3年生だよ！」

「大丈夫、優様あそこは子供ですし」

「どうゆう問題!？」

って何処見てるんですか!！」

「まあまあ」

「もう僕出ます!！」

そう言って湯船から上がるつとすると

「だから待ってください、優様」

再び理奈さんに引つ張られた。

僕の抵抗はむなしく再び捕まる僕、
今は僕が逃げられないように僕の後ろから抱きつくようにつかま
れた。

「なんで逃げるのですか優様？」

「だって僕男子だし、理奈さん女性だし」

しかも僕が逃げないように強く掴んでるせいか、
む、胸があたってます……チキンの僕には、正直そんなに喜べな
い……

「いいじゃないですかたまには、
しかも優様には色々お話したいことがあるんです」

「どつゆつことっ」

や、やばい頭がくらくらしてきた。

「いや、私1日中仕事があつて優様とあまり話さないじゃないです
か、

だからこうやって2人きりになる機会が少なくて、
私買出し以外で外出しないし、友達もいないから、

優様と仲良くなりたいし……………」

そう言って少し暗い顔をする理奈さん。

「あ、そうゆうことが」

やっと理由がわかった、理奈さん、僕と仲良くなりたくて。

「そうゆうことならいいよ、今日はいっぱいお話しよう」

「いいんですか？」

「いいもなにも、もう僕と理奈さんは友達じゃん！」

「とも……………だち、私と優様が……………」

「そう！だからなんか話そう！」

「そうですね、優様」

そんなかなで結構長い時間お風呂で理奈さんと話しをした、内容はどうでもいい世間話、でも友達との会話って大体そんなもんだよね。

「あれ？もうこんな時間！
そろそろ出ないと」

やばい亮が帰ってくる前に問題集が終わらない！

「す、すいません優様、私、つい楽しくてこんなに長く話しちゃっ
て」

「いや、いいよ僕も楽しかったし、またお話したり決闘デュエルしよね理奈
さん！」

「はい！分かりました優様！」

「じゃあ僕上がるね」

「私はもう少し入ってます」

「そう」

僕はお風呂場を出て自分の部屋に戻る。
少しよぼせたかも？頭がくらくらする。

「（優様とお風呂に入って、お話して、今日は最高の1日ですわ）」

坂本（料理） 武蔵（長） 視点

「おっふるっ、おっふるっ、おっ、おっふるっ」

剣道の練習していい汗かいたでござる、だから夕食を作る前にひとつぶろ浴びるでござる。

着物を脱ぎ腰の日本刀を取り、タオル1枚持って浴場の扉を開けると

入浴中の理奈殿がいた

「きゃあああああ!!!!」

「り、理奈殿なぜここに!?!」

「料理長にエツチ!変態!水虫!加齢臭!ガチホモ!ガチホモ!ガチホモ!」

「り、理奈殿これは事故」

おわああ!桶が拙者の顔面に飛んできて

「ぐぼああ!!」

お、お花畑がみ、え……………

第22話 「人差し指を見るたびなめるか悩む」bYカイザー（後書き）

今回の話、描写がかなり少なかったです、やっぱりこつゆつのは向いてないのかな？

明日はVジャンプの発売日、僕は毎月買ってますよ。

第23話 「何時になったら原作に突入するんだ」by優（前書き）

今回は作者の妄想盛りたくさん、今回は筆記試験の話です。

今日はVジャンプの発売日、噂だと昨日から発売してるらしいけど………

第23話 「何時になったら原作に突入するんだ」 b Y 優

8月21日

8月21日、それはVジャンプの発売日、
は、今は関係ない、そんなことより今日は
デュエアカデミア、筆記試験の入試日、
入試の範囲は大体覚えた、後はテストを受けるだけ。

理奈さんに車で試験会場まで送ってもらい、
ここはもうデュエルアカデミアの筆記試験の受験会場、
僕と同じ受験生と思われる人達はみんな緊張してるみたいだ、
僕もとっても緊張してる、落ち着け……………

暫くして試験管の人が2人来て問題用紙と回答用紙を配ってくれ
た、

そして試験の時間がきて試験管の合図とともに試験が開始される。

問題用紙を開くと、1ページからもう問題がびっしりと、
えーと……………

Q1 リアクティブアーマーを漢字で書け。

あ、それなら簡単、僕デッキに入れてるし、たしか…

A 炸裂装甲

Q2 ブルーアイズホワイトドラゴンを漢字で書け。

ブルーアイズ…社長の嫁か。

A 青眼の白竜

あれ？竜だっけ？龍だっけ？

Q3 ブルーアイズホワイトドラゴンの技名と同じ魔法カードを漢字で書け。

あれでしょ、粉碎、玉砕、大喝采でしょ、あれ違うなそれは社長の名言だ。

A 滅びの爆発旋風

こんなんでいいだろ、自信は無いけど…………

そんなかなで漢字は終わり次は知識問題。

Q17 ブラッド・ヴォルスの召喚に奈落の落とし穴が発動された、それにチェーンし収縮をブラッド・ヴォルスに使った場合奈落の落とし穴の効果は発動する？

えーと、どっちだろう？

A 攻撃力が1500以下になったため奈落の落とし穴は不発になる。

これでいいでしょ。

そして次は作文制作か、めんどくさそう……

Q49 全国の子供達に夢と希望を与える海馬コーポレーションの社長海馬瀬戸の美しさを200字以上800字以内で書け。

なんでだよ！なんでこんな問題だしたんだよ！

たしかデュエルアカデミアって海馬コーポレーションが作ったんだよね、

だからってこの問題はないだろ、

でも白紙はやばいため適当に書いておく。

Q50 現在凡骨デュエリストとして有名城之内克也を漢字1文字で表せ。

なんでだよ！なんで漢字1文字、屑か糞か、書いていいのかそれ、てか社長どんだけ城野内のこと嫌いなんだよ！

自分のことは200以上で書かせてるのに城之内は1文字かよ！

A 運

これでいいっしょ、あいつ運つよいし。

そして古文にだって国語は終わった、

次は数学

Q51 ガガギゴに突進を使った場合、ガガギゴの攻撃力を答える。

ガガギゴの攻撃力は1850それに突進の700を足せば…

A 2550

Q78 自分のライフは2100、相手がブラックホールを使ってきて、自分は神の宣告を使った、それにチェーンし相手はカウンターカウンターを発動、更にそれにチェーンし自分は盗賊の七つ道具を発動、結果ブラックホールの発動は成功するか？そして自分の今のライフは？

えーと、ややこしいな…えーと2100を÷2して更に1000引くから…

A ブラックホールの発動は無効になる。

自分のライフは50

自分のライフぎりぎりじゃん！

そんなかなで次は歴史

Q112 第1回バトルシティ第3位の決闘者を答える。

それなら簡単だ、転生する前に妹とTUTAYAから借りたDV
Dで見たことある、

そっついや妹…元気にしてるかなあ…

はっ！そんなことより今はテストに集中しないと。

A 城之内克也

しかし、なぜ3位？1位じゃないのか？
確か社長はバトルシティ第3位、あーなるほど…

A 海馬瀬戸

これでいいでしょ。

次は理科、内容は全略

その次は英語、内容は前略

最後は特別問題おまけみたいなやつ。

Q251 貴方が好きなアイドルカードは？次の3つから選べ。

- 1、ブラック・マジシャン・ガール
- 2、青眼の白龍
- 3、雷電娘々

なぜブルーアイズが……

でもこっちは

A 1

多分僕がいた世界の男決闘者はみんな1を選ぶだろう、僕も男子だし。

Q252 貴方の直感試しますか？

1、

2、

3、

あれ、これどっかで見たぞ！

Q252、現在子供達に人気テレビアニメ『正義の味方かイバーマン』の必殺技は？

A 知らんがな

Q253 海馬コーポレーションの年商は？

A 知らんがな

Q254 海馬瀬戸が好きな食べ物？

A 知らんがな

Q255 海馬社長の

A 知らんがな

Q256 か

A ・ 知らんがな

Q

えーい！全部知らんがな！

後全海馬のプライベートのことじゃねーか！

Q277の海馬社長はブルーアイズのどの部分が好き？

とか知らないよ！

『キーン、コーン、カーン、コーン』

あ、試験終わった…

「では鉛筆を置いて回答用紙だけを後ろから裏向きにして前に渡すように、

ついでにQ251からQ300はやらなくても結構だ、

時間が余った人の時間つぶしのようなものだから、

では解散、試験結果は今日中に郵送で送る、

実技試験は8月22日詳しいことは結果と一緒に送られてくる

プリントかデュエルアカデミアのHPホームページを見てくれ、じゃあ」

そう言っただけで教室から出て行く試験管の人、なんだ最後の問題はやらなくてよかったのか、

そつだよね普通、よく見ると問題用紙にも書いてあるし……

「僕も帰るか………」

他の受験生もどんどん帰ってるし。

僕も試験会場から出ることにする。

試験会場の外の出ると、理奈さんの車があった、
ずっとまっててくれたのかな？

「ただいま理奈さん」

「お帰りなさいませ優様」

「もしかしてずっとここで待ってたの？」

「はい」

「ヒマじゃなかった？」

「大丈夫です、頭の中でずっと楽しいこと考えてましたから」

「……………」

「なぜ黙るのですか!？」

「いや、何でもないよ、速く家に帰ろう」

「わ、わかりました」

なんか納得しない様子だったけど理奈さんは車を走らせてくれた。

家に着いた頃にはもうデュエルアカデミアの筆記試験の結果が返ってきた、

仕事が早いなデュエルアカデミア。

「亮、受験番号30番だって！これって数字が少ない方が結果がいいんでしょ」

「ああ、優は30番か頑張ったな」

亮は僕の頭を撫でてくれる、

亮に頭を撫でられると何故か気持ちよくなる。

「明日は実技試験、頑張れよ、

実技試験は俺も行くぞ、新入生の実力も見たいし」

「うん！頑張るよ！」

第23話 「何時になったら原作に突入するんだ」by優（後書き）

あー、気づくとこの1週間家から出てない、体力落ちたな……
取り戻さないと部活で死ぬ……

次回は明日投稿、それと現在1週間連続投稿達成中だぜ！

第24話 「僕の勝率は50%主人公とは思えない勝率の低さ」by優（前書き）

今回は実技試験、優はデュエルアカデミアに無事受かるのか！？
え？まだ試験じゃない！？原作キャラとデュエル？しかも相手は
エアーマンらしい。

第24話 「僕の勝率は50%主人公とは思えない勝率の低さ」by優

8月22日それはデュエルアカデミアの実技試験の日、
理奈さんの車で亮と一緒に試験会場まで来た。

「俺は受験生じゃないから向こうから入る、
優はあの入り口からはいるんだ」

「はい、亮僕の決闘^{デュエル}見ててね！」

「ああ、見るよ」

「亮と別れ、受験生が入る入り口まで来た。」

「あの一、僕受験生なんですけど……」

入り口の前にいるグラサンの男性に話しかける。

「そつか、なら受験票を見せてくれ」

「はい」

受験票をグラサンに見せる。

「うん、本物だね、入っていいよ、
試験開始は9時から、今はまだ8時40分だから
それまでにデッキの調整、トイレ等をすませておくんだよ」

「わ、わかりました」

はあく緊張するでも大丈夫、自分の決闘が出来ればきつと勝てるはず。

廊下を暫く歩くとその先に受験会場があつた、結構早く来たつもりんだけど10人ぐらいもう来てる人がいてデッキの調整したり、携帯弄つてたり、友達と会話してる、さて、僕も適当な所に座るか。

「よっこいしよ……」

誰もいない列のベンチに座る。

「君受験生か？」

「ん？」

急に隣から声をかけられた、誰だろう？

「はい？」

声がするほうを向くと、灰色の学ランを着た男の人がいた。

「だから、君も受験生なのかと聞いているんだ」

「ああ！そつだよ、じゃなかったらここにきてないし」

「ははは、それもそつだ、俺の名は三沢大地、よろしく」

三沢、大地：あ！原作キャラの、あの影が薄くて有名な三沢君か、

学ランだから気づかなかった。

「僕は雷堂優、こちらこそよろしく」

そう言い僕と三沢君は軽く握手をする。

「どうだ？受かりそうか、試験」

「うーん、どうだろう？絶対受かるっていう自信はないけど多分、大丈夫かなって、筆記試験も結構良かったし」

「ほー、そうか、ところで優、

君はなんで私服で来ているんだ、普通は中学の制服でくるだろ？」

「えー、それは……」

しまった！そこんとこ忘れてた……僕転生者だからこの世界で中学通ってないし……

「そう、あれ、燃えた」

「燃えた！？何が!？」

「せ、制服………」

「制服が燃えた、君いったい何したんだい!？」

「えっと、虫眼鏡と一緒に外に干してたら……燃えた」

「え、マジ!？」

「ほら三沢君も小学校の時理科で習ったでしょ」

「いや、それでも燃えないだろ……」

「もう、燃えるの！僕の熱い決闘者魂で燃えたの！わかった！」

「わ、わかった……」

ふー、何とか誤魔化せた……

「（何だこの優という少年は、背や顔は小学生のようだが、デュエルアカデミアを受験してるし制服が無い……」

飛び級か……でも飛び級なら飛び級と言えばいいのになぜ隠す……あれか、同じ年じゃないとばれると苛められると思ってるからか

……
それとも飛び級ってことを一般生徒にはばれてはいけないのか、謎だ……）

ん、反対側の席に亮がいる、手振ってみようかな？

「おーい！亮！」

僕の声に気づいたのか亮は手を振り替えてくれた。

「おい、亮って……お前デュエルアカデミアの帝王カイザー亮の知り合いなのか？」

「え、あー、なんて言うか……うん知り合いつてこと……」

「（カイザーとも繋がっている…ますます怪しいぞ…この少年）
そうだ優、俺と君はデュエルアカデミアという狭き門を目指すラ
イバルであって同士だ、

別に実技試験は受験生同士が決闘をするわけではない、
しかも試験の前にデッキの調整もしたい、
というわけで決闘だ！優デュエル！」

「え、決闘、いいよ別に、まだ試験まで時間あるし」

「（優が一体何物かは分からないが決闘をすればなにか分かるかも
しない、

見た目が小学生、制服を着ていない、カイザー亮と知り合い……
この3つのピースを上手く枠にはめ方程式を完成させるんだ、
もしかすると優は凄い秘密がある可能性が大だ）」

「でも何処でする、ここはまだ他の受験生が来るし……」

「なら、決闘盤を使わずここでやるう、
俺デュエルシート持つてるから」

三沢君は鞆の中からストラクチャーデッキ買ったら一緒について
くるシートを

2つ取り出しイスの上に敷いた。

「さあ、始めようか」

「わかった」

デッキをシャッフルし山札ゾーンに置く、

三沢君も同じように山札ゾーンにカードを置いた。

そしてお互いの準備が整ったら

「^{デュエル}決闘!!」

「先攻はもらっていい？」

「かまわないぞ」

「ありがとう、僕の先攻ドロ、暗黒界のスカー（DEF500）を守備表示で召喚、

カードを1枚伏せターンエンド」

僕はモンスターゾーンにカードを置く、

何か久しぶりに床で決闘したな、転生してからはずっと決闘盤でやってたし。

優 LP4000 暗黒界の斥候スカーDEF500

手札 4枚 伏せカード×1

「次は俺のターンドロ、ハイドロゲドン（ATK1600）を召喚」

三沢君は茶色いトカゲみたいなモンスターを出した。

「ハイドロゲドンでスカーを攻撃！」

「でもスカーは破壊された時デッキのレベル以下の暗黒界を手札に加える、

「暗黒界の術師スノウを手札に加える」

「なら俺もモンスター効果発動だ、ハイドロゲドンがモンスターを破壊したとき

デッキからハイドロゲドンを特殊召喚する、

2体目のハイドロゲドンで優にダイレクトアタック！」

「受けます」

優 LP 4000 LP 2600

ソリットビジョンじゃないと攻撃受けても驚かないですむ、
決闘盤だと攻撃が本当に来たと思ってビックリするから心臓に悪いよ。

「メイン2、タイムカプセルを発動する、デッキのカードを1枚裏にしてデッキから

除外する、そして2回目の自分のスタンバイフェイズにゲームから除外したカードを手札に加える」

「一体何を除外したんだろう？」

「カードを1枚伏せターンエンド」

三沢 LP 4000 ハイドロゲドン×2 ATK 1600
手札 3枚 伏せカード×1 タイムカプセル

「じゃあ僕のターンドロ、」

暗黒界の術師スノウ（ATK 1700）を召喚

スノウでハイドロゲドンを攻撃！」

「く、利子は高くつくぞ」

あれ？漫画版三沢君！？

100のダメージでも利子は高くつくのか、厳しいな…………

三沢LP4000 LP3900

「カードを2枚伏せ、ターンエンド」

優LP2400 暗黒界の術師スノウATK1700

手札 2枚 伏せカード×2

「俺のターンドロ、オキシゲドン(ATK1800)を召喚」

「なら畏発動威嚇する咆哮、これでこのターン三沢君は攻撃できない」

「く、やるな、カードを2枚伏せターンエンドだ」

三沢 LP3900 ハイドロゲドン ATK1600 オキシ

ゲドンATK1800

手札 0枚 伏せカード×3 タイムカプセル

「僕のターンドロ、魔法カード手札抹殺を発動、

お互いのプレイヤーは手札を全て捨てて捨てた枚数ドロする、
そして今捨てたグラファの効果発動グラファを捨てたとき、
相手のカードを1枚破壊する、オキシゲドンを破壊」

「させん！速攻魔法わが身を盾に、ライフ1500と引き換えに

モンスターの効果破壊を無効にする」

三沢LP3900 LP2400

「く、なら場のスノウを手札に戻し墓地のグラファを特殊召喚」

「畏発動威嚇する咆哮、

これで君はこのターン攻撃できない」

優 LP2400 暗黒界の龍神グラファ ATK2700

手札 1枚 伏せカード×1

「俺のターンだ、ふっ、いいカードだ」

何を引いたのかな？

「タイムカプセルの発動から2ターンたった、

よって除外してあったカードを手札に、

ついでに手札に加えたのはボンディング H20」

そ、それは……！

「死者蘇生を発動、墓地のハイドロゲドンを蘇生」

これで三沢君の場にハイドロゲノン2体と、オキシゲドン1体。

「そして最後の手札ボンディング H20を発動！

場のハイドロゲドン2体とオキシゲドン1体を生贖に、

デッキからウォーター・ドラゴン（ATK2800）を特殊召喚」

三沢君が出したウォーター・ドラゴンは水で出来た龍のイラストが書いてあった。

「ここでセットカードオープン！！装備魔法、

幻惑の巻物！幻影の巻物を暗黒界の龍神グラフィアに装備、

装備モンスターは俺が宣言した属性になる、俺は炎属性を選択」

属性を変更？たしかウォーター・ドラゴンの効果は……

「行くぞ！ウォーター・ドラゴンでグラフィアを攻撃！ハイドロホンブ！」

おお、決闘盤使わなくても技名言うのかこの世界では。

「ウォーター・ドラゴンの効果発動！

ウォーター・ドラゴンは炎族と戦闘するとき、

相手モンスターの攻撃力を0にする」

「く、やはり……」

優LP2400 LPO

「ま、負けた……」

「ふうー、勝ったぞ、君の決闘はミスが少し多かったな

例えばグラフィアの効果でタイムカプセルや伏せカードを破壊しておくとか」

「くう〜三沢君強いね！

まさかウォーター・ドラゴンをあんなに上手く使うなんて！」

「そうだろ、俺が計算を練って練りまっくて出来たデッキだからな」

「ホント凄いや、僕が前いた世界ではこんなに上手く使
やっぱ何でも無い……………」

「優お前今、前いた世界っていったな、
なんなんだ前いた世界って?」

「あ……………それは……………」

「（思わぬ収穫だ、おそらく前いた世界というのが分かれば、
優の秘密が分かるはずだ、さあ聞かせてもらおうか、優の秘密）」

「や、やばい、まさか三沢君に僕が異世界人ということがばれそう
だ……………」

流石秀才決闘者。

「で、なんなんだ前いた世界って、
なぜカイザー亮と知り合いなんだ、
なぜ制服を持っていない、実は小学生じゃないのか?」

「え……………あ……………それは……………」

「やばいやばいやばい!!ここは腹をくくって、
三沢君にだけばらすか?いや、亮にも言えない秘密を
三沢君に言えるはずが無い……………
なら……………」

「実は……………」

「実は？」

「実は……」

「実は？」

「実は僕」

第24話 「僕の勝率は50%主人公とは思えない勝率の低さ」by優（後書き

すいません、入力できる文字に達してしまったため中途半端ですが第24話はここで終わります、まあ本当は嘘です……… 続きは25話で。

Vジャンプを買ったんですが、そこに載っていた新禁止制限リストを見たら内容が凄く酷い……… まさか開闢が帰ってきたとは、さらに大嵐も制限に、遊戯王の環境が大きく変わってしまった……… デッキをたくさん持つてるからカードそろえるのが大変（半分ぐらいカスデッキやネタデッキですが）あとサイクロンが無制限になるなんて………

最後に僕今日から26まで学校で自然教室があるので次の投稿は27です、

合宿のときみたいに3話連続投稿はありません、書き貯めがもう無いので………

第25話 「かーめーはーめー波ー!」 b y 悟空(前書き)

久しぶりの更新、つっても4日ぶりか、ついでに今回のサブタイトルは本編とは関係ないです。

第25話 「かーめーはーめー波ー!!」 by 悟空

「実は……………」

「実は？」

「実は僕……………」

「記憶喪失なんだ」

「記憶…喪失？」

「あの、記憶を失うやつか？」

「うん、そう」

ふう〜、何とか丁度いい言い訳を思いついたぞ、
流石に転生者や異世界人と言うのは不味いだろ……………」

「そうか、記憶喪失なのか…」

「そう、目が覚めたら公園に倒れてて、

自分の名前と決闘デュエルのルールしか覚えてなく

そこを亮に助けてもらったの、

それで亮と同じ学校に通うためにデュエルアカデミアを受験する
ことにしたの」

「そうだったのか。」

（記憶喪失か、思ったより面白くないな……………」

もっと凄い実は異世界から来た人間かと思っただが…残念だ」

なぜか三沢君は残念そうな顔をしている。

「それとき、三沢君…」

僕が記憶喪失ってことは他の人には黙っててくれる？」

「あ、ああ…別に構わないぞ」

「よかった」

ふう〜、まだ少し納得しないようだけど
信じてくれたみたいだ、よかった。

三沢君に嘘ついちゃったけどいいよね、
だって異世界人ってばれるわけにはいかないし、
僕もばれないほうが都合がいいもん、
多少忘れてるとはいえ原作知識があるほうがデュエルアカデミア
でも生活が有利だし……………

周りを見てみると結構受験生が来ていることに気づいた。

今の時間は8時55分、実技テスト開始まであと5分
デュエル
決闘してる内に結構時間たっちゃたなあ〜

「そろそろ始まるな……………」

「うん、そうだね」

そして9時になった、試験会場の上に付いているスピーカーから
声が流れてきた。

『これからデュエルアカデミア実技テストを開始します、受験番号101番から120番の人は決闘場まで来ててください』
デュエルビルド
たしか実技テストは受験番号が大きいほうから始めるんだった、たしか原作キャラの翔が受験番号119番、つまり翔よりテストが悪い奴が1人いるのか。

ん、まてよ、翔の筆記テストの成績は後ろから2番目、しかし翔は実技テストに勝ったためオシリス・レッドだがデュエルアカデミアに受かった、つまり色さえ気にしなければ筆記テストはがんばらなくてもいいんじゃないかな？

オシリス・レッドというのはデュエルアカデミアのランクのようなもの、男子生徒は成績によって3つのコースに分けられる中等部から成績優秀で上がった

オベリスク・ブルー、入学試験で成績が良かったラー・イエロー、入学試験で成績が悪かったのがオシリス・レッドの3つに分けられる。

うーん、でもデュエルアカデミアの全校生徒は150人

赤、青、黄色を約50人ずつ、デュエルアカデミアは1学年50人でクラスは1つのみ、

つまり今年はいれる1年生も50人、赤、青、黄色は1学年約16、7人でもブルーは中等部から上がったきた人のみ

だから高等部から入れる人数は約32人ほど、四捨五入で30人よって受験生120人に対し合格する人間が30人だとしたら倍率は約4倍とかなり高い数値となってしまう、倍率4倍なのに実技試験に勝っただけで合格してしまうものなの

か？

それとも実技試験で決闘デュエルに勝った人が30人以下だったのかな？でも翔にさえ勝てる試験なのに……謎だ……まさか亮が学校にたくさんお金を

寄付とかしたとか？校長を脅したとか……それとも大人の事情か？

謎はそれだけじゃない、ブルーの人数が1学年約16、7人なら男子と女子で大体8人ずつに分かれてしまう、

かなり少なくないか？万丈目とその取り巻き2人だけで3人も取ってしまう、

女子も天上院とその取り巻き2人で3人も取ってしまう……ブルー少なすぎでしょ……

「どうした優、さつきからボーっとして？」

「いや、考え事」

「そうか、でもお前が考え事していたせいで101番から120番の実技テストは終わってしまったぞ」

「もう終わっちゃったの？速いなあ」

『受験番号81番から100番の人は決闘場デュエルフィールドに来てください』

僕の受験番号は30番、まだまだ先か

「ところで優は何番なんだ？」

「僕？僕は30番三沢君は？」

「俺は1番だ」

「1番！凄っ！」

「それほどでもないさ」

そう言って三沢君は自分の髪をかき上げた。

その後僕と三沢君は他の受験生の決闘を見続けた、
うーん、65番の決闘は結構良かったな……………
あと48番も、あのコンボにあのカードを加えればもっと良くなるな。

『受験番号21番から40番の人は決闘場まで来てください』

「あ、僕の番だ、行ってくるね三沢君」

「おう、行ってこい優、落ち着いて決闘すればきつと勝てる、
優と決闘した俺が言うのだから間違いない」

「そう言ってくれると自信出てくるよ！ありがと行ってくるー」

そう言って僕は決闘場に向かう。

デュエルワールド
決闘場

「えっと、ここかな？」

「君が相手かな？」

「は、はい！受験番号30番、雷堂優です！」

試験官と思われる人は黒い服を着てサングラスを付けていた、
やっぱりこの学校先生のグラサン率高いな。

「そうか、では早速始めよう」

「分かりました」

「「デュエル
決闘！！」」

「先攻はもらっつ、ドロー！」

「ワーオ！この先生決闘始まった瞬間一気に先攻取りに行つたよ！
大人気ない人だ……………」

「私は賢者ケイローン（ATK1800）を召喚、ターンエンドだ」

上半身は人間、下半身は馬のモンスターが現れる、手には杖を持っている。

試験官 LP4000 賢者ケイローン ATK1800

手札 5枚 伏せカード×0

「僕のターン、ドロー、

暗黒界の狂王ブロン（ATK1800）を召喚、
カードを2枚セットしてターンエンド」

ブロンと相手のケイローンの攻撃力は互角、
だから相打ち狙いも出来たがそしたら
僕のフィールドはがら空きになってしまっつ、
次のターン相手のモンスターにダイレクトアタックを受けてしま
うから、

ここは大人しくターンエンドしておく。

優 LP4000 暗黒界の狂王ブロン ATK1800

手札 3枚 伏せカード×2

「次は私のターンだな、ドロー！」

賢者ケイローンの効果発動、手札の魔法カードを捨てて、
相手の魔法、畏カード1枚を破壊する、

君の右の伏せカードを破壊！」

「ならそれにチェインして畏発動、暗黒の謀略、お互いのプレイヤーは手札を2枚捨て2枚ドロウする、しかし相手は手札を1枚捨

「このカードの効果は知っている、私は手札を1枚捨て暗黒の謀略の発動を無効にする」

く、そう上手く成功はしないか、流石デュエルアカデミアの教師、カードの知識は豊富ということか……………

「ケイローンを生贄に、地帝グランマーグを生贄召喚！」

帝か、生贄召喚して効果を発動するモンスター……………との帝も厄介な効果を持っている確か地帝は

「地帝グランマーグの効果発動！このカードが生贄召喚に成功したとき場のセットカードを1枚破壊する、君の残ったセットカードを破壊！」

グランマーグは大きな足で僕の伏せカードを踏み潰す、まあ伏せカードは閻次元の開放、特に大切なカードでは無い。

「バトルフェイズだ！グランマーグでブロンを攻撃！！」

ブロンはグランマーグの大きな足で踏み潰されてしまった。

優LP4000 LP3400

「カードを2枚伏せ、ターンエンド」

試験官 LP4000 地帝グランマーグATK2400

手札 2枚 伏せカード×2

「僕のターン、ドロー（よし、このカードで）

魔法カード愚かな埋葬を発動、デッキからモンスターを1体墓地の送る

僕は暗黒界の龍神グラファを墓地に送る」

「（デッキから直接墓地にカードを送るカード、死者蘇生とかのカードを使う気か？）」

「暗黒界の狩人ブラウ（ATK1400）を召喚、

暗黒界を手札に戻すことで墓地のグラファは特殊召喚が出来る、暗黒界の狩人ブラウを手札に戻し墓地のグラファ（ATK2700）を特殊召喚！」

例の如く床から這い出て来るグラファ、グラファの攻撃力ならグランマーグを倒すことが可能、でも厄介なのはあの伏せカード、きっと僕の攻撃にカウンターするカードに違いない、さてどうするか？

「グラファでグランマーグを攻撃！ダークネスフレイム！」

「ここは恐れず攻撃あるのみだ！」

「伏せカードを警戒せず攻撃か……点数 - 1 だな。
速攻魔法発動、月の書、場のモンスター1体を裏守備表示にする、
暗黒界の龍神グラファを裏守備にする」

グラファの攻撃はグランマーグには届かず、裏側表示になってしまった。

「くそう、カードを1枚セット、ターンエンドです」

優 LP3400 伏せモンスター（暗黒界の龍神グラファDE
F1800）

手札 2枚 伏せカード×1

「どうした受験生、君の実力はこんなものか？

ドロー、サイクロンを発動、場の魔法、罨カードを1枚破壊する、
君の伏せカードを破壊」

竜巻が僕の伏せカードにぶつかり破壊されてしまった、うう僕の
落とし穴……

「続いてグランマーグを生贄にグランマーグを生贄召喚」

グランマーグを生贄にグランマーグを召喚か、

一見意味のない行動だと思うが、グランマーグは生贄召喚に成功
したとき

裏側のカードを破壊する効果を持っている……つまり

「グランマーグが生贄召喚に成功したとき

裏側のカードを1枚破壊する、君の裏側表示のモンスターを破壊、
そのままグランマーグでダイレクトアタック！」

「ぐあああー!!」

優 LP3400 LP1000

「私はターンエンド」

試験官 LP4000 地帝グランマーグ ATK2400
手札 0枚 伏せカード×1

「く………僕のターン、ドロー!」

「畏発動!ロスト、相手の墓地のカード1枚を除外する、グラファを除外」

え!?これじゃあグラファを復活させられない!!
闇次元の開放が破壊されてなければ………

「暗黒界の導師セルリ(DEF300)を召喚、ターンエンド」

優 LP1000 暗黒界の導師セルリ DEF300
手札 2枚 伏せカード×0

「私のターンドロー、グランマーグでセルリを破壊、
モンスターをセットしターンエンドだ(今年の受験生はたいしたこと無いな)」

試験官 LP4000 地帝グランマーグ ATK2400 伏せ
モンスター×1
手札 0枚 伏せカード×0

「、このままじゃ負ける……」

「ドロー……ん？このカード……よし！」

「（目付きが変わった？いいカードでも引いたのか？）」

「フィールド魔法、暗黒界の門を発動！」

僕の後ろに大きな門が現れる。

「暗黒界の門の効果発動！」

墓地の悪魔族モンスターを除外して、手札の悪魔族モンスターを捨てる、

墓地の暗黒界の導師セルリを除外し手札の暗黒界の狩人ブラウを捨てる」

門の中にカードが2枚吸収される、

その後門の中からカードが1枚出てきて僕の手札に加わる。

「その後、カードを1枚ドローする、

さらに今墓地の捨てたブラウの効果、

このカードが捨てられた時カードを1枚ドローする」

計2枚のカードをドローする。

「今ドローしたカード暗黒界の取引を発動、

お互いのプレイヤーはカードを1枚引き、1枚捨てる」

「私の手札は0枚、つまり引いて捨てるだけか」

「僕も1枚ドロ、そして引いたカードは暗黒界の龍神グラファ、今引いたグラファを捨てる、そしてグラファが捨てられたため貴方の伏せモンスターを破壊」

破壊したカードは番兵ゴーレムか。

「さらに暗黒界の刺客カーキを召喚、カーキを手札に戻し墓地のグラファを特殊召喚、暗黒界の門は場の悪魔族の攻撃力・守備力を300上げる効果もある」

暗黒界の龍神グラファ ATK2700 ATK3000

「グラファでグランマーグを攻撃！ダークネスフレイム！」

「く、やっと初ダメージか」

試験官LP4000 LP3400

「ターンエンド」

優 LP1000 暗黒界の龍神グラファ ATK3000

手札 2枚 伏せカード×0

フィールド 暗黒界の門

「私のターン、ドロ、カードを1枚伏せターンエンド」

試験官 LP3400 伏せカード×1

手札 0枚

「ふふふ、私の伏せカードは魔法の筒、
攻撃してきた瞬間私の勝ちだ……残念だったな受験生」
ふふふ、私の伏せカードは魔法の筒、
攻撃してきた瞬間私の勝ちだ……残念だったな受験生」

「すみません先生、めっさ声に出してますよ、その伏せカード
魔法の筒なんですか？」

「あ、しまった！く……」

「そうか、魔法の筒か……僕の手札に魔法の筒の発動を防ぐカード
は無い。」

「ターンエンドです」

優 LP1000 暗黒界の龍神グラフィア ATK3000

手札 3枚 伏せカード×0

フィールド 暗黒界の門

「く、あと少しで私の勝ちだったのに……口が滑ってしまった」
私のターン……ドロー……」

あと少しで勝てたのに、つい口が滑ってしまった、悔しい……みた
いなこと考えてるんだろうなあ」

「私は、何もせずターンエンド」

試験官 LP3400 伏せカード×1

手札 1枚

「僕のターンドロ、暗黒界の門の効果発動、墓地の暗黒界の狩人ブラウを除外して手札の暗黒界の龍神グラフィアを捨てる、

グラフィアが捨てられたため先生の伏せカードを破壊」

「く、このままでは負ける!?!」

「その後ブラウと門あわせて2枚カードをドロ、暗黒界の術師スノウ（ATK1700）を召喚、スノウを手札に戻し、墓地から2体目のグラフィアを特殊召喚!」

僕の後ろにある大きな門がガタガタと揺れ始め、その中から2体目のグラフィアが出現する。

「まだまだ!装備魔法DDRを発動、手札1枚捨て発動する、ゲームから除外されたモンスター1体を特殊召喚する、ゲームから除外されている3体目のグラフィアを特殊召喚!」

次元が歪んでその中からグラフィアが出てきた、1体目は床から、2体目は門から、3体目は次元の狭間から、演出が濃いな、海馬コーポレーション。

「門の効果で2体目、3体目のグラフィアの攻撃力は3000上がる!」

暗黒界の龍神グラフィア ATK2700 ATK3000

攻撃力3000のモンスターが3体、相手の場にカードは無い、勝ったな。

しかし攻撃力3000のモンスターが3体いると融合したくなるな……………

『暗黒界の究極龍アルティメットグラフィア（ATK4500）
出ないかな？僕だけの最強オリカで……………ないよね、
田中がそんな気の利いたことしてくれるわけないし、

この世界では無いと思われるグラフィアを3枚も送ってくれたんだからそれだけでも

感謝しとくか、それにしてもアルティメットグラフィアって、
僕のネーミングセンスかなり悪いな……………すこしシヨンボリ。

おっと、そんなこと考えてる時じゃなかった、

試験官さん攻撃力3000のモンスターが3体並んで顔絶望的だし、

速く終わらせないと可哀想だ。

「グラフィア3体で先生に攻撃！！」

「ダークネストリプルバーストオオオ！！！！」

「ぐわわああああ！！！！」

試験官LP3400 LPO

4600のオーバーキルか、少しやりすぎたかな……………

「く、流石だ、試験結果は今日中に郵便で送る、
いい決闘だった、ありがとう」

「こちらこそありがとうございました」

僕は決闘場から出て行くことにする。

廊下

さてこっからどうしよう、試験が終わった人はもう帰っていいんだよね。

外には理奈さんがいるからすぐに帰れるけど今日は亮も来てるから亮を置いて先に帰るわけにはいかないし、

亮の所に行こうかな？

それとも三沢君の所に行って残りの受験生の決闘でも見ようかな？

「……よし、亮の所に行こう！」

僕はおそらく亮がいると思われる所に行く。

第25話 「かーめーはーめー波ー!!」 by 悟空（後書き）

やっと原作に入った、疲れた〜

いつも本編書いてるときにふと後書きに書くネタが思いつくのに、
本編書き終わって後書き書くことすると何書くか忘れてしまうんで
すよ……………

色々な遊戯王小説読んでますがどれも面白いですね、僕も頑張ら
ないと。

第26話 「ペペロンチ ノー!!」 by クロノス(前書き)

今回は凄く疲れたそしてそろそろ夏休みが終わる!大変だ!

第26話 「ペペロンチ ノー!!」 by クロノス

丸藤亮 視点

よかった、優の勝ちか……あの人は確か松村先生、
地帝グランマーグ切り札にして岩石族を中心的に使う先生だった
な。

それにしても最後の優のグラフィア×3は凄かったな、9000の
ダメージ。

「あ！亮いた！」

聞き覚えがある声が後ろから聞こえてきた、
この声は俺が良く知っている人間、優だ。

「亮！勝ったよ！」

優は俺の目の前まで来る。

「ああ、凄かったな、見てたぞ優の逆転勝ち」

俺は優の頭を撫でる。

そしたら優は目を細め気持よさそうにする、
可愛いなあ優。

「亮、その男の子は誰？」

雷同優 視点

「亮、その男の子は誰？」

僕が亮に頭を撫でてもらっていると、
亮の隣にいる青い制服を着た金髪の女性が亮に話しかけた。
多分原作キャラの天上院さんかな？

「ああ、この男の娘は」

あれ？今亮の男の子の発音が違ったような？

「ああ！この子が前亮が言っていた弟の翔君ね！」

「違う、この娘は雷堂優、
分け合って俺の家に住んでいる」

「へー、優って言うの、可愛い子ね、
よろしく、雷堂君、私は天上院明日香よ」

明日香さんはそう言って右手を出してくる。

「こちらこそ、よろしくおねがいます、天上院さん」

僕も右手を出し、握手する、初対面だし苗字で呼んだほうがいい
よね。

「亮はまだ帰らないの？」

「ああ、一様全ての受験生の決闘は見ておきたいからな」

『受験番号1番から20番までの人は決闘場まで来てください』

これで最後か、三沢君は受験番号1番、つまり最後か。

亮はずっと受験生たちの決闘を見ている、少しあきたなあ〜

「ふわあああ」

「あら、退屈なのかしら雷堂君？」

「え？あ、そうかも、僕の決闘は終わったし、緊張の糸も切れちゃったし」

「そうなの？それと亮ね、雷堂君が来る前、私と2人で見ていたときもずっと」

受験生の決闘ばかり見てたのよ、飽きないのかしら」

「そうだね、綺麗な女性といるのに決闘ばっか見てるなんて、無神経だね、亮は」

「えっ！あ、うん、そうね……」

急に明日香さんは顔を赤くした、何か僕変なこと言ったかな？

その後、亮はずっと決闘ばっか見てるため、

暇になった僕と天上院さんは2人でいろいろお話した、

内容は兄弟いる？とかペット飼ってる？とか何処に住んでるの？

みたいな高校生が始めて出来た友達と話すような会話だった。

「ん、もう全ての決闘が終わったみたいね」

あ！本当だ！しまった三沢君の決闘は見ようとしてたのに！

『全ての決闘が終了しました、これにてデュエルアカデミア入試、実技試験を終了し　え、まだ1人いる？失礼しました、試験遅刻者がいるため、もう1決闘あります、受験番号111番今すぐ決闘場に来るよう』

「遅刻者？」

遅刻者、と言うことは原作第1話の十代VSクロノス先生が始まるということか！

それは見逃せないぞ！

あれ？十代はたしか111番じゃなくて110番だったような…

……ま、いっか別に。

「もう1決闘あるの？最後の決闘だし私も見ようかしら、
受験番号111番の決闘とやらを……」

決闘場に黒い学ランを来た茶髪の少年、きつと遊城十代だろう、
相手は原作どおり白い肌、おかつぱ金髪、唇が紫のクロノス先生、
まさか十代VSクロノスをリアルで見る日が来るとは。

そして十代VSクロノス先生の決闘が始まった。

先攻は十代、E・HEROフェザーマンを召喚し、カードを1枚伏せターンエンドらしい。

次はクロノス先生のターン、クロノス先生は魔法カード押収を発動した、

効果はライフを1000払い、相手の手札を確認し手札を1枚捨てさせる、

クロノス先生は十代の死者蘇生を捨てる、その後カードを2枚伏せて大嵐を使った、

十代の伏せカードはドレインシールド、相手の攻撃を1回無効にし攻撃してきたモンスターの攻撃力分自分のライフを回復させる、クロノス先生の伏せカードは黄金の邪神像、破壊されたときトークンを特殊召喚する

特殊な罠カード、それが2枚破壊されたため2体のトークンが召喚される。

『あれは入試用のデッキじゃない！クロノス教諭の自信の本気のデッキだ！』

『自分のコンボを成立させると同時に111番の罠も封じてしまった！』

決闘を見ているブルーの制服を着た生徒がそんなことを言っている。

『ふん、あの受験生が特別なのかと思っていたが飛んだ勘違いだった。』

クロノス教諭はドロップアウトボーイの儂い夢を徹底的に叩き潰

すつもりなんだ！』

ん、今の声どっかで聞いたことあるな……………

「あの子可哀想、クロノス教諭の気に召さなかったようね」

「見ものだぞ、111番のおかげで伝説のレアカードが拝めるかもしれない」

伝説のレアカード？ああ、アンティーク ギア ゴーレム 古代の機械巨人のことか。

僕の予想通りクロノス先生はトークンを生贄に古代のアンティーク ギア ゴーレム（ATK3000）を召喚した。

「これが、伝説のレアカード！」

そんなに強いかな？あのカード、ただ単に珍しいから驚いてるだけかな？

「クロノス教諭がこのカードを召喚して未だ負けたことは無い。

あの受験生に先生を本気にさせる力があるとは思えないが……………」

そうかな？ギア ゴーレム 機械巨人は効果破壊に耐性無いから地割れや地砕きですぐ破壊できると思うんだけど……………

「クロノス教諭は気まぐれだから。

気の毒に、アカデミアの鉄の扉が閉じる音が私には聞こえたわ」

「そうかな？僕はあの受験生が勝つと思うけど？」

「あの状況で勝てるわけ無いでしょ雷堂君」

うーん、だから頑張れば普通に倒せると思うけど。

「亮はどう思う？」

「クロノス先生が圧倒的有利なのは分かるが、

決闘は最後まで何が起こるかわからない、111番もまだ諦めてないようだぞ」

確かに十代はこの圧倒的不利な状況でも決闘を楽しんでるように見える。

クロノス先生は機械巨人ギアゴレムでフェザーマンを攻撃した。

機械巨人は貫通効果を持っているため十代は2000のダメージを受け

残りライフは2000。

クロノス先生はそのままターンエンド、次は十代のターン。

十代はドローしたカードを見て少し笑った、なんかいいカードでも引いたのかな？

アニメ、第1話は見たけど、数年前のことだし詳しくは覚えてない、

ついでに何故僕がこっから十代の表情が分かるかということ

この体になって自分の視力がかなり良くなった、16ぐらいかな？

十代は逆転のカードを引いたのかと思ったら、ハネクリボーを召喚し、カードを1枚セットしターンエンドだった。

「見たこと無いカードだわ」

「俺もだ……」

「あら学園のカイザーと呼ばれる亮にも知らないカードはあるのね」

「俺にも知らないカードはある、だから決闘は奥深い」

「だから面白いのよ」

「僕は知ってたけど」

転生前は6枚ぐらい持ってたような……

クロノス先生のターンは機械^{ギア}巨人^{ゴーレム}でハネクリボーを攻撃、ハネクリボーは破壊されたターン自分が受けるダメージは0になるため十代は無傷、

さらに十代は罠カードヒーローシグナルを発動しデッキからレベル4以下のE・HERO

E・HEROバーストレディ(ATK1200)を召喚する。

バーストレディか…僕が転生する前遊戯王しりとりというのが一

時期はやって

たけど『え』から始まるのでまず思いつくのがE・HERO、
けどE・HEROって殆ど『ン』で終わるからバーストレディ
ぐらいしか思いつかなかったな。

今思うとネオス系も『ん』で終わらないな……………やべ話がそれた！

どうでもいいこと考えてる内にいつの間にか、

フィールドが高層ビルがたくさん建つ町みたいになってるし、
十代の場にはE・HEROフレ임・ウイングマンがいる、

死者蘇生…いや、死者蘇生は先生によって捨てられたから戦士の生
還で

フェザーマンを手札に戻しバーストレディと融合したのかな？

フレ임・ウイングマンは高層ビルが一番上に立って、

ギア機械巨人を上から攻撃する。

フレ임・ウイングマンの攻撃力は21000で攻撃力30000の
アンティーク古代のギア機械巨人には敵わない、しかしフィールド魔法、おそらく摩
てんろう天楼 スカイスケレイパー は自分より強いモンスターと戦う時攻
撃力を10000ポイント上げる効果つまりフレ임・ウイングマン
の攻撃力は

E・HEROフレ임・ウイングマン ATK21000 AT
K31000

フレ임・ウイングマンがギア機械巨人を倒す。

クロノス LP3000 LP2900

それにフレ임・ウイングマンは破壊したモンスターの攻撃力分

ダメージを与える。

壊れた機械巨人はクロノス先生の頭の上に崩れ落ちる。

「ああ！先生が古代の機械巨人の下敷きに！」

「大丈夫だ優、あれはソリットビジョンだ………多分」

クロノスLP2900 LP0

「ちょっと、面白いんじゃない…あの子」

「そうだね、なんか何度も世界を救ってくれそうな人だね」

「なにを言っているんだ優？」

「いや、なんでも無い！」

もう試験終わったし速く帰ろうよ！」

「そうだな、じゃあな明日香、次はデュエルアカデミアで」

「ばいばい天上院さん」

「さよなら、亮、雷堂君、試験受かるといいわね」

天上院さんと別れ、僕と亮は試験会場を出る。

丸藤家

「ただいま」

「おかえりなさいでござる」

家に帰ると料理長がいた、料理長の手には、少し大きめの封筒と、大きいダンボール箱があった。

「料理長、その持っている物はまさか」

「そう、優殿の合格通知表と制服、バックet cでござる」

と、いうことは……

「僕、デュエルアカデミアに受かったの！」

「そうでござる、ついでにランクはラー・イエロー、高校から入った人にとっては最高ランクでござる」

「良かったな優」

「うん！」

「じゃあ今夜はパーティーでも開きましょう」

「おー！いいでござるな理奈殿！」

そんなかなで僕はデュエルアカデミアに受かった、
新学期が楽しみだな

第26話 「ペペロンチ ノー!!」 bYクロノス(後書き)

今回初登場明日香さん、明日香さんがどんな風に優とかかわるのか楽しみですね!

第27話 「24話ぶりの登場かな」by田中（前書き）

すいません、かなり遅くなりました。新学期になって色々忙しくなってしまったので……。

まず家に帰ると宿題をやらないといけないし（本当は昼寝してました）

休みの日は勉強しないといけないし（実は友達とカラオケ行ってきました）

空いた時間にやろうとしても、どうも執筆が進まない（他の作者さんの小説ずっと読んでました）ので遅くなってしまうました。

はい、つまりサボってました、いや、たしかにいそがしかったですけど僕も遊んだり休憩もしたいので……だからこれからも投稿は遅くなりません、スフィックスデッキぐらい遅くなりますがこれからもよろしくおねがいします。

第27話 「24話ぶりの登場かな」by田中

明日は待ちに待った新学期！楽しみだな。

「どうした優？何か嬉しそうだな？」

「？ん、そう思う？」

「ああ、凄く嬉しそうな顔をしている」

「だって明日はデュエルアカデミアの新学期だよ！楽しみだな！」

「新学期が楽しみとは優は少し変わってるな」

「そうかなあ、だって亮と同じ学校に行けるんだよ、
楽しみで今日はもう眠れないよ！」

「あ／／／そ、そうか、優／／／」

亮は何故か顔を赤くしてる、しかも口元が少し緩んでる……
笑ってるのかな？いや、あれはにやけてるに近いな？

「どうしたの亮！何で笑ってるの！？」

「いや、にやんでも…なんでも………によんでもない」

なんか3回も聞かされた！しかも殆どかんでるし！！

「優殿は鈍感でござるなあ」

急に料理長が後ろから声をかけてきた。

「りよ、料理長！いつの間に！！」

「拙者ほどの料理人になると誰にも気づかれずに
優殿の後ろに回るのなんて朝飯前でございますよ！」

「いや、それただ影が薄いだけでしょ……………
しかももう夕飯後だし……………」

「細かいことは気にしてはいけないうござるよ、優殿」

「そうですね、優様」

「おおあ！今度は理奈さんまで！」

いつの間にか料理長と理奈さんに囲まれてしまった！！

「私ほどのメイドになりますと誰にも気づかれずに
優様の背後に近づくことなんて朝飯前です」

「似たような台詞を料理長から聞いたよ……………」

「料理長、理奈…何しに来た、ここは俺の部屋だぞ」

「まあまあたまには良いでござろう、
優殿の入学記念になにかプレゼントでも思っただな」

「え？入学記念？」

僕が首を傾げていると

「優様、これは私からです」

そう言われ理奈さんが僕の腰に『何か』を付けた、よく見るとそれはオレンジ色のベルトだと気づいた、そのベルトは右と左に1個ずつデッキケースが付いていた。

「理奈さん…これは？」

「これは私が作った、優様への入学祝いです、横にデッキケースが着いているのでいつでも何処でも自分のデッキを持っていきます」

「わあ、ありがとうございます、大事にするよ！
かっこいいな」

「嬉しそうで何よりです」

わあ

「拙者はこれでご覧」

料理長が手に持っているのは黒い棒……いや、これは料理長がいつも腰につけている

日本刀……日本刀！？

「受け取ってほしいでござる、拙者の命の次の次に大切な日本刀でご覧」

なんか微妙だな……………

「いや、なんか、いいよ……………」

「何ででござるか!？」

「なんか汗臭いし……………汗臭いし、汗臭いし……………」

「そんなに臭いでござるか!？」

「しかも銃刀法違反だし」

「仕方ない……………なら優殿にはこっちを上げるでござる」

そう言われ料理長が持っていたのは小さな刀…ナイフだ。

「これならいいでござろう、護身用でござる」

まあ、いいか、僕は料理長からナイフを受け取る。

「理奈さん、料理長、ありがとう！」

大切にするよ!」

「優、俺も優に渡す物がある」

「えっ!?!亮も何かくれるの!」

亮は自分の机の中から一枚のカードを取り出し、僕に渡した。
亮から受け取ったカードを見ると、名前は

『サイバー・ドラゴン』

「サイバー・ドラゴン!？」

亮から受け取ったカードはサイバー・ドラゴン、
かなりのレアカードで1部のサイバー流決闘者しか持っていない
らしいけど

こんなカードもらっていいのかな？

「亮……いいの？これ、かなりのレアカードじゃないの？」

「ふっ、問題ない……俺は5枚サイバー・ドラゴンを持っている、
3枚はデッキに入れて……4枚目は優にやる」

おお!!マジですか!海馬社長とは大違いだ!!

「ありがとう亮!!」

「ふふふ……ふふふふふふ」

亮がさっきみたいに変な笑い方をしている……なんか怖い……
しかも亮なんか足元ふらふらしてる!大丈夫!

『ガコッ』

あ、机に腰ぶつけてる……

亮は机に腰をぶつけて机の上に置いてあったデッキが落ちて床に
散らばった。

「し、しまった」

「だ、大丈夫亮！？僕も拾うの手伝うよ！」

僕は亮と一緒に床に散らばったカードを拾っていく、

サイバー・ドラゴン、サイバー・フェニックス、融合、リミッタ
ー解除、

サイバー・ドラゴン、サイバー・ジラフ、パワー・ボンド、

オーバー・ロードフュージョン……ん？このカードは始めて見る、

効果は………うわっ！思い出した！これキメラテック出す奴だ……

……

亮のデッキにも入ってたんだ　　って、効果読んでないで早く

カード

拾わないと………融合賢者、サイバー・ドラゴン、次元幽閉、奈
落の落とし穴、

魔宮の賄賂、セイバリ、鬼畜カードばっか！！ガチかよ！

次は、サイクロン、タイムカプセル、サイバー・ドラゴン、

大嵐、融合　　ん、今4枚目のサイバー・ドラゴンが入ってた

ような………

「優、拾ってくれてありがとう」

亮に拾ったカードを軽く無理やり持っていかれる。

「あのさ、亮、今デッキに4枚目のサイバー・ド　　」

そこまで言った所、亮に口を塞がれた！

そして理奈さんや料理長には聞こえない僕にだけ聞こえる声で

「優、世の中には、知っていいことと、知ってはいけないことがある、分かってくれ」

そう言われ僕の口を塞いでいた手が離される。

知っていいことと、知ってはいけないこと……

亮のデッキに4枚目のサイバー・ドラゴンが入っていたのように見えるのは、

現実か……幻か、真実は、亮にしか分からない……

9時35分

優の部屋

「よし！制服も用意したし！デッキと決闘盤も持った！
理奈さんがくれたベルトもあるし料理長のナイフもある！
後は明日に備えて寝るだけ！」

学校に行く準備も済んで、これから寝ようとする、
すると僕の目の前が『ピカッ』と光った　　って何事！！

僕は反射的に目を閉じる。

数秒し目を開けてみると誰もいないはずの僕の部屋に

1人の男性が立っていた……男なのに長くさらさらな髪、
世間でイケメン、リア充と呼ばれるような整った顔立ちをしてい
る、

そう、僕はこの男を知っている、僕をこの世界に連れていった自
称神

「おひさしぶりですね、雷堂さん、1ヶ月ぶりでしょうか？」

田中がいた。

「いやー、無事転生できてよかったです、なにせ私、人間を別世界に転生させるの初めてでして、それにしても印象変わりましたね、イメチェンですか？」

僕のベットに神の田中がどっしりと腰を下ろし、あぐらをかいている。

「何よりじゃないよ！僕全然知らない所に転生されたし、所持金10000円だし、家無いし、カード無いし大変だったよ！」

「まあまあ、落ち着いて、ほら雷堂さん、私をあの後考えなおしてこの世界には無いという設定のグラフィア3枚も送ったじゃないですか」

「それだけじゃん！亮に拾われなかったら僕今頃死んでたよ！！しかも今設定って言った！？何設定って！！」

「だから、この世界は遊戯王GXの世界ですが、

完全に遊戯王GXの世界ではないのです」

「どうゆうこと?」

「ここは遊戯王GXを移した世界、軽く言っちゃうとパラレルワールド並行世界、遊戯王の世界には違い無いんだけど、少し違う」

「うーん、難しい……」

「つまりここは遊戯王GXの世界なのは変わりない、そこに少し設定が加わったり、貴方が加わった、ぐらいです」

「む、大体わかった……」

「わかってくれましたか、並行世界と言っても、そんなに大きく変わってませんから貴方の持つ原作知識とらは役に立つと思いますよ……貴方が何もしなければ、ね」

「なんで?」

「雷堂優という存在、それはこの世界では異分子、本来いないはずの存在、それを無理やりこっちにつれてきたのです、

だから原作も貴方の行動しだいで大きく変わります、つかもう変わってます、貴方がデュエルアカデミアを受験したせいで

受験番号119番のはずの丸藤翔は受験番号120番になっていきます、

そして貴方がデュエルアカデミアに受かったことにより本来成績最下位で入学する生徒が落ちました、

もしその人間が丸藤翔だったら……遊城十代だったら……
この世界は大きく変わり最悪バッドエンド落ちもありゆる……」

「ま、まじで……」

「ま、本当に落ちた人間が丸藤翔や遊城十代とは限りません、
そんなに心配しなくてもいいです、いざとなったら貴方が世界を
救ってください」

「え、えー」

「大丈夫ここだけの話丸藤翔も遊城十代もデュエルアカデミアには
落ちてません、

保障します、ただ私が言いたかったのは、
必ず原作どおりに進むわけではないので安心しきってはいけない
ということですよ、

ただの忠告です、いやー私、気が利いてますね!!」

「そうか、ふ〜」

少し安心。

「でもそれはそれで面白いかも、
僕の行動によっていろんなEfが起こる………楽しみになってき
た」

「それは良かった」

「んで、それだけのためにきたの？」

「いや、もう一つ雷堂さんに言いたいことがあります」

そう言って田中は細長いガラスの棒、いやフラスコのようなものを取り出した。

「これは私からの入学祝いです」

「なにこれ？」

「ふふふ、良くぞ聞いてくれました！

これは決闘エネルギー蓄積装置とでも言いましょうか」

「まあ、で、なんに使うんですか……」

「これは決闘して勝った相手のデュエルエネルギーを吸い取る装置です」

「エネルギーを吸い取る！？それやばくない！」

「吸い取るといっても、吸い取って相手のエネルギーが減るわけでは
ありません、分かりやすくいうと貴方の経験値を表示した物とで
も言ったところですよ」

「つまり……」

「これを持って決闘し、勝つことでこのフラスコに黄色い液体が貯
まります、

これが多いほど貴方がたくさん決闘に勝っているということにな
ります、

逆に負けると、減ります、いいですかこっからが本番ですよよく聞

いてください、

「この決闘エネルギーを卒業までに満タンにしないと、大変なおきまず」

「大変なことって？」

「それは言えません、でも貴方が予想しないような大変なことが起きます」

「なにそれ怖い……しかもなんで僕がそんなことしないといけないのー!!」

「あれ、契約書をちゃんと読んでないんですか？」

「貴方がサインした契約書にはちゃんと書いてありますよ、転生し原作にはいつてから原作が終了するまでにある課題を終わらせないと」

「大変なことが起きる、と……」

「ま、マジですか……」

「マジです……」

「そ、そんなあ〜」

「まあまあ、そんなに落ち込まないで……」

「この装置もエネルギーを貯めるだけではないです
ほらここにスイッチがあるでしょ」

「フラスコを見てみると3つ色が違うボタンが付いていた。」

「まず赤のボタン、これを押すと」

「押すと?」

「貯めたエネルギーが全部無くなります」

「ダメじゃん!?!」

「まあまあ、たまにリセットしたいときってないですか?」

「ないよ!仮にあったとしてもこの場合は無いよ!」

「そうですね、次に青のボタンですが」

「押すとどうなるの?」

「核爆弾のスイッチが機動します」

「やっぱりダメじゃん!?!」

「そうですね?たまに全てを吹き飛ばしたいときってないですか?」

「ないよ!?!流石にソレは無いよ!?!」

「そうですね、最後に黄色のボタンですが」

「どうせロクなもんじゃないでしょ」

「そんな事無いです、黄色のボタンを押すと、」

私の携帯と繋がります、なにかあったら相談できますよ?」

神なのに携帯持ってんの!?

「まあざっとこんな感じですよ、ではさようなら、
頑張つてエネルギーを貯めてくださいね」

さっきみたいに『ピカッ』っと目の前が光り、
田中は消えてしまった、あいつ……………神は神でも厄病神かよ……………

そして僕は、なんか本気で学園生活を送らないとこの世界が、
いや、僕自身も大変なことになってしまつらしい……………はあ

僕はあまり『ウザイ』とか『ダルイ』とか『面倒くさい』とかあ
まり言わない人間なんだけど今回だけは1つ言いたいことがある。

「ウザイ、ダルイ、面倒臭い」

ま、そんなネガティブに考えるのも僕らしくない！
やるからには何もかも楽しまないと!!

第27話 「24話ぶりの登場かな」by田中（後書き）

この前僕の本名と同じユーザーネームの人がいて少しビックリしました。

そして次回は原作2話前編だと思います。

久しぶりの投稿でしかも内容がかなりぐだぐだ、

でもこれからもがんばりますから応援してくれると嬉しいです。

他にも何かこの物語に対するアドバイスとかくれると助かります、ではまたいつか。

第28話 「ヘルヘルヘルうるさいなあ」 by 優（前書き）

投稿した日に自分の小説のアクセス解折を見てみると夜中なのに結構な人が読んでる、みんな夜中に何してるんだろっ？

作者なすびの小説のネタ書きやすい場所らんきんぐ〜

やってきましたこの謎のコーナー、内容は僕が小説の書きやすい場所をランキング形式で発表するあまり意味の無いコーナーです、決して前書きに書く内容が無く、とりあえずどうでもいいこと言っ
て文字数稼ぐかとかは思ってます（僕は意外と細かい性格なので
前書き・後書きに何もないと何か気に入らないのです……………）

では早速第3位発表！！！！

第3位通学中の自転車のこいであるとき。

何か自転車こいでるとネタがポンポン出てくるんですよ、ま、7割がた忘れてしまいますが、どっちかというと妄想に近い気がする。

第2位は次回発表！！

第28話 「ヘルヘルヘルうるさいなあ」 by 優

「優様……起きてください」

むう、眠い……でも、起きないと……今日はなにか大切な日、
だった気がする……そう、確か……が、が

「優様、起きてください」

女の人の声が聞こえる……この声は確か……

僕は眠りから覚め、少し重いまぶたを開ける。

僕の目の前に、理奈さんがいた。

「……んう、あれ？理奈さん……？何でここに？」

ああ、眠い、昨日は緊張してあまり眠れなかった……
あれ？なんで緊張してたんだっけ？何か大切な用事が今日あった
ような……

「優様、今日はデュエルアカデミアの入学式の日です、
早く起きないと遅刻してしまいます」

デュエル……アカデミア……！！
まさか……！！！！！！

「今日はデュエルアカデミアの入学式だった!!」

僕はさっきまで眠たくて重たい体を起こし、
ベットから飛び上がる。

「やっと起きましたか……」

「理奈さん大変だ！今日はデュエルアカデミアの入学式だ！」

「だからさっきからそう言ってるじゃないですか………」

僕は目を覚ますと急いで制服に着替えて、荷物を持ち、家から出た。

今は理奈さんの車でデュエルアカデミア行きの船が出る港まで行く、

デュエルアカデミアは小さな島の上にあり、

飛行機が下りる滑走路も無いため移動手段は船かへり

でしか行けないらしい、そういえば水戦艦という手もあったな……

……

「そう言えば理奈さん、亮は？」

運転席で運転している理奈さんに話しかける、

何か僕のイメージでは理奈さんはハンドルを持つと

性格が変わって超危ない運転するイメージだったんだけどな……

意外と安全運転だな。

「亮様は在校生なので先に行きました、

そう言えば優様はまだ朝食を取ってませんでしたね」

「あ、本当だでも、時間無かつたし……」

「じゃあこれでも食べててください」

理奈さんは助手席の物を入れるスペースから

2つの物を投げてきた。

「おっとと……！」

理奈さんから投げられた物……

カロリーメイトとウィダーインゼリーだった、

まあ無にも食べないよりマシだから食べておこう。

暫く理奈さんが運転し、僕が外の風景をボーッと見てると、
いつの間にか港に着いていた。

「優様つきましたよ」

「うん、分かった」

車から出て港に止まっている船に向かおうとする。

「これでサヨナラですね……………優様」

少し寂しそうな顔をする理奈さん。

「大丈夫！冬休みには必ず帰ってくるから！！」

「フフツ、そうですね、では優様が帰ってくるのを
料理長と楽しみに待っています」

「うん！じゃあね！いつてきます！！！！」

「はい、行ってらっしゃい、優様」

僕は理奈さんと別れると船に向かって走っていく。

松村先生 視点

よし、そろそろ、出発時間だ多分入学生も全員来たしもう出発してもいいだろう。

「すいませーん！！」

ん？向うからデュエルアカデミアの制服をきた少年が走ってきた、まだ入学生がいたのか？

「はあ、はあ、はあ、

すいません、これデュエルアカデミア行きの船ですよね」

「ああ、そうだが、この格好からすると君も入学生か…早く行きなさい、もう出発するぞ」

「あ、はい、ありがとうございます」

入学生は船の中に入ろうとする

「ん、君、昔どこかであったような気がする」

「えっ！？ナンパですか？」

「違っつ！たしか君とはどこかで……」

ああ！試験のときか！ほら入学試験のとき
君と決闘した者だよデュエル」

「（てかこの先生は髪型も同じだしみんなグラスンだから誰が誰だか分からないよ………）
ああ、魔法の筒伏せたのにつっかり口に出しちゃった
マヌケな先生」

「ぐ……それは言わないでくれ……」

まあ私は今年度は1年生担当だ、
学校でも会う機会があるかもしれない

その時はよろしくたのむよ」

「はい、わかりましたー」

入学生は船の中に入っていく。
これで今度こそ入学生は全員来ただろう。

「おーい！まっしてくれー!!」

なんだ、また入学生か色は………レッドか。

「はあ、はあ、すみませんここデュエルアカデミア行きの船ですよ、
ね、

俺も乗せてください………はあ、はあ」

「あ、ああ、構わないぞ……ん？
君もどっかで会ったような………」

「ん、一昔前のナンパか先生？」

「だから違つといってるだろ!!1111番!」

「あれ？何で俺の受験番号を？ストーカー？」

「違つっ！試験にどうとうと遅刻して
あのクロノス教諭を倒したんだ、名前も覚えられるわ!」

「ああ、やっぱり俺ってもう軽く有名人、いやー参ったな〜ハハハ」

「もういい、早く入りなさい1111番、もとい遊城十代君」

「はい」

再び雷堂優 視点

ふう、なんとか間に合った……………

あと1時間ちよつとでデュエルアカデミアに着くらしい。

僕はただひたすら変わらない風景、海を見続ける。

あ！Nアクア・ドルフィンネオスペースファン！じゃ無くてもイルカか……………

遊戯王やっているとイルカがアクア・ドルフィンに見えてしまって

困る……………

あ！あそこを飛んでるのはNエア・ハミングバード！じゃ無くて
ただの鳥か……

うん、流石に今のはボケです、ごめんなさい。

はあ、やっぱり暇だな……同じイエローの人に声でもかけようかな？

「よう、30番、元気か？」

声をかけようかと考えていたら逆に声をかけられてしまった。

この声と喋り方は

「三沢君、久しぶり」

三沢君みさわだった。

「ああ、久しぶり30番、もとい雷堂優、その様子だと君も受かったらしいね」

「まあね、どう？イエローの制服、似合う？」

「ああ、似合うぞ」

「えへへ」

「(ドキッ！な、何だ今の胸がドキッとする感覚は？
き、気のせいか……?)」

「まだ到着まで30分以上あるみたいだから
どこかで休憩しようよ」

「そ、そうだな」

僕と三沢君は船の中にある休憩所に行くことにした。

三沢大地 みさわ だいち 視点

ここが休憩所か、ベンチや自動販売機もあるし軽くクーラーが効いている、

でも少し生徒の数が多いな、人口密度が高い。

「アイスでも買う？三沢君？」

「ん、そうだな」

俺と優は自販機からアイスを買う、

空いてるベンチを見つけたのでそこに2人で座ってアイスを食べることにする。

「ぺろぺろ……おいしいね三沢君」

「あ、ああ」

高校生になってアイスぺろぺろ舐めるなや……

ま、まあ優は容姿があれだからやっても不自然に思わないな……

な、なんか可愛いな、無邪気で心がまだ子供っぽくて、

アイス1つでこんなに嬉しそうにして……高校生とは思えない

…。

はっ！俺は何考えてるんだ！一瞬男である優に惚れそうそうだった！

大丈夫だ俺はノーマルだ、ゴメン、実はロリコンだ、

でも幼い女の子が好きであって男の娘には興味は無い！！！！

……………。

「ふああああ、やっとついたー！」

船に揺られて約1時間、船は無事デュエルアカデミアに着いた。

デュエルアカデミア、綺麗な海！豊かな自然！

楽しい決闘デュエルが出来そうな予感！そして隣に倒れている三沢君。

「ゆ、優……助けて………」

「ちよー！……三沢君、大丈夫！？」

「俺……乗り物系はだめなんだ………うえっぶ、吐きそっ」

「ここで吐かないでよー！」

「何か液漏れしない袋を………」

本来ならまずこれから入学式のためデュエルアカデミアの校舎に行く予定なのだが

三沢君がこんな状態のため少し遅れそうである。

「もう、三沢君、酔い止めの薬ぐらい持っておきなよ」

軽く背中をさすってあげる。

「うう………優、俺に構わず先に行け………」

「何ここでそんなかつこいい台詞言ってるの！」

実際そんな大したことないよね!！」

「やっぱ無理……………優助けて……………」

その後約10分間三沢君の背中をさすってあげたり、水買ってきてあげたりで大変だった……………まあ入学式には間に合ったけどね。

入学式終了

入学式が終わった、次は自分の寮に行つて、夜には各寮ごとに歓迎会があるらしい、楽しみだな。

「それでここがイエローの寮、思ったより綺麗な所だ」

校舎からもそんなに距離無いし、すぐ近くに綺麗な湖もある、
なんだかんだ言っつてイエロー寮が一番住みやすいと思う今日この
頃。

「えーと、僕の部屋は……………つと、ここか」

デュエルアカデミアの合格通知表と一緒に送られてきた生徒手帳
というか携帯端末

（PDAと言っらしい、もうこれ生徒手帳じゃないよね軽くiP
od touch

並みの性能だね、iPod touch使ったこと無いけど）
で入学式が行われた校舎からイエロー寮までの道のりを調べ、
同じく合格通知表と一緒に送られてきた自分の寮の部屋番号が書
かれた

紙を頼りにここまで来た訳です、はい。

三沢君？なんかまだ気分悪いらしいから保健室よってくらいだよ。

『ガチャ』

部屋の中は……………おっ、意外と広い、

イエローはレッドと違い1人部屋だし、ベットもある、
勉強机も置いているしクローゼットも結構服が入りそうだ。

「いやーそれにクーラーまで付いてるなんて、
極楽極楽、余は満足じゃ」

どっかの殿様みたいなキャラになるぐらい快適です、いや、マジ
で。

歓迎会までこの部屋で寛いでよ。

「……………」

……………」

「……………」

……………」

「……………」

……………」

「暇だ、歓迎会まであと数時間、
今思うと主人公である十代にもあつてない……………」

このまま原作に関わらず本編終了なんてことはないよね……………」
なんか沢山^{デュエル}決闘して決闘^{デュエル}エネルギーを貯めないと大変なことが起
きるとか

田中も言ってたし……………」

「まさか……………」ね」

やっぱり不安だ！！

『テクテクテクテク』

僕は今デュエルアカデミア校舎の廊下を早歩きで渡っている、理由？何が何でも原作に関わってフラグ立てないと

折角遊戯王の世界まで来たのに何も無い学園生活で卒業なんてこともありえる。

それは何が何でも避けたい、

僕の記憶が正しければ今日この時間帯は万丈目まんじょうめさんと十代君の接触イベントがあつたはず、

そこに偶然僕が入ってきて万丈目まんじょうめさんに顔を覚えてもらい、十代君に自己紹介して友達になれば僕もレギュラーメンバーの仲間入り！はっはっは！どうだ参ったか！！

「えっと………ここかブルー専用決闘場デュエルフィールド」

中は、思ったとおりブルー生徒が2人いる、

顔は忘れたけど多分万丈目さんの取り巻き1と2だろう。

「おい、貴様、ここで何をしている!」

「ここはブルー専用決闘場だぞ、イエローの分際で」

イエローでも差別ですか……………だからブルーは、

1年生のブルーは中等部から上がってきたエリートのみが入れるらしい、エリートって言っても親の金の力で

中等部に入れてもらったお坊ちゃん、お嬢様ばかり、

無駄にプライドが高かったり甘やかされて育ったせいか我侷な奴もいる、

拳句の果てに不良まで……………プロ決闘者を育成する学校とか言ってるけど実際金が欲しいだけじゃないのか……………

「いや〜ちょっと決闘の匂いがしたので」

「は、何言ってるんだお前?」

「ほー、貴様、この俺にケンカを売ってるのか?」

影になって見えなかったけど、取り巻き2人の横から万丈目さんが出てきた。

「あ、万丈目さん!」

「イエローのドロップアウトがこの俺様に何か用か?」

はあ、イエローでもドロップアウト扱いか……………

十代君たちもないし、もう帰ろうかな、こいつらと話していると

イラついてきて原作とかフラグとかどうでもよくなってきた……

「いや、何でもないです、じゃ、さよなら」

僕が決闘場から離れようとする^{デュエルワールド}

「おっと、ただじゃ返さないぜ！」

取り巻き2人に腕をつかまた！く、動かない、この体じゃ肉弾戦はきついか。

「お前、ブルーの決闘場^{デュエルワールド}に勝手に入ってきて何事も無かったかの用に帰ってんじゃねーよ」

あ、あれ、もしかして僕………凄くピンチ。

「ちゃんと入場料を払ってもらわないと」

「入場料は貴様のデッキで十分だぜ！」

やり方が軽くヤザの手口だ！

っていつてもこの状況は不味い………かなり不味い……。

「ふん、イエローごときが調子に乗って俺たちにケンカ売るからこつなる」

いや、売ってないよ！むしろ売られたよ！

「でもまあこの俺様と決闘^{デュエル}で勝ったら許してやっても構わん」

「えー」

「貴様に拒否権はない」

理不尽だ!!

「それともここで大人しくデッキを渡しとくか？」

……

「わかったよ………やればいいんでしょやれば、
ただしこっちにも条件がある、僕が勝ったらキミのデッキをもら
おう」

「っは、この俺様が貴様のようなちびガキに負ける………
そんなわけないだろ、いいだろうその賭け乗ってやる、
ま、俺が負けることはまずありえないがな」

「………つち、金の力で入ったプライドにしがみ付いたお坊ち
やん共が………」

今回ばかりは僕も怒った、本気でやらせてもらおう。

「行くぞドロップアウトボーイ」

「こいよ、まんじょうめ万丈目」

「なぜ貴様が俺の名を知っている!？
まんじょうめそして万丈目さんと呼べ!！」

初めは呼んであげようとしたけどこんな態度取られちゃさんず付けする気も失せる。

「「決闘デュエル!!!」」

「先攻はエリートである俺様がもらう!」

それは関係なくね。

「俺は地獄戦士ヘルソルジャー(ATK1200)を召喚!」

剣を持った鎧を着た戦士ソルジャー、効果は確かアマゾネスの戦士の劣化版。

「さらにカードを1枚セットし、ターンエンド!」

万丈目まんじょうめ LP4000 地獄戦士ヘルソルジャー ATK1200

手札 4枚 伏せカード×1

「僕のターン、ドロー、暗黒界の術師スノウ(ATK1700)を召喚」

杖を持った白い悪魔、おそらく女だと僕は思う。

「スノウで地獄戦士ヘルソルジャーに攻撃!

ダークマジック!」

スノウが杖の先から黒い弾を作り地獄戦士ヘルソルジャーに放つ。

万丈目まんじょうめ LP4000 LP3500

「ぐぐぐ、ドロップアウトがこの俺様のライフに傷をつけるとは……」

じゃあ守備表示でだせよ！

「しかし地獄戦士ヘルソルジャーが攻撃され破壊されたとき、

俺が受けるダメージを相手にも与える、

どうだ参ったか!!」

地獄戦士ヘルソルジャーが爆発した後持っていた剣が飛んできて僕に当たる。

優LP4000 LP3500

何かさっきの台詞と少し矛盾してる気がするけど……

「カードを2枚セット、ターンエンド」

優LP3500 暗黒界の術師スノウATK1700

手札 3枚 伏せカード×2

「俺様のターン！ドロー!!」

装備魔法、早すぎた埋葬を発動！

ライフ800と引き換えに自分の墓地のモンスター1体を

復活させこのカードを装備する」

まんじょうめ
万丈目LP3500 LP2700

「地獄戦士ヘルソルジャー(ATK1200)を特殊召喚。

今召喚した地獄戦士ヘルソルジャーを生贄に、

地獄將軍・メフェストヘルジェネラル(ATK1800)を生贄召喚だ!」

黒い鎧を着た地獄の騎士、しかし攻撃力はレベル5の割りに攻撃力1800

ブロン様と同じ攻撃力………たいした事無い。

「行くぞ！メフィエストでスノウを攻撃だヘルアタック！」

「安直すぎる攻撃名だ！」

優LP3500 LP3400

「更にこのカードが相手に戦闘ダメージを与えた時、相手の手札を1枚選び捨てさせる、右端のカードを捨てさせる」

あ、ラッキー。

「残念でした、捨てられたカードは暗黒界の武神ゴールド（ATK2300）

このカードは手札から捨てられた時自分フィールド上に特殊召喚する、さらに相手によって捨てられたなら

おまけ効果で相手フィールド上のカードを2枚破壊する、
万丈目、お前のモンスターと伏せカードを破壊」

ゴールドが持っている斧を振りかざすと
万丈目の場のカードが全て吹き飛んだ。

「く………お、俺はターンエンドだ」

ふふふ、凄く悔しそうな顔をしてるぞ………

万丈目LP2700 すっからかん
手札 3枚

「僕のターン、ドロー」

僕は暗黒界の狂王ブロン（ATK1800）を召喚！」

「ギャハハハハ！！！！愚かな人間共め！この俺様が叩き潰してやる！！！」

あ、あれ？今何か声が？？

「ま、まあいいや……」

ゴールドでダイレクトアタック！暗黒の斧！」

「ぐうう！」

万丈目LP2700 LP400

「ブロンでトドメだ！」

「ぐうううあ！！！」

万丈目LP400 LPO

万丈目のライフが0になり万丈目は床に膝をつける。
手札のカードが床に散らばる。

「こ、この俺が負ける……俺が……エリートであるこの俺が……
……負けた！？」

僕は万丈目の近くまでより床に落ちたカードと墓地、デッキのカードを全て集め1つに纏める。

「万丈目、いや万丈目君、約束だったよね、この決闘の敗者はアンティ―としてデッキを奪われる」

「ぐ、ぐう……………く、くそ」

万丈目君が苦やしそうな顔をする。

「でも……………いいや、このデッキは返す」

「な、何！この俺のデッキが要らないだと！！」

「いや違う、要らないんじゃない、僕は万丈目君に知って欲しかったんだ、相手が嫌がつてるのに無理やり決闘させたり、校則で禁止になってるアンティ―を持ちかけたり、ブルー以外の相手を見下したりさ。そんなことしなくてもいいじゃん、万丈目君も昔は心から決闘を楽しんでたんじゃないかな？でもエリートになってプライドが邪魔して努力することをおっこ悪いと思ったり、決闘には勝たなくてはいけないと思うようになったり……………」

「……………」

万丈目君は黙ったままだ。

「だからさ、こんな決闘デュエルじゃなくて
もっと自分も相手も楽しめる決闘デュエルをすればいいんじゃない？」

「……………」

「ゴメン、偉そうなこと言って、

僕が言いたかったのはそれだけ、じゃあね」

僕は決闘場デュエルフィールドを後にする、

取り巻き達は　　追っかけてこないっばい。

そろそろ歓迎会が始まる、寮に戻る。

まんじょうめじゅん
万丈目準　視点

ま、負けた、この俺が、デュエルアカデミア中等部1位と言われ、
高等部に来ても勝ち続けなければいけないのに……………

俺は勝たなくてはいけないんだ……………いや、違う、俺は負けちゃい
けないんだ！

兄さんたちに言われた、万丈目家はどんなことでもやるからには

1番に

ならなければいけないと、もし俺が入学早々同じ1年のイエローに
負けたことが学校に知られたら、兄さんたちにはばれたら……………

……

更にアンティーは要らないだと!? しかも敗因は俺の知識不足、
更にはこの俺に説教だど!!! ふざけるなふざけるなふざけるなふ
ざけるな!!!!!!

「復讐だ……………」

勝つ、何としても……………勝つ、

どんな手段を使っても俺は奴に勝たなければいけない。

失った誇りを取り戻すため……………いや

そんなんじゃない、俺はただ純粹にアイツに勝ちたい! もう1度
闘いたい!

「待っているよ……………雷堂…優」

第28話 「ヘルヘルヘルうるさいなあ」 b y 優（後書き）

はい、今回いきなり原作無視です、十代君来ませんでした、明日香さんに止められる前に万丈目君倒しちゃいました。いいじゃないですか二次小説なんだもの、かの有名なトキさんも言っていました『原作は投げ捨てるもの』って。

第29話 「さり気無く十代もキャラが変わっています」byなすび（前書き）

作者なすびの小説のネタ書きやすい場所らんきんぐ

やって来ました正直作って損したこのコーナー、でもやるからには最後までやります、では第2位!!

2位、よる寝る前布団の中で、小説の続きを考えてます、そうするとあら不思議！内容は7割以上忘れて朝になっているではありませんか!!

はい、これも半分以上妄想ですね、次回ついに第1位!!

第29話 「さり気無く十代もキャラが変わっています」byなすび

「はあ、はあ、はあ、はあ……………疲れた」

万丈目君との決闘の後僕は急いでイエロー寮に戻り食堂に行った、着いた頃にはもう殆どの生徒が集まっており長いテーブルの上には美味しそうな料理が沢山並んでいた。

「よお、優かなりギリギリだな丁度今歓迎会が始まるところだぞ」

「うん、ちょっとあってね」

三沢君の隣の席に座る、何か僕デュエルアカデミアに来て三沢君と1番

話してる気がする。

僕が席に座って机に並べられた料理を見ていると

扉が開き30代後半〜40代前半と思われる少しやせ気味の

黄色い服を着たおじさん（多分先生）が入ってきて真ん中のイスに座った。

そのおじさん（多分先生）の顔をよく見ると、

ひげが長く気の弱そうな顔をしている、はて、こんな人原作に出てたっけ？

「皆さんこんばんは、そしてデュエルアカデミアへ入学おめでとうございます、

私はイエロー寮寮長の榊山かはやまです。

担当は主に美術、あと家庭科も少し出来ます、皆さんこれからよ

るしくお願いします」

おじさん（やっぱり先生だった）は軽く自己紹介して歓迎会は始まった。

もう何人かは友達が出来たみたいで会話していたり
一人で黙々と料理を食べていたりとして比較的賑やかな歓迎会だった。

僕？僕は三沢君と話ながら料理をお腹いっぱい、美味しくいただきました、丸

歓迎会（と言っても料理を食べるだけ）も終わり僕は自分の部屋に戻った、

ふ〜お腹いっぱい……………ん？PDAにメールが来てる何々……………
げ！万丈目君！！

『やあ、ドロップアウトボーイ、午前0時決闘場で待っている。

お互いのベストカードを賭けたアンティールで決闘だ

勇気があるなら……………来るんだな。

てか絶対来いよ！絶対勝ってやるもし逃げたら後でどうなるか
分かってんだらうな。

……………ニゲタラノロウ』

そこでメール、動画だったからビデオメール？は終わった、うん

……………

こ、怖えええ〜えええええ！！！！

な、何これ！超怖いんですけど！！こなかったな呪う？呪うって言

ったー!!

いや、気のせいだよ、気のせいであってほしいよ！
多分気のせいだよ……もう一度確認してみよう………

『やあ、ドロップアウトボーイ、午前0時決闘場で待っている。

お互いのベストカードを賭けたアンティールールで決闘だ

勇気があるなら………来るんだな。

てか絶対来いよ！絶対勝ってやるもし逃げたら後でどうなるか
分かってんだろっな。

………ニゲタラノロウ』

やっぱ呪うって言うてる！行くしかないのか！

でももう門限はとくに過ぎてるしアンティールールは校則で禁止

されてるし………さっきは万丈目君が油断してたから勝ただけで

次はそう上手くいくか………やっぱあそこで僕が余計なこと言った
から!?

あの時は本気でムカついてたからつい言っちゃったけど

やっぱウザかったよね………どうしよう…仕方ない行くか。

「あれアニキー、メールが来てるよ」

「ん、何々？午前0時決闘場でアンティールールで決闘？」

「行くんスか？アニキ？」

「いいや別に興味ね、大体俺この万丈目とか言う奴会ったことないし、

アンティールール校則で禁止されてるし、

そもそも俺が行ったらこの万丈目とか言う奴切り札無くなっちゃ
うよ、

俺がこんな奴に負けるわけ無いし」

「す、凄い自信っス！！」

「午前0時に決闘場、今は9時30分だから後2時間30分か移動時間も考えて11時30分には行くか、ふわあああゝそれにしても眠い、少し仮眠取るか」

お休み。

午前0時30分

決闘場

「万丈目さん、雷堂の奴、来ないですね」

「一様入学試験の時調子に乗っていた111番にもメール送ったとき

ましたけど

そつちも来ませんね……………」

「雷堂優……………絶対呪う」

くおまけく

「（おかしいわね、この情報がただしければこの時間に1111番と亮の家の居候君が万丈目君と決闘するはずなんだけど……………」

こないわね、もう0時30分よ……………」

！！あれはガードマン！見回りに来たのね、

1111番達の決闘が見れないのは残念だけど今回は帰ることにするわー！）「」

「コラ君達！今は外出禁止の時間だぞ！

しかも何故勝手に学校の設備を使っている！」

「ヤバ、万丈目さんガードマンです！」

「早く逃げましょう！」

「嫌だ！俺はアイツと闘うまで絶対ここを離れない！」

「仕方ない、取り巻き、一緒に万丈目さんを安全な所まで運ぶんだ
！！」

「わ、わかった！」

「コラ、君達待ちなさい！！！」

第29話 「さり気無く十代もキャラが変わっています」「b yなすび（後書き）

この前この小説と同じ名前の主人公を見つけてしまった……………や
べえ、かぶった……………。

ユーザー登録してから二次小説を読む時間が長くなりました、
いろんな小説がありますね〜
熱血系に外道系に恋愛系など、どれも楽しみに読んでいます。

大抵の小説には主人公は精霊を持っていますね、
優は何か精霊付きますかね、精霊の場合『憑く』の方かもしてま
せんね。

第30話 「今日で僕の物語は終わる（前半）」「by優（前書き）」

最近時間が取れて執筆が続きます！いやー、よかったよかった、ま内容は期待しないで欲しいです。

なすび
作者の小説のネタ書きやすい場所らんきんぐ〜

正直誰も期待していない謎コーナーもコレで最後、では第1位の発表〜

1位、学校の授業中
考えた内容が1番実際に採用されるのは授業中ですね、
授業聞いていると思いきや頭の中は小説のネタを考えるのにフル活動
しています。

これで僕が授業をほとんど聞いていないことが証明されました。

いや〜、今思うと僕結構プライベートのことかなり話してますね、
このままだと僕の正体がバレそうですね、別にばれても構わないの
ですが少し抵抗が……学校でからかわれる可能性もあるので……

じゃあ早速本編開始いい！！

第30話 「今日で僕の物語は終わる(前半)」 b y 優

うっん、いい朝だ！今日から早速授業が始まる、早く学校に行こ。

「いやー、太陽の光が眩しい、これが生きてると言う事なのか、お、こんな所に綺麗な花が、今日はいいことがありそうだ」

..... はい、現実逃避です。

万丈目君..... 怒ってるかな、だって僕あのまま朝まで寝ちやうとは

思わなかったんだよ！少し仮眠とろうと思って気づくともう朝！

「何か鬱だ..... 学校行きたくない.....」

学校行きたくないな、万丈目君怒ってるかな？

「そんな所に何突っ立てんだ、優？」

「ああ..... はあ」

「何かあったのか？」

「人生つて..... なんだんだらうね」

「ゆ、優が急に重い話し始めた!!」

「いや、何でも無い！こうならヤケだ！万丈目なんて知ったことか

!!」

「お、お何か知らんが解決したならいいや、じゃあ早速学校へ行こうか」

「あれ？いたの三沢君？」

「いたよ最初から！！」

そんな感じで僕の高校生活始めての朝始まった。

学校に着くと万丈目君は授業中ずっとこっちを見て

呪いの言葉をずっと吐いてたときは転生前の妹との思い出が蘇ってきたよ……………

さて、次の授業は体育か、10分後体育館に学校指定のジャージで集合か。

三沢君はもう行っちゃったか……………他にまだ友達いないし、1人で行くか。

「体育か…昔は得意だったけど、今はどうかな？」

昔の体を思い出す……………昔は部活と遊戯王一直線の人生送ってたからな……………

この体じゃ前みたいなきは多分出来ないと思う、

これから鍛えるか？でももう15だし、

今からじゃもう遅いかな？基礎体力は小学校のときに培って置いた方がいいって

部活のコーチも言ってたし……………

そんなことを考えながらポーッと廊下を歩いていると

『ドンッ』

いって！何かに当たったぞ。

「い、痛いノーネ」

目を開けると廊下に転がっているクロノス先生、
どうやら僕はこの人にぶつかって転んだらしい。

「あ、えーと、すみません、大丈夫ですか？クロノス先生？」

「いたたたた、ん！！！！」

だ、だだだ大丈夫なノーネ！心配御無用なノーネ！
じゃあワターシはコレーデ、セニヨールも早く行かないと遅れて
しまっデスーヨー！」

クロノス先生はものすごい勢いで走って行ってしまった。

何でそんなに急いでるんだろう？

しかもかなり慌ててたし……………

「ま、いつか、僕も早く体育館行かないとってあれ？
なんだこれ？」

廊下に白い封筒が落ちていた。

「誰のだろう？」

中、開けて良いかな？駄目だよね……………
どうしよう？

光に当てたら透けて見えるかと思って蛍光灯に近づけてみると
少しだけ中の内容が読めた。

『天上院明日香より』

僕が読めたのはそれだけ……………でもこれでこの封筒は天上院さん
の物だと分かった、むー。
体育が終わったら届けようかな？

いや…もしこれがとても大事な物で他の人には見られてはいけな
い物だったら……………

僕の7つのスキルその3心配性が発動した。

うん、天上院さんが1人のときに渡そう、
しかも1人ならその後一緒に会話できそうだし。
高校1年生の男子が女子と話したいがための精一杯の作戦。

「あれ？君も1年生？」

急に誰かに声をかけられた。

「え、そうだけど」

声をかけてきた方を向くと一人のレッド生徒（多分1年生）が体
操着袋を持っていた。

背は僕とあまり変わらない……………

少し盛った、本当は僕より少し背が高い少年（少しだからね！髪の毛のポリリウムを取ったら同じくらいだからね！！）でメガネを掛けている、

髪はかなりモツサリしている、どっかで見たことあると思ったら
コイツ

丸藤翔だ……………亮の弟、理奈さんの話によると昔亮の親が離婚して数年間会ってないらしいけど、髪の色が青だ。

きつと大好きだった亮と分かれ離れになったセイでグレ、髪の色を染めたんだろう、じゃ無きゃ髪の色が青の人間がこの世にいる訳がない。

「じゃあ一緒に体育館に行こうよ、僕いまいち何処に何があるか覚えてなくて……………」

「うん、いいよ！行こう！僕は雷堂優」

「雷堂君か、僕は丸藤翔これからよろしくね」

ウヤツホー何か知らんが原作キャラとフラグたっただぜ！

『キーンコーンカーンコーン』

「ヤバ、授業始まっちゃった！！」

「本当だ！急ごう！！」

「くく、あのイエローの生徒さえいなかったら、ワターシの作戦が成功してたノーニ、

仕方ない………休み時間にあのドロップアウトの机にこの偽ラブレターを

！な、無いノーネ！ワターシが書いた最高の出来の偽ラブレターが無いノーネ！

一体何処で？コレではワターシのサクセナーが！！」

夜

イエロー寮

「うう、結局渡せなかった……………」

今日1日天上院さんの様子を覗って、1人になるチャンスを探してたけど

天上院さん友達いすぎ……………いつも誰かというし、毎回違う女子と話してるし、

1人なるときなんてこれっぽっちもなかったよ……………

僕の手には1つの白い封筒、

分かるのはこれは天上院さんの物……………

どうしよう、もしコレがとっても大切な物で今日必要だったら？

もしかするとラブレターだったりして。

「ん、ラブレター？」

頭の隅で何か引っかかっている、何だろう、
とても大切なことだったような……

何か思い出さないとヤバイ記憶……お、思い出せない……

(優は夜になり眠くなったので思考回路がかなり弱まっています、
どれくらい弱まってるかというと有名な原作第3話のあのイベントを
忘れてしまっぐらいです) byなすび

ああ！心配になってきた！もしコレが今日中に必要なもので
明日僕が持っていることがばれたらかなりヤバイ！
フラグが折れる、そうポツキリと折れる！

僕の7つのスキルその3心配性が発動した(本日2度目)

「こうなら最終手段！今から女子ブルー寮に乗り込むぜ！」

そう、このとき僕は、一番やってはいけない選択肢を選んでしま
ったことに気づけなかった、

それは何故か？真相は神(と言っても田中ではない)のみぞ知る？

『キーコ、キーコ、キーコ、キーコ』

寮の近くの湖においてあったボートを勝手に使って
現在女子寮に向かっています。

夜遅くの外出。

学校の公共物（と言ってもボート）を勝手に使っている。

男子禁制のはずの女子寮に入り込もうとしている。

以上3つもの校則を一度で破ってしまった、

やばいよー、まだ入学2日目だよー、もし学校にばれたらレッド
に落とされるか

最悪の場合退学だろう……

くそ、僕の昔から患ってる病気、チキン症候群の発作が！！

今はこんなネガティブに考えるな！もっとポジティブに行こう！
前向きに！！

校則が何ぼのもんじゃない！校則は破ってこそ校則なんじゃない！！

数分後
女子寮

「ふー、やっと着いた」

何とか女子寮に着いた。

ボートを適当な場所に止めて女子寮の中に無事潜入できた僕。

それにしても女子寮の庭に入る鍵が何故か開いていた、

ちゃんと閉めない駄目だよー、怪しい人が入ってきちゃうよ、
全く。

と言っても今回は僕が怪しい人で、鍵が開いていたせいで中に入れたんだけど。

『ガサゴソ』

「!」

今後ろで音が、誰かいるの？

「（な、何故昼間のイエロー生徒がこんなトコロニ!?
しかも手に持っているのはウォーターシが書いた偽ラブレター!?
一体何がどうなってるノーネ!?）」

や、やっぱり誰がいる、だ、誰？

「……………」

！もう1人！草むらの中とは別にもう1人背後に誰がいる……………

「ヤバイ、ここはいったん逃　　」

「がさないわよ！」

女の人の声が聞こえたと思ったならもの凄い力で腕を掴まれ引きずりこまれた！！

「うわー！助けてー！」

「誰が助けてよこの痴漢！」

え、痴漢？

「こ、こら暴れるな！く、ももえ！コイツ1人じゃ押さえつけられないから手伝って！」

「分かりましたわジュンコさん」

今度は別の人に足を抑えられた。

「グググ……………な、なぜこうなった!？」

「(ナ、ナンカ、メンドクサーイことになってルーノ！

ワターシはななな何もシラナイーノミテナイーノペペロンチーノ)

「
『バコッ』

い、今頭から鈍い音が、ヤバイ……………苦しい、意識……………が…バタン。

目を覚ますと目の前には知らない天上が。
そして僕をものごく睨んでるパジャマ姿の女子が3人。

「ア、アロハ……………なんちって」

「何がアロハを痴漢が」

「覗きをするなんて最悪の人間がすることですわよ！」

「もう言い逃れはできませんわよ」

「ま、まっってください、僕はただ天上院さんのだと思われる物を届

けにきただけです」

「わ、私に？」

女子3人の中に偶然いた天上院さんがいた、ラッキー。

「うん、これ！」

女子の1人が封筒を僕から取り上げ天上院さんに見せる。

「な、何これラブレター？」

「明日香様誰かに渡す予定だったんですか？」

「私、こんな汚い字書かないわ」

「ええ〜」

最初で最後の切り札、あっさり沈没……

「これで今度こそ言い逃れは出来ませんわよ覗き魔が！」

痴漢？覗き魔？待てよ

さっきの衝撃で忘れかけていた記憶が戻り始め

『痴漢』『覗き』『ラブレター』『女子寮』『知らない天上（院）』

あ、あ
……丸藤翔の覗き事件……

ま、まさか……

僕の背中にはこれ以上に無い冷や汗が流れ始める。

ま、まさか丸藤翔の覗き事件に僕がひっかるなんてー!!
やばいよ！かなりやばいよ！どのくらいやばいかと言つと

僕の中学にいた先輩3人に囲まれてカツアゲされたときぐらいや
ばい

実際その時は偶然先生が通りかかって助けてくれたけど今回は

「皆さんお揃いで何の騒ぎ？」

先生キタ !!!

ここで現れた救世主、女神、今日体育の担当をしていた鮎川先生、
いやー奇跡つてあるもんだね〜

「何かあったの？」

つてごわっ！！天上院さんと女子2人に押し潰された！

「お、重い………」

「しつれいね」「静かにしなさい」

小声で女子2人に言われる、今思うとこの2人名前忘れたけど
天上院さんの取り巻き2人だ！！

「いえ、何でもありませんわ、お騒がせしてスイマセン」

「そう、じゃあ皆さん早くお部屋に戻ってお休みなさい」

先生はそのまま去って行ってしまった。

き、奇跡が！最後の希望がこつもあっさり砕けるとは……！！

「明日香さん、ここじゃまた邪魔が入るかもしれません」

「他の部屋に連れて行きましょう」

「そうねならアノ部屋に連れて行きましょう」

「アノ部屋ってな」

『バコッ』

あ、また変な音が頭から………い、意識が……落ちる。

知らない天井だ（本日2度目）

目を覚ますと今度は薄暗い部屋になっていた。
それと僕は一体1日何回気絶させられるんだ。

「ここなら邪魔は入りませんわ」

「白状してもらおうじゃない」

「雷堂君がそんな事するとは思わなかったわ」

「だから誤解だつて！」

「どうせこのラブレターも自分で書いて見つかった時の保険にでもしようと思ってたんでしょ！」

「違いますよ！」

「雷堂君、本当のことを言ってちょうだい」

なんで誰も信じてくれないんだ！理不尽だ！

「仕方ない、あくまで白を切るつもりなのね、
ならこっちにも考えがあるわ、ももえ！」

「分かりましたわジュンコさん」

ふむ、天上院さんの取り巻き2人は茶髪のほうがジュンコで黒髪がももえって言うのか。

ジュンコと言う人がももえと言う人に合図すると

薄暗かった部屋が明るくなった、

明るくなったので部屋の様子がよく分かる。

部屋の壁はコンクリートが剥き出しの暗い感じの部屋、ち…地下室？

更に壁には至る所に拷問用具と思われる物がぎっしと拷問用具！？

「ではまずこの蠟燭で」

「何に使う気ですか!?!」

「アンタが覗いたことを白状するまでこの拷問用具で……………」

こ、怖ええええええええええ!!!!

「いやいやいや!! 僕は無実です!!」

「そんなの信じられませんわ」

「いや信じてよ」

「案外可愛い顔してる奴ほどムツツリだったりするのよ」

いや、それは知らないけど。

「じゃあ早速服を脱がし蠟燭から垂れた蠟を」

「いやー！やめてー！これ以上言わないでー！
聞いているだけで怖いから！」

「待つよジュンコ」

天上院さんがジュンコと言う人を止める、
天上院さん……なんだかんだ言っ僕のことを

「私的にははずムチからだと思っわ！」

なんでやね　　ん！！！！

「あら、なら私は爪剥ぎをやりたいですわ」

「お前ら全員Sかー！！」

やばいよー！死ぬよー！僕の物語原作第3話で終わっちゃうよー！
流石にコレは無い、ここで終わるわけにはいかない！！！！

「なら一斉にやるといっことで」

「賛成ー！！」

やっぱり終わるー！！ここで終わるー！！
うう、助けて……亮。

「どう、白状する気になっただかしら？」

「だからさつきから違つて言ってるじゃん……………」

「やばい、もう泣きそう……………」

「まだ吐かないき、仕方ないわね、ももえ
雪乃を連れてきて」

「藤原様を連れてくるのですか？
いや、流石にそれは……………」

「誰雪乃つて！僕の味方！それとも敵！
いや敵だよね……………やっぱ。」

「流石に藤原様を連れてきたら……………
折れますわよ、この人」

「折れる！？」

「何折れるつて！死ぬよりある意味怖いんですけど！！
何処が折れるの！背骨！？それとも心！心なのか！？
精神崩壊！！」

「うう、勘弁してくださいよお」

「今覚えれば僕……………入学してろくな目に会ってない。
万丈目達に喧嘩売られて、呪い言葉吐かれて、
そして今女性3人に拷問されそうです……………
それに天上院さん、こんなキャラだっけ？」

「そう思うと何か……………やべ、涙出てきた。」

「ううっ、ううっ、だから違うって言ってるのに……
何で信じてくれなんですか……うう、ひっく」

「え、あ……もう、何泣いてるの！」

「そんな嘘泣きじゃ私は騙されないわよ！」

「ジュンコ、もう止めなさい、流石に私達も調子に乗りすぎたわ」

「そうですねよ、よく見るとこの方、

案外可愛いですわよ、素敵な殿方も良いですけど
この方みたいな可愛い子も良いかも知れませんわ」

「明日香さんはともかくももえは何言ってるの！……」

「ううう……もう、誰も信じられない……」

「ごめんなさい雷堂君、半分冗談だったのよ、

ついからかいやすかったから……面白くなっちゃって、
ね、許して……謝るから」

「うう、もう、いぢわるしゅない……？」

「（な、涙目で上目使い！）

しないわ、だから泣き止んで」

「……うん、わかった……」

「（やばい……超可愛い、亮はいつもこんな子と暮らしてたの！……？）

「

僕はいつの間にか出ていた涙を拭く。

「ジュンコ、ももえ、貴方達はもう帰りなさい」

「でも明日香さん(さま)」

「もう一度言っわ、もう帰りなさい」

「わ、わかりました」

「はい」

「素直でいいわ、おやすみなさい、2人とも」

「「おやすみなさい明日香さん(さま)」

「雷堂君？」

「な、なんですか？」

「さっきは本当にごめんなさいね、もう一度謝るわ、ごめんなさい。許してくれる？」

「うん、わかった、いいよ」

「(うん、わかった、いいよ。ですって！やばいわ超可愛いわ、

私の弟にしたい位どうせなら兄より弟が欲しかった、

もう帰ってこない兄さんのことより今はこの子をどっやって弟にするかが問題ね

……………誘拐……………いや、それは流石に……………ま、ゆっくり考えていくわ)

今日はもう遅いし私の部屋に泊まっていくと良いわ、付いて来て、案内するから」

「……………わかった」

僕は天上院さんに付いて行く。

第30話 「今日で僕の物語は終わる（前半）」 b y 優（後書き）

予約掲載、予約掲載、予約掲載する意味は特に無いですがなんとなく投稿する時間は決まっているほうが思っているので予約掲載機能をつかいいつも投稿するときは午前1時にします。

原作に入ると執筆が進む、やっぱりある程度台本のようなものがあったほうが書きやすいですし読者の方々も想像しやすいでしょうね、ではさようなら、おやすみなさい、次の投稿は………10月にならないと無理かな？出来れば9月中に出します。

第31話 「今日で僕の物語は終わる（後半）」 b y 優（前書き）

こ……………こんばんわ…なすびです。

凄くやつれていきます……………先週と先々週は部活の大会、

そして秋分の日は学園祭、か……………過労死する……………遊星のスピード・

ウォーリアーになるそして今日学園祭の振り替え休日、頑張って3
1話を書き上げたわけです。

そして、今回の話はかなりやばいです、もしかすると苦情が来る
かもしれません、理由は……………年齢制限しなかったことかな？

すこしネタバレすると天上院明日香、DSです、雷堂優、社会的
に死にます。

これでも読んでくれる人なら先に進んでください。

では、はじまり、はじまり〜

第31話 「今日で僕の物語は終わる（後半）」 b y 優

「ま、何も無いけど上がって」

「……はい……」

あの軽く拷問だった時間から開放され今は天上院さんの部屋にいる。

部屋の中は……天上院さんが言ったとおり何も無い、妹以外に女性の部屋に入るのはこれが初めてだがあんまり違和感が無いな……まだ入学2日目だし、部屋に何も無いのは当たり前なのかな？

「あ、これお茶、飲み物コレ位しかないけど……」

「大丈夫です」

天上院さんからお茶をもらい一様女の子っぽい座布団を出してくれたので

それに座らせてもらう。

「……おいしかった」

天上院さんからもらったお茶を全部飲み、コップを床に置く。

「そう、それは良かった、

ん、雷堂君、こっち向いて」

「え、何で？」

天上院さんのほうに顔を向けると顔。特に目の辺りに何か……あ、タオルか。

僕の顔にタオルが当てられた。

「涙、まだ少し残ってるわ、拭いてあげる」

「あ、ど、どうも………あっ」

何か、少し恥ずかしい、お、お姉さんが出来た気分、まあ、実際同じ年だけど。

「これでよし」

「あ、ありがとうございます……ごさいます、天上院さん」

「いいのよ、元々私達が悪かったんだですから。

それと私のことは明日香でいいわ、なんか苗字で呼ばれるの慣れてなくて、ムズムズするのよね」

「わ、分かりました、じゃあ明日香……さん」

「……ま、いいわ、じゃあ私も優君って呼ぶわね、優君」

「はい…！」

「じゃ、もう遅いし寝ましようか、明日も学校だし」

「あー………はい、それで、僕は何処で寝ればいい？」

「何処つて、ベッドで寝ればいいでしょ」

「じゃあ、明日香さんは？」

「私もベッドで寝るわよ」

「ええ！一緒に寝るんですか！？」

「嫌？」

「嫌とかじゃなくて、明日香さん女だし、僕男だし、しかもベッド狭くなっちゃうし」

「良いじゃないそれくらい、それとも優君……チキン……」

目を細めニヤリと笑う明日香さん。

「ぐっ……」

「凶星ね」

そうですよ！僕はこれ以上に無いくらいチキン野郎ですよ！
中学の時も勇気がなくて女子に話しかけられなかったよ！
彼女いない暦〓年齢だよ！

「じゃ、早速寝ましょ」

明日香さんがニヤニヤ笑いながら近づいてくる、

やばい、あの目はさっきの目だ！Sモードに入った明日香さんの
目だ！

「あ、え…その……」

「優君」

近づいてくる明日香さんを前に僕は少しずつ後ろに後ずさっていき……

『ガタッ』

ヤバ、気づくと後ろはもうベッドだ……

僕はバランスを崩し背中からベッドに落ちる。

「優君」

「え……その……」

明日香さんが手をベッドに付け顔を僕の顔に近づける。

心臓がドキドキする、顔が赤くなるのが分かる、

明日香さんというと凄い楽しそうな顔でニヤニヤしてる。

「どう、楽しい?」

僕の顔と明日香さんの顔との距離は50cmない……

「ああ……えっと…そ、その」

だ、駄目だ、心臓がバクバクになって気分が……クラクラする……

しかし明日香さんは満足すると顔を僕から遠ざけた。

「あー、楽しかった！」

満面の笑みで言う明日香さん。

「な、何がですか？」

駄目だ、まだ顔が熱い……体に力が入らない。

「優君ってすっごくからかいやすいわ〜」

「うう、酷いですよ……もうしないって約束したじゃん」

「それはそれ、コレはコレ、あれはあれ」

「意味が分からないですよ！楽しいんですかそんなことして！」

「たのしいわあ〜」

凄く嬉しそうな顔で言う明日香さん。

「なんかねえ、優君をからかうと、

心のもやもやと言うかストレスみたいなのが取れて気分爽快！みたいなの？」

「人をストレス発散に使わないでくださいよあ〜」

「良いじゃない、優君も楽しかったでしょさっきの拷問と違って」

「大して変わらないです！死ぬかと思いました」

「……これだからチキンは」

あ！今この人チキン馬鹿にしたよ！

人間苦手なこと1つや2つぐらいあるじゃん！

なのに何この人！今これだからチキンはって言ったよ！

「まあまあそんなに怒らないで、

お詫びにお風呂貸してあげる、

優君まだお風呂ははいつてないでしょ」

「まあ、そうですが」

今日はボートで女子寮まで行ったから汗結構掻いたな。

「お風呂、さっき沸かしたのよね

丁度いま出来たと思うわ、入ってらっしゃい」

「はい」

く、ここは一旦風呂に入り作戦を考えよう。

僕はお風呂場で服を脱いで湯船に浸かる、

ブルーは浴場とは別に部屋1つ1つに風呂場が付いているのか、
便利だな。

「それにしてもどうしようかな？」

このままだと僕の体が持たない、

まあ、普通に考えればこういう状況はラッキーと普通は思う、僕も昔はそんなこと思ってたけど、実際体験してみるとこれ以上になく心臓がドキドキして口から心臓が出てきそうだと、寿命が縮む。

「優君、着替え、ここに置いてくから」

風呂場の外から明日香さんの声が聞こえる。

「あ、わかりました」

とり合図返事しておく。

さあ、どうするか……………

逃げる…か。窓から逃走を図るか……………

「あ、優君、言っとくけどここ3階だから、馬鹿なこと考えてると死ぬわよ」

心が読まれてる!?!いやいやいやなんでわかったんだ! 怖いわあ、いやマジで。

結局何もしないまま頭、体を洗い風呂場を出た。

えっと、確か明日香さんが着替を置いてくれたはず……………

うん、床に置いてあるよ、でもこれ……………どっからどう見ても女物だよね……………

そりゃそつだよ！だって明日香さん女性だし、

そして僕にどうしろと、床においてあるのはどっからどう見ても女物の服、

黒くてフリフリがついてるドレスみたいな服……………ゴスロリって言うんだっけ？

更にもう一つ黒いウサギの被り物……………う、ウサミミ！？

5分後

「お風呂から来ました」

「キヤー！やっぱ似合うわ！クランコスで正解だったわ！」

はい、着ました……………ウサミミも着けました、だって他に着る服無かったし

学校の制服にしようとしたら、洗濯物カゴの中をあさってみたものの

見事に明日香さんに回収されていた、くそ、明日香さんの方が一枚上手だった……………

実際着てみた姿を鏡で見たところ不覚にも自分で似合うと思ってしまった、

く、は、恥ずかしい。

「すみません、1人テンション上がってるところすみませんが他の衣服は無いんでしょうか？」

「え！他のも着てくれるの！」

「いえ、そうゆつゝい意味じゃ

僕がそう言う前に明日香さんはクローゼットの中をあさり始め、白いコートのような物や、茶色いローブ、あ、あれは全身タイツ

……………

「どれから着てもらおうかしらあゝ」

「いえ、誰も着るとは言ってますが……………」

ズが
てか明日香さんにコスプレ趣味があったとは……………でも殆どサイ

明日香さんと合っていない物ばっか。

「じゃあコレから」

僕の発言は全無視ですか！

明日香さんの手には白いコートと羊の帽子……白魔導師ピケルのコスプレ？

あれ？じゃあ今僕が着てるのって……黒魔導師クラン！？

「いや着ませんよ、しかも何で全部女物！？」

「女物ばつかじゃないわよ。」

ほら、これは霊使いダルクのコス、男の娘用よ」

「そうゆう意味じゃな い！」

「まあまあ落ち着いて、冗談よ冗談」

「じゃあ、今僕が着てる服は」

「これは冗談じゃない」

「ないんか い！」

はあ、はあ、つ、疲れた無意味にツツコミすぎた。

「まあまあ、似合うわよ」 『パシャパシャ』

「PDAで写真撮らないでくださいよ！」

「大丈夫、これはもしもの時のきょうは 自分だけで楽しむから安心して」

「いま、一瞬不吉な言葉が……いや、
後の台詞も十分危ないよ！今すぐ削除してよ！」

「ざんねーん、もう保存してロックしちゃったからもう消せないわ」

「鬼　　！」

「仕方ないわね、じゃあクランのコスプレをギリギリまで着崩して
『おねがい』って可愛らしい声で言ってくれたら考えるわ」

「出来るわけ無いでしょそんなこと！」

「じゃあこのさっき撮った写真をデュエルアカデミア中の生徒に一
斉送信し　　」

「お願いします、やりますからそれだけは勘弁してください」

「やっぱり脅迫用だった……！」

「はあ、はあ、お、お願いします」

「うーん、もうちょっとヒロイ声で、
後『願います』じゃなくて『お願い』ね」

現在、明日香さんに脅迫され物凄い羞恥プレイさせられています、
うう、もうお嫁に行けない……………じゃなかった、お嫁に行けない

……………

「テイク6、始め！」

「あつ、あつ、あん、お、お願い」

「うーん出来ればもう少しあえぎ声で『もっと！』とか『いやん！』
とか言っただけいいわあ！」

鬼 ……！！！！

「じゃ、テイク7、始め！！！」

「あつ、うん、いやっ、も、も、もっと！お、おねが、いやっ！」

「キヤ ……キタコレ！！マジキタ！！！！はいOKです、
動画でばっちり撮らせてもらったわ！」

「妹よ、兄は、兄はこんなにも汚れてしまった……………許してくれ」

俺は四つん這い状態になり『ポトツ』と頭のウサギの被り物が落ちる。

「もう満足よ！！これでうちは後10年闘える！」

何と!?

「見る? 優君の恥ずかしい写真と、
とてつもなくエロイ動画」

「いえ、自我を保つため止めて置きます、
てかその動画消してください、お願いします」

「え、じゃあ優君がアイスクャンディをあんあんとかえぎ声でペ
ロペロ舐めて
くれたら考えるわ」

「それ無限ループ、しかもどんどんハードルが上がってく!」

しかも写真削除してくれなかった
明日香さん……もうキャラ崩壊って言うレベルじゃない……あ
れはもう天上院明日香ではない。

「よかったじゃん、優君の青春の1ページに印象が残る物語が刻ま
れて」

「いや、僕の青春の1ページが物凄く汚された気しないんです
が……」

「あ、優君もし私にそんな趣味があると学校に言いふらしたら
この写真を学校の生徒に一斉送信するから」

「きよ、脅迫だ!……!」

「学校を去るときは一緒よ」

「く、同じ条件のはずなのに僕が物凄く損してる気がする……………」

「さて、満足満足、ふわああ。

もう寝ましょ優君」

「……………」

「どうしたの？優君」

このままでは……………終わる！
ならもう僕に残された手は

『ダッ』

逃走。

僕はドアに向かって走る、そして玄関の扉の鍵を開けると、
僕は外に向かってダッシュ

「逃げたら写真、動画」

出来なかった。

僕はとぼとぼ歩きながら部屋に戻る。

「もうお前は逃げられない、みたいな」

や、ヤバイ、これはもう僕の学園生活が終わったといっても過言
ではない！

「さあ、寝ましよう、優君」

ニヤリと微笑む明日香さん。

「あ、悪魔だ」

「あれ、鬼からバージョンアップしたわね、次は魔王かしら？」

あれはもう僕にとって魔王を超えた存在に見える。

ここはベッドの中、僕はさっきと同じで黒魔導師クランのコスプレ。

もしも、もしも今日僕が女子寮に行かなかったら、あの手紙を拾わなかったら、

僕の運命も少し、いや、かなり変わっていたかもしれない。

「優君」

ベットの中後ろから明日香さんの声が聞こえてくる。

「なんですか」

この声はさっきと違って真剣な……ふざけていない声だ。

「私、今日1日楽しかったわ、

でも優君はそんなに、いや、全然楽しくなかったでしょうね」

「……………」

僕は目を閉じて、眠ろうとする、

別に明日香さんの言葉を聞こうとしないわけじゃない、
ただ少し気持ちを落ち着けたくて……………」

「でも1つ言いたいことがあるの……聞いてくれる」

「……………」

僕は何も言わない……………でもちゃんと聞いている。

「私ね、昔から少しかわっててね、

どんな風が変わってるかって言うと

それは優君が知ってるの通りね、

そう、あれが私の本性、表には見せない天上院明日香。

いままで隠してたんだけどね、ちよつと優君にあつて

いままで抑えてたりミッターの様な物が落ちちゃつて。

だから今日は楽しかった、いままで抑えていて溜っていたモヤモ

ヤが

一気に吹き飛んで凄くいい気分」

「……………」

うん、僕なんて言えば良いんだろう……………」

畜生……………悔しいけど僕も少し楽しかったよ……………明日香さんとのじゃれあい。

「だけど優君が凄く嫌な気持ちになったのは分かってる

ごめんなさい……………私って都合のいい女ね、

人で散々遊んどいて、最後は謝って許してもらおうとする。

本当、ごめんなさい、私のこと幻滅しちゃった？」

「そんなこと……………いい」

「え？」

「そんなこと、ない。

明日香さんのことは幻滅しない、

だってコレが本当の明日香さんの姿でしょ、

だったら僕は明日香さんのこと、幻滅したりしない……………」

今日、色々あったけど、総合的に見ると凄く散々な目に会った。

でも、今日明日香さんに会えて良かったと、思う所もいくつかある、

だから……………謝らなくて、いい」

「優……………君」

あ、あれ？何でだろう、目から……………涙が……………」

どうしてだろう？でもこれは明日香さんにかかわれたからとか
じゃない。

理由は分からない、でも目から溢れる涙が止まらない、
泣き止まないと、また明日香さんに変な気を使わせてしまう……

『ギョ』

「えっ!？」

後ろから……急に明日香さんに抱きつかれた。

「優君……」

「え？な、なな何ですか？」

「あ、ありがとう、ありがとう、優君」

「な、何がですか？」

僕は明日香さんの顔が見れないから、今のままの状態で返事をす
る。

「ありがとう、私、今日はじめて人に本当の私が出せた、
始めは勢いで行っちゃったけど、気づいたときには止まらなかつ
た、止められなかった、

だから、脅迫みたいなことしちゃったり、でも優君はこんな私で
も……

幻滅しないで、いままで通りに接してくれて……だからあり
がとう」

「いえ、その程度のこと……わざわざ言わなくても」

あれ？いつの間にか泣き止んでる。

「そう……ありがとう……」

それと……私のことは、これから明日香って、呼び捨てで呼んで

「え!？」

「お願い」

明日香さんの手の力が強くなる。

「わかった……あ、明日香」

「な、何、優？」

明日香さん、じゃ無く明日香も僕のことを呼び捨てで呼ぶ、なんかお互い意識して呼ぶと恥ずかしい。

「おやすみ」

「ええ、おやすみ」

「これからも……よろしくね」

「当たり前じゃないですか……」
「だって僕達はもう……友達じゃないですか」

「友達……………」

そして僕の意識は落ちていく。

「本当の自分を知っている、それでも友達でいてくれる人がいる……………もう、あの時とは違う……………」

明日香が最後に何か言った気がするけど、眠くて……………よく…聞こえなかった。

第31話 「今日で僕の物語は終わる（後半）」 b y 優（後書き）

ふう、やっちまったぜ！反省はしている、が！後悔はしていない！次回は月1テストと見せかけて違います、この小説のオリジナルストーリーです。

ではあまり苦情が来ませんように。くわばらくわばら。

第32話 「誰にも言えないひと夏の甘酸っぱい思い出?」 b y 優 (前書き)

最近 (r y とノシの使い方を変えたなすびです。

最近スクラップデッキにはまっています。

今回亮が変態です (いつものことだろ)

今回明日香がDSです (前回と同じじゃん)

と言うマANNER気味な物語ですが最後まで読んでください。

第32話 「誰にも言えないひと夏の甘酸っぱい思い出?」 b y 優

朝。

目を覚ますと。

目の前に。

金髪美人のお姉さんが
いた。

「ふう〜、落ち着け、落ち着くんだ、落ち着いて状況を理解するんだ」

そう僕は昨日女子寮に忍び込み、明日香さん…じゃなくて明日香にラチられ恥ずかしい格好(と言ってもただのコスプレだが)をさせられ

一緒に寝た(変な意味じゃないよ、そのまんまの意味だよ)

「よし、ここまで覚えてる、そして今」

なんだ、簡単じゃん、そういや僕明日香と寝たんだった……

あれ?一緒に寝た!そうだっけ!!いやいや寝たよ、無理やりベッドに押し込まれたんだっけ?まあいい。

そして今、大丈夫、僕は何もしていない、まあ逆パターンはいくつもあつたが……

しかし!しかし!!!目の前に何故明日香が!!

確か昨日はお互い別の方を向いて距離を取っていたような？
しかしその後明日香に抱きつかれ……抱きつく……いやいちいち
反応してたら

きりが無い、止めよう、つまり昨日は明日香と一緒に眠った、そ
れで良いじゃないか。

でも目の前には明日香が………何か……分かりきったことだけど

………綺麗な人だな………髪は金髪だし（ハーフかな？）

白くキメが細かい肌、鼻も高いし、まつ毛も長いな………これで
ノーメイクとは。

「人の顔ジロジロ見てそんなに楽しいのかしら？」

明日香が急に目を開けた。

「おわぁー！ー！」

ドンツ！ガタツ！

いった！ー！く〜ベットから落ちて頭打った………

「ふふふ、どう？ビックリした？」

ベッドの下からニヤリと微笑む明日香。

「しましたよ！ー！ビックリして心の臓が停止する所でした！」

「私もゾクゾク　　ドキドキしたわ、同年代の異性に真近で顔を見
つめられて」

「今ゾクゾクって言おうとしましたよね！明日香さん！」

「……優、私のことは呼び捨てで呼んでって言ったでしょ」

「あ、そうだった！明日香」

「よし、じゃ、早速学校に行きましょう！」

「あれ？今なんか話がそれたような……」

「気のせいよ、早く行かないと遅刻よ！」

「マジッスカ！」

結局、遅刻でも何でもない、と言っか逆に早く来過ぎたぐらいだ。

「明日香、全然遅刻じゃないじゃん」

「あら、本当だわ、びっくり」

「全然ビックリしてないでしょあなた」

「ばれた？」

「はい」

そんやかんやで数十分後、HRもなしにいきなり始まる1時限目の授業。

「それデ〜は、皆さん、席についてクダサ〜イ、楽しい楽しい授業が始まるノ〜ネ」

扉からクロノス先生が入ってきて、教卓に教科書や名簿などを置く。

「じゃあ早速授業を始める〜ノ」

そうやっていきなり授業を始めるクロノス先生、
せめて授業の始めに号令ぐらいしたらどうだろうか？

「それではまず、昨日の復習から。

フィールド魔法マジックと〜ハ、お互いの場に1枚だけ存在することができ

フィールド魔法マジックゾーンと言う特別な場所におきます〜ノ、

フィールド魔法マジックの効果はお互いのプレイヤーに効果がありま〜ス、
例を言うと『ダークゾーン』このカードは場の全ての閻属性モン

スター

の攻撃力を500上げて守備力を400下げる効果〜デ

クロノス先生は昨日習ったフィールド魔法マジックについて説明していく、
でもなんか……………話し方がウザイ……………。

あふたゝすくーる（放課後）

放課後、授業が全て終わりもう自分の寮に帰っていい時間、

教室を見渡すとすぐに帰ってしまう生徒や

友達と楽しそうに話している生徒、1人で読書している生徒、

色々いるな。

さて僕はもう帰るか、別にもう用は無いし。

寮に戻ってる途中入学したとき入学生全員に配られた生徒手帳、
もといPDAと呼ばれる携帯端末を使う。

これにはメールや学校の地図、デュエルアカデミアの校則や校歌
が書かれている、

ん？校歌、あるんだデュエルアカデミアにも。

「あれ？メールがきてる」

受信BOXにメールが10件も入っていることに気づく、
10件！何でこんなにきてんの！気づかなかった……

「何々……うわ……全部亮からだ」

内容は『新学期になってから1度も優の顔を見ていなんだが……
忙しかったらいいんだが、もしヒマでやる事が無かったら
俺の部屋まで来てくれるか？いや、嫌ならいいんだ、でも
もし暇なら、今日じゃなくてもいいから来てくれると嬉しい、
別に忙しかったり行きたくないんなら

「長っ！！そしてまわりくどっ！！」

まだ続きが半分以上あるがこれ以上読むのは面倒くさいので
PDAを制服のポケットに戻す、残りのメールも同じような内容
だろう、

つまり

「ブルー寮に行きゃいいんでしょ行けば」

僕はイエロー寮からブルー寮に方向を変え、再び歩き出した。

10分後

「ここがブルー寮、うん、感想を一言で言つと………」

この寮の第一印象。そりゃもう。

「城や!!!!!!」

城がある、太平洋のど真ん中、島の中に城があるでえ〜

口調が関西弁だがこんなことは関係ない、

デュエルアカデミア……金の配分間違ってるよ、

なぜブルーに城があるのにレッドはおんぼろアパートなんだよ…

……

「はあ、よく分かんないなこの学校のお金の使い方」

それは置いてまず亮の部屋に行こう。

「おい！イエローがここに何のようだ！」

寮の門をくぐるうとしたら1人のブルー生徒に呼び止められた。

「ん？なに？」

「何じゃない！イエローの分際でブルーの寮に入ろうとするとは、貴様……どうなるか分かってるのか？」

はあくう、うぜええええ！！！！！

は、何コイツ、イエローはブルー寮に入っちゃいけないの？
そんなの生徒手帳に書いてあったか？

これだからエリート風情が………
ブルー生徒がみたいにいい人ばつかならいいんだけど。

「……じゃあ、どうすれば通っていいんですか？」

「それはもちろん決　　」「ちよつと待ちなさい！」「こ、この声は！」

急に僕達の会話に誰か……一人の女性が割り込んできた。

「イエローの生徒がブルー寮に入ってはいけない校則なんて無いはずよ」

「あ、明日香」「明日香たん！」

その声の正体は明日香だった。

ん、でもなんか今隣のブルー生徒も明日香の名前も呼んでいたよ
うな？

しかも…明日香たんって…たんってなんだよ。

「優君久しぶり、いや、さっきぶりね」

「そうだね、それで明日香もブルー寮に何か用事があるの？」

「ちがうわね、どちらかと言つと優、
貴方に用があるわね」

「え、僕？」

僕は首を傾げる。

「授業が終わつた瞬間すぐに帰つちやうんだもん、
一緒に帰りたかつたのにい」

「ああ、ごめん、明日香」

「いいわよ別に、その代わり今度一緒に帰りましょ」

「うん」

「ああ、かわいいわあ」

「明日香……なんで頭なでるの？」

「いいじゃない別に」

「あ、あう」

「（ああ～いやされるわ～）」

「うっ……」

「さっきから黙ってたら何なんだ、君たちは！」

イチャイチャして！てかさつきから僕が話してただけど！

と言うより何なんだ、そこのイエロー！

僕の明日香たんよといちゃいちゃして！！」

「うるせえ〜。

明日香、この人と知り合いなの？

さつきから『僕の明日香たん』って言ってるけど」

「知らないわ、こんな人」

「明日香さんは僕のこと知らないかもしれないが僕はキミのことを知っている！

突然で悪いが僕と付き合ってく」

「嫌だわ」

あっさあり！&即答！！

「ぐばああ！」

ブルー生徒 LP4000 LP0

ああ、あの人の心がワンターンキルされた。

「さ、行きましょ」

「あ、うん」

そして僕と明日香はブルー寮の中に入っていった。

「明日香も亮に何か用があるの？」

「いや、無いわね」

「ないんだ……じゃあなぜここに？」

「優が行く所に私も付いていくわ」

「す、ストーカー……」

「保護者としてよ」

「さいですか……」

明日香と歩いて約2分

「ここよ、亮の部屋は」

目の前の扉には『Ryou Maruhuzi』と書いたプレートが吊るされていた。

ここが亮の部屋であることは間違いないことは分かった。

『コンコン』

僕は扉を軽く2回ノックする。

何故か明日香は僕の後ろで黙って立っている。

暫くし、扉が開き、中から亮が出てきた。

「優！よく来たな！！」

何か凄く嬉しそうな顔をする亮

「……………何故明日香がいる……………」

しかし2秒で不機嫌顔になった。

「あら亮、私がいたらいけないのかしら」

「ぐぐぐ……………」

「と、言うわけでおじゃまします」

亮の部屋に入っていく明日香。

「え、じゃあ、お邪魔します」

亮の部屋の中は基本的あまり物が無い&広い、
これを1人で使ってるのか………いいな。

「それで、何か用事があって僕を呼んだの？亮」

「……………」

あ、あれ？無視なの亮！

「りよ、亮？」

「……………」

やっぱり無視された………亮の顔を見ると亮は何故かずっと
明日香の方を見ている。

また明日香も亮の方を見ている………

つまり見つめあっているのかな？でも何か

『見つめあう』より『睨みあう』の方が合っているかもしれない

……………

「（明日香、何故お前まで来た………俺は優を呼んだがお前は呼んで
ないぞ）」

「あら、別にいいじゃない、私は優の保護者として来たのよ」

「（保護者だと、優の保護者は俺だぞ、優は俺の家に住んでいるし入学の手続きも全部俺が済ませた、つまり俺の方が優の保護者に相応しいと言える）」

「（そうとは限らないわよ、決闘オタクの亮デュエルといると優まで決闘オタクになってしまっわ）」

「（いいだろ別に！優は俺が立派な決闘者デュエリストにすると決めただん！）」

「（優の将来を勝手に決めるのはたとえ亮でも許されないわよ）」

「（なんだと、デュエルアカデミアはプロ決闘者デュエリストを育成する学校、つまりこの学校の生徒は全員プロ決闘者を目指していると言っても過言ではない！だから優をプロにして何が悪い）」

「（そうかしら、私がデュエルアカデミアの中等部に入ったのは兄さんと同じ学校に入りたかったからだし高等部に入ったのは行方不明の兄さんの手がかりを少しでも欲しかったから入ったのよ、つまりこの生徒全員がプロ決闘者デュエリストになりたくて入っているわけじゃないわ）」

「（……………このブラコンめ）」

「（ぐ……………そうね確かに私はブラコンだったかもしれないわ、でも今は違う、今は優と少しでも一緒にいたいがためにここにいるのよ、もう兄さんなんてどうでもいいわ）」

「（どうでもいいだと！？じゃあ俺がこの1年吹雪の情報を集めた

意味が無いじゃないか！俺がお前のためにどんなに頑張って吹雪の情報を集めたことか……………」

「（そのことは感謝しているわ…………でもね…………もういいのよ…………兄さんはきつともうこの世にはいない…………死んだ人のことをとやかく言うのはもうやめたの）」

「（なんだと！お前この前まだ死んだわけじゃないのに死んだって決め付けないでよ！って俺のことビンタしたこと覚えてるのか！！）」

「（覚えてないわ）」

「（本当都合のいい女だな！）」

「（待つよ亮、話がそれてるわ）」

「（明日香自分が不利になってきたからって話しを戻すきか）」

「（では私と亮が決闘^{デュエル}して勝ったほうが優の保護者になる権利を持つ、この条件で決闘^{デュエル}しようじゃない）」

「（おい！俺が今言ったこと聞いてたか！）」

「（聞いてないわ、そんなことより決闘^{デュエル}するの？しないの？）」

「（ぐ、まあいい、しかしデュエルアカデミアの帝王、カイザーの異名を持つ俺に賭決闘^{デュエル}を挑むとは…………いい度胸だ）」

「（私もだてにデュエルアカデミアの女王とは言われて無いわよ）」

「（いいだろう、その決闘^{デュエル}、受けてやる）」

「（ふ、その言葉、二言はないわね……貴方の機械サイバーと私のサイバーガール、サイバー同士の決闘^{デュエル}がいま始まるうとしているわ）」

「（俺のサイバー流デッキとお前の市販のパックで売ってるサイバーガールを一緒にするな！！）」

明日香と亮アイコンタクト会話、実質15秒。

「行くぞ明日香！」

「いいわよ亮」

「決闘^{デュエル}！！」

何故だろう？亮と明日香が数秒間見つめあってたら急に決闘^{デュエル}開始ためぞ。

「先行は貴方に譲るわ、亮」

「いや、明日香に譲ろう」

「いらないわ、先行どうぞ亮」

「遠慮するな明日香」

「遠慮するわ亮」

「いや遠慮しろ」

「遠慮しないわ」

「遠慮しろ」

「遠慮しないわ」

「遠慮し」

「待つよ亮、このままでは無限ループよ、
ここは普通にジャンケンで勝った方が先行を取ることになりましたよ
う」

「ふ、いいだろう」

「「最初は」

「グー」 亮 「チヨキ」 明日香

「私の負けよ、よって亮貴方の先行よ」

「っ！汚いぞ明日香！！」

「汚くないわ、これも作戦の内よ」

「ぐ、仕方ない、俺の先行ドロ―！」

亮と明日香の先行の譲り合いの末亮が先行になった。
いやー先行の取り合いはあるかもしれないけど、
後攻の取り合いは初めてみた。

亮の初期手札6枚

サイバー・ドラゴン

サイバー・ドラゴン

サイバー・バリア・ドラゴン

アタック・リフレクター・ユニット

死者蘇生

ボーン・フロム・ドラゴニス

「（なんだこれは！て、手札事故！俺が後攻ならよかったが……
しかもサイバー・バリア手札って……）」

亮は少し悩んだ顔をし、暫くして手を動かした。

「く、俺はカードを1枚セット、ターンエンド」

亮LP4000

手札5枚 伏せカード×1

「私のターン、ドロ―！」

エトワール・サイバー（ATK1200）を召喚！」

明日香の場に茶髪の髪の長い女性が現れる、
確か明日香のデッキは融合と儀式と一緒にしたよく分からないデ
ッキ使ってたような？

「そのままバトルフェイズに突入するわ！
エトワール・サイバーで亮にダイレクトアタック！
エトワール・サイバーは直接攻撃する場合攻撃力を600上げる
！」

エトワール・サイバー ATK1200 ATK1800

「く……………くそ！」

亮 LP4000 LP2200

「私はカードを1枚セット、ターン終了よ」

明日香 LP4000 エトワール・サイバー ATK1200
手札4枚 伏せカード×1

「俺のターンだ、ドロー」

この決闘^{デュエル}まずは明日香が先にダメージを与えた、
しかも亮の場にモンスターは0、でも亮は確実にこのターン
サイバー・ドラゴンを召喚するだろう。

「相手の場にのみモンスターがいる場合サイバー・ドラゴン(AT
K2100)は
特殊召喚可能！」

やっぱり出てきたサイバー・ドラゴン！たまに積み込んでんじやないかと疑いたくなるが

きつと亮のドローク力が強すぎるんだよきつと！！

「サイバー・ドラゴンでエトワールサイバーを攻撃！エヴォリユーションバースト！」

「そうはさせないわよ！^{「フラッシュ」}罠カード発動、ドゥーブルパッセ。サイバー・ドラゴンの攻撃は私に当たる」

サイバー・ドラゴンが出した光線が明日香に直接当たる。

「くう！」

明日香LP4000 LP1900

「そしてエトワール・サイバーは亮にダイレクトアタックする」

エトワール・サイバーATK1200 ATK1800

亮LP2200 LP400

「もう亮のライフが400に！」

「お、俺はカードを1枚セットし、ターンエンドだ」

亮LP400 サイバー・ドラゴンATK2100

手札4枚 伏せカード×2

「私のターンね、ドロー。」

ブレード・スケーター（ATK1400）を召喚して融合を発動、
エトワール・サイバーとブレード・スケーターを融合！

融合デッキよりサイバー・ブレイダー（ATK2100）を融合
召喚！」

融合……2体以上の特定のモンスター同士を合体させ
新しいモンスターを融合召喚する、デュエルモンスターズ
に昔からある召喚方法。

うん、青く長い髪とバイザーが似合ってたかっこいいな。
確か相手の場に合わせて効果が変わるモンスターだったような。

「行くわ！バトルフェイズ！サイバー・ブレイダーでサイバー・ド
ラゴンを攻撃よ！」

回転しながらサイバー・ドラゴンに蹴りをかますサイバー・ブレ
イダー。

「サイバー・ブレイダーは相手の場にモンスターが1体のみの場合
戦闘では破壊されないのよ！」

よって同じ攻撃力でもサイバー・ブレイダーは生き残る。

「ふ、俺の切り札がサイバー・ドラゴンだけだと思ふなよ、
^{トラップ}罠カード発動！アタック・リフレクター・ユニット！

場のサイバー・ドラゴン1体を生贄に手札の

サイバー・バリア・ドラゴン（ATK800）を特殊召喚！」

サイバー・ドラゴンは何も装備していないスタンダード状態から

首周りに厚い装甲をつけた防御型のタイプになった。

「サイバー・バリア・ドラゴンは攻撃表示のとき相手の攻撃を1度無効にすることができる」

「く、そう簡単にサイバー・ドラゴンを破壊させてくれないわねならカードを2枚伏せターン終了よ」

明日香LP1900 サイバー・ブレイダーATK2100
手札1枚 伏せカード×2

「俺のターン、ドロー」

「あのサイバー・ドラゴンは厄介ね、伏せカード発動、サンダー・ブレイク、手札1枚をコストに亮の場のサイバー・バリア・ドラゴンを破壊するわ」

破壊されるサイバー・バリア・ドラゴン

これで亮の場は再びがら空きに、流石明日香さん亮にとって不利な先行をあえて選ばせ一気に自分のペースにしてしまっている

だてにデュエルアカデミアの女王とは言われてないね。

「なら俺は死者蘇生を発動、墓地のサイバー・ドラゴンを蘇生、さらに融合を発動！場と手札のサイバー・ドラゴンを融合！でろ！サイバー・エンド・ドラゴン(ATK4000)」

出た！亮の切り札サイバー・エンド！

「サイバー・エンドでサイバー・ブレイダーを攻撃！
エターナル・エヴォリユーション・バースト！！！」

サイバー・エンドの口からそれぞれ光線が吐き出される

明日香のライフは残り1900、サイバー・ブレイダーは
戦闘じゃ破壊されないが超過ダメージは受ける、

つまり4000 - サイバー・ブレイダーの攻撃力2100 = 19

00

このまま何もしなければ亮の勝ちだ！

そう、何もしなければ……ね。

「甘いわ亮！最後の伏せカード発動！ギブ&テイク！」

「「ぎ、ギブ&テイク!?!」」

確か効果は

「ギブ&テイク、このカードの発動に成功したため

私の墓地のモンスター、ブレード・スケーター（DEF1500）
を亮の場に守備表示で特殊召喚するわ！

その後サイバー・ブレイダーのレベルをブレード・スケーターの
レベル4つ分上げる」

そう、シンクロがないこの世界ではデメリット効果しかない
分けの分からない罠カードトラップ、しかし明日香の狙いは

レベルを上げることじゃない。

「この瞬間亮の場のモンスターが2体になった、

よってサイバー・ブレイダー第2の効果が発動する、

亮LP200 何故かいるブレード・スケーターDEF1500
手札0枚 伏せカード×1

「私のターン、ドロー、

あら、モンスターじゃない……

仕方ないサイバー・ブレイダーでブレード・スケーターを攻撃！」

これで再び亮の場はがら空きに……

亮の防戦一方な決闘だ^{デュエル}……亮……1度ペースが乱れると

一気に落ちるな……いや、それより明日香のプレイングセンスが
いいんだなきつと。

「カードを1枚伏せ、ターン終了よ」

明日香LP1900 サイバー・ブレイダーATK2100
手札0枚 伏せカード×1

「お、俺の……ター……ン」

亮の手が少し震えてる……だ、大丈夫亮!?

「どっしたの亮?早くドローしなさい」

「……く」

やべ……何かいいところだけどトイレ行きたくってきた、
実はさっきから我慢してたんだよね……

「亮……」

「な、なんだ……優

（もしかして俺のことを応援してくれるのか優！）」

「ちよつとトイレ貸して」

「ぐぼあー！」

メンタルポイント

亮MP300

メンタルポイント

MP0

「（亮の残り少ない精神力が今ので全部削りきられた！）」

僕はトイレに向かう、何か亮のLPじゃないなにかが

0になった気がするが僕は多分関係ない関係ないったら関係ない
きつと。

まるむいじりょう
丸藤亮 視点

ゆ、優がトイレに行ってしまった……

そんなことより危ない……このままでは……負ける！

確かこの決闘デュエル、勝った方が優の保護者になる権利を賭けていたよ

うな……

これはサイバー流のリスクト決闘デュエルに反するカード、
だが優を取られるぐらいならここで使った方がマシだ！
何かこの前もこんなことしたような気がするが多分気のせいだ！

「キメラテック・オーバー・ドラゴンの攻撃力は融合素材にしたモ
ンスター

数×800となる、融合素材にしたモンスターは5体！

よって攻撃力は

キメラテック・オーバー・ドラゴンATK？ ATK4000

「よ、4000!?!?」

「キメラテック・オーバー・ドラゴンでサイバー・ブレードに攻
撃！

エヴォリューション・リザルト・バースト!!!」

「く……………バースト罨発動、ドレインシールド、
攻撃モンスターの攻撃を無効にし無効にしたモンスターの
攻撃力分ライフを回復する!」

明日香LP1900 LP5900

「これでこのターンはしのいだわ」

「はっ、それはどうかな？キメラテック・オーバー・ドラゴンは
融合素材の数だけモンスターを攻撃できる！
よってあと4回攻撃が残っている!」

「なんですって!?!?」

「行けええ！エヴォリユーション・リザルト・バースト！！
ヨンレンダアアア！！！！！！」

「きゃあああああ！！！！」

明日香LP5900 LPO

「く、私の……………負け……………たった1枚のカードで逆転されるなんて……………」

「ふはははは！ふはははははは！」

「りよ、亮……………か、顔が軽くいつちゃってるんだけど大丈夫？
亮のファンが見たら泣くわよ……………」

「ふはははは！ふはははははは！待っている優……………」

「（あれ、これって……………優がピンチ系？）」

「ふゝ、すつきり、あれ？もう決闘終わっちゃたの？」

雷堂優 視点

「ふゝ、すつきり、あれ？もう決闘終わっちゃたの？」

部屋に戻ると昔見覚えがあるような光景が目に入った。

「（タイミング悪っ！！優！！）」

「優う、探したぞお！！」

あ、あれ？何だろう………第17話あたりのラストと似た光景が

………

「ゆ、優う」

「何か分かんないけどここは逃げるわよ、優」

「え、うん、わかった！」

僕は明日香と一緒に亮の部屋をでてひたすら走る。

「ちょっと明日香！どうなってんの！！」

「分からないわ、亮と決闘^{デュエル}してあと少しの所で
負けてしまったわ………そしたら亮がおかしくなって………」

「まてえ〜優うう！！」

「おわあ！！亮が追いかけてくる！！！」

「今はとにかく逃げるのよ！」

数分後

ブルー寮裏

「はあ、はあ、もう無理……走れない……」

「判事急須かしら……」

「ははははは！もう逃げられんぞ！」

「（小さな男の子とか弱い女性が、目が狂った男に追いかけられてる……普通にホラーよこれ）」

「（いや……昨日の明日香も同じ位ホラーでしたよ……しかもか弱いってwww）」

「（優……色々ツツコミたい所が満載だけど今はどうやって亮から逃げるか考えないと）」

「（そ、そうだね……なんかピンチになったせいか明日香と目を合
わせただけで言葉が通じてるよ）」

「（これがアイコンタクトと言うやつよ優）」

「（そうですか……）」

「（ところで、亮と1ヶ月一緒にいた優ならこの状態……そうねこ
の状態の亮を『亮のヘル化（仮）』としましろう、それで亮のヘル
化（仮）から元の亮に直す方法、知ってる？」

「（まあ、知ってると言えば知っていますね……亮の頭に気絶する
ぐらい強い衝撃を与えれば数時間記憶が飛ぶけど元の亮に戻るはず
……多分）」

「（頭に強い衝撃ねえ……決闘盤でぶん殴るとか……）」

「（まあ、そんな感じ）」

「（強い衝撃で簡単に言うけど……そう簡単にはいかないわよね）」

「（そうですね……前は3人がかりで何とか成功したぐらいだし……
さらに代償として1人死んだし）」

「（死んだの!?)」

明日香と優アイコンタクト会話、実質10秒。

ブルー寮3階

ブルー生徒「さーて、花瓶に水をあげるか
おっと！ヤベ…手
が滑った！」

『ガツシヤン』

ブルー生徒「あゝ落ちちゃった……知くらね」

「（小さな男の子とか弱い女性が、目が狂った男に追いかけられてる……普通にホラーよこれ）」

「（いや……昨日の明日香も同じ位ホラーでしたよ……しかも弱いってwww）」

「（優……色ツツコミたい所が満載だけど今はどうやって亮から逃げるか考えないと）」

「（そ、そうだね……なんかピンチになったせいか明日香と目を合わせただけで言葉が通じてるよ）」

「（これがアイコンタクトと言うやつよ優）」

「（そうですか……）」

「（ところで、亮と1ヶ月一緒にいた優ならこの状態……そうねこの状態の亮を『亮のヘル化（仮）』としましょう、それで亮のヘル化（仮）から元の亮に直す方法、知ってる？」

「（まあ、知ってると言えば知っていますね……亮の頭に気絶するぐらい強い衝撃を与えれば数時間記憶が飛ぶけど元の亮に戻るはず………多分）」

「（頭に強い衝撃ねえ……デュエルディスク決闘盤でぶん殴るとか……）」

「（まあ、そんな感じ）」

「（強い衝撃で簡単に言うけど……そう簡単にはいかないわよね）」

「（そうですね……前は3人がかりで何とか成功したぐらいだし……さらに代償として1人死んだし）」

「（死んだの!?!）」

明日香と優アイコンタクト会話、実質10秒。

「ふはははは、ふははは」

僕達がもう駄目だと諦めたら、偶然か奇跡か神の悪戯か田中の気紛れか

天から花瓶が降ってきた亮の頭に見事Hitした。

『バタン』

地面に倒れこみ動かなくなる亮。

「……………」

「……………」

「とりあえず」

「助かったみたいだね……………はは」

その後亮はただ気絶しているだけだったので（切り傷も無かった）2人で亮の部屋まで運びベッドに寝かせといた。

そして今日あったことはなかったことにして
あの変な亮（亮のヘル化（仮））は幻覚で2人とも疲れていたんだ
と言っことにしておいた。

めでたしめでたし。

数時間後
亮の部屋

「ぐっ！こ、ここは？……俺は一体何を……あ、頭いた……」

「な、何も思い出せない………と言っより俺は誰だ？ここは何処だ！？」

「誰か教えてくれ！！」

「めでたし……めでたし………かな？」

第32話 「誰にも言えないひと夏の甘酸っぱい思い出?」 b y 優 (後書き)

久しぶりに更新つと、疲れた……………

ここだけの話今回のデュエルは優VS明日香VS亮というバトルロイヤル形式で行こうとしたんですがいつの間にか明日香VS亮で途中亮がヘル化するというさらに記憶を失うと言うカオスな感じになってしまいました。

まあ、僕的にはこうゆう感じでいっかと、後悔はしていません。次回は原作どおりだとテストの話ですねでもこの小説の次回はまた小説オリジナルストーリーです。

それとこの世界はシンクロ、エクシーズは存在しませんが5D・S ZEXALのカードは存在します、ガード・ブロックとか。理由?そりゃ僕の知識量じゃDMとGXだけのカードで決闘を考えるのは難しいので……………

第33話 「俺は毎日1時間かけて髪の毛をセットしているぜ」b y 神楽坂(前)

ついに開放されたぞ！自由だ！今に見ている人間どもめ……今すぐ復讐　　はしませんけどなにか？

どうも！やつと更新できました33話です。

ついでに何から開放されたかと言うと、中間テストです、いやあれはマジ地獄でしたテスト前1週間はパソコン使えなくてストレス溜リングリングでしたよ。

「続きかけない」「小説読めない」「感想書けない」「ストレスは溜る」

の4重苦……しかしそれからついに開放された！

結果？聞かないください……英語が……英語さえなければ……

と、言うわけで今回はテスト勉強の話です。

& 友情的な？溜ったストレスを発散させて書いた33話です。

第33話 「俺は毎日1時間かけて髪の毛をセットしているぜ」b y神楽坂

僕がデュエルアカデミアに入学してそろそろ1ヶ月。
いやはや、時が経つのは早いですなあ〜

でもこの1ヶ月、何も起こらないまま終わったわけではないのだ
よ。

僕がどれだけ苦労したことやら……

僕が亮の部屋に行った次の日、ブルー生徒は普通通らないはずの
通学路に

何故か明日香と遭遇して一緒に学校に行くことになった。

そこまでは良かった、しかしあと少しで学校に着く、
とまで行った所に登校中だと思われる亮がいた「折角だから声か
けてみましょう」

と言い出した明日香と一緒に亮の近くまで行くと
亮がいつもと違うことに気づく……そう、亮は何故か、記憶喪失
になっていたのだ!!

なんでだよ!と思う気持ちが沢山あったが今はこの状態の亮を1人
にはしておけない

とのことで学校休んで亮の部屋に行った。

亮はやはり記憶喪失で「俺は誰だ、ここは何処だ」と喚いている。
正直こんな状態の亮を人前に見せるわけには行かないので
明日香、と僕による『亮の記憶、復活作戦』を発動させたのであ
った……

とりあえず何故亮が記憶を無くしたのか検討してみたものの
全然心当たりが無い……それに他の生徒や先生に言うわけにもい
かないので

途方に暮れていた所なぜかデラーズ様 ではなく校長先生が
何故かやってきて「ガトー！ じゃなくて亮！どうしたんだ
！私のことを忘れたのか！私だ！！」と分けの分からないことを言
い出しかなりカオスな
騒動になってしまった……

その後亮と決闘デュエルしたり、決闘デュエルしたり、決闘デュエルしたりして負けまくって
2体1で決闘デュエルしても記憶は失ってもデュエルモンスターのル
ルは
覚えている亮に負けて体力が0に近くなっているところ

明日香が「優がクランのコスプレをすれば亮の記憶が戻るかも…
…」と全く
意味不明なことを言い出すしまつ……結果僕、明日香、校長に
よる

『亮の記憶、復活作戦』は3日に渡り繰り広げられ
明日香が誤って落としたマグカップが亮の頭にクリンヒットし
何故か記憶が戻った。

うん、ざっと説明するとこんな感じ………凄く疲れた………
高校生活1発目から弾けすぎた生活を送ってしまった。

それとさっきも言ったけど今日は9月30日、そして明日は10月1日

そしてこの学校には何と月に1回テストがあるのだ！
なんで1ヶ月に1回テストがあんだよ！

年に12回じゃねーか！！と言いたい気持が山ほどあるが
どうやらそのテスト高得点を取ると寮、つまり所属するクラスが
1つ上がるのだ！

よって明日のテスト、僕が高得点をとればオベリスク・ブルーに
昇格し晴れて亮や明日香と同じになるのだ！やったね！！

しかしそう簡単には行かない、そう………そりゃ勉強しないと
いい点を取れないので

「……………はあ、疲れたあ」

僕は睨めっこをしていた教科書から目を離し上に手を上げてのびをする。

現在、猛烈勉強中です。

「はあああああ〜疲れたぜ〜」

今大きな溜息とあくびを同時に出したのは僕じゃなく

僕と一緒に同じくテストに向け勉強中の神楽坂、

かくらさか

神楽坂は僕と同じラー・イエローの生徒で学食でたまたま

出会い、いつの間にか自分の部屋に呼べるほどの仲になった、

つまり親友だ。

んで「1人より2人の方が勉強がはかどるぜ！」の

法則があるらしく今日は神楽坂と一緒に勉強することとなったのだ、

僕的には「1人より2人の方が勉強がはかどるぜ！」の法則より

「2人だといつの間にか遊んじやっつていつの間にか時間が経つちやっつたぜ！」

の法則の方が正しいと思っていたが、案外神楽坂は

勉強熱心で途中誘惑に負けることなく勉強を続けることが出来た、

自分で言うものなんだがテスト範囲は殆ど覚えたから

明日のテストはばっちりだと思っ。

「はあ〜、よしもうばっちりだし休憩しようぜ、雷堂！」
らいどう

整髪料をふんだんに使い、髪の毛をヒトデ見たいに立てた

神楽坂は立ち上がりあくびをしながら大きく伸びをする。

なんでも伝説の決闘者武藤遊戯の大ファンらしく

髪型を真似ているらしい、しかも黄色い制服の中に

着ているインナーには千年アイテムの1つの千年パズル

がプリントされていた、服や髪型は軽くレギエラーキャラの粋

だけどこんなキャラいたっけ？本編には出ていないモブキャラか

な？

それともTF？タッグフォース僕TFしたことないからなあ〜

僕のかけなしのお小遣いじゃTFなんて高価なもの買えなかったからな〜

(違うでしょ、兄さんが無駄遣いばっかするからでしょ！) by 妹

「じゃあ最後に本当に覚えているか最終チェックだ！かみなりどう雷堂、何か問題出して」

問題か……とりあえず教科書を開いて……

「じゃ、問題！」

「よし、何でも解いてやるぜ！」

勉強した後なのに何故かテンションが高い神楽坂。

「儀式魔法、儀式モンスターカードについて簡単に説明せよ」

「ふっ、簡単だぜっ！儀式魔法とは基本的に

儀式モンスターが手札にあるとき発動ができ

召喚したい儀式モンスターと同じ、またはそれ以上

のレベルになるように場と手札のモンスターを墓地に送った場合に手札の儀式モンスターを儀式召喚扱いで特殊召喚ができるんだ

「！」

「ん、まあ、正解」

神楽坂の答えは大体合ってるけど儀式カードの中にはレベルを

丁度にしなきゃいけない『エンド・オブザ・ワールド』や
相手モンスターを儀式素材にできる『リチュアに伝わりし禁断の秘
術』

などがあるけど簡単に説明せよって書いてあるし
十分な丸がもらえるだろう。

「やったぜ！じゃもう1個問題出してくれや！！！」

相変わらずテンションが高いなあ、ま、
神楽坂のなんにでも熱心な所は僕嫌いじゃないよ。

「じゃあだい2問！！ジャジャン！！」

フィールド魔法を破壊から守り、お互いに新たにフィールド魔法が
発動できなくなる永続魔法がある、その永続魔法の名前は？」

「えーっと……ちょっとまって……思い出す、

なーに、もうそこまで出ている……あせらなくてもいい、

ゆっくり思い出してあげればいいんだ……そう、あれだ！

いや、違う、それじゃない、となると

黙って思い出した方が早いんじゃないかと思うが

神楽坂いわく喋ったり体を動かしながらの方が

計算も早く解けるし、早く思い出せるらしい。

そして約40秒後。

「わかった！フィールドバリアだ！」

「じゃあ書いてみて」

僕は神楽坂に1枚白紙の紙とシャーペンを渡す。
テストは筆記だから言えても書けなきゃ意味が無いし。

「へ、簡単だそんなこと……えーっと……
あれ？『フィールドバリア』だっけ？それとも『フィールド・バ
リア』だったか？

それともあえて『ふいーるとぼりあ』か……あー、えー、
お、思いだせん……………っ！
分かった！『フィールドバリア』だ！！」

「神楽坂は紙にお世辞でも上手いとは言えない字で
『フィールドバリア』と書く。」

「うん、正解だよ」

「やったぜ！」

ガッツポーズするぐらい嬉しいのか……………

「ふー、それじゃ、最後に実技テストの練習でもしようぜ！」

ああ、言い忘れてた。

月1テストには筆記テストと、実技テストがあるんだ、
筆記テストは普通に1ヶ月習った所が出る筆記問題。

そして実技テストは同じ寮の生徒同士が決闘^{デュエル}して
勝ち負けにより筆記テストの点数に上乘せするのだ、
ちなみにさつき高得点をとれば昇格すると言ったけど

逆に赤点なら補習があるし何度も赤点取ったり、酷い点数だと
レッドに落とされる可能性もある……………それ以上落ちるところがない
レッドはおそらく退学であるっ……………

「つまり、勉強で疲れた体を決闘デュエルで気分転換しよう」と

「おお！雷堂かみなりてうは話が早くていいぜ！！

じゃ早速外行こうぜ！」

「え？ここでやればいいじゃん」

「何言ってるんだ、お前この部屋でグラフィアでも出してみろ、

上の階の人が「床から悪魔が出てきた！」って驚くだろ！

ソリットビジョンでも怖いわ、いきなり床からモンスターがでてきたら」

「う……うん、そうだね……」

意外と周りのことも考えている神楽坂である。

イエロー寮、前

うー、風が少し冷たい……いくら南の島でも10月になりや寒い

か、
でも、疲れた体には丁度いいな……気持ちいい、
夜の湖も綺麗だ……

「おーい！ぽけつとしてないで決闘盤デュエルディスク構えろ！」

「あ、ごめんごめん」

「じゃ、いくぜえー！」

「お、オツケー」

僕と神楽坂はお互いに決闘盤デュエルディスクを構えて、同時に

「「決闘デュエル！！」」

「俺の先行、ドロー！！」

俺はモンスターをセット！！」

夜と言っても、月の光やライトが島を照らしているので
相手のモンスターが見えないと言うことはない。

「さらに、カードを3枚セットし、ターン終了だ！！」

神楽坂 LP4000 伏せモンスター×1

手札 2枚 伏せカード×3

うん、テンション高いのに完璧守りに徹してるな。

裏守備で召喚と言うことは今神楽坂かくらさかが使っている

デッキはコピーデッキじゃない。

神楽坂かくらさかはプレイングセンスやドローク、あとパック運は意外とあるんだがデッキ構築が全然だめだ、そのため他人のデッキをコピーしそれをコピーした人間以上に使いこなすから他人のコピーデッキが多い。

でも普通にデッキをコピーしそれを本人以上に上手く使うなんて簡単なことじゃない、神楽坂かくらさかの優れた才能、それを立ちの悪い生徒は「他人のデッキパクって楽しいか」「自分で考えたデッキじゃないのに粋がりやがって」など酷いことを言う、

僕はそうとは思わないけどなあ、普通に凄いじゃん。

それだけ幅広いカードの知識を持っているってことだよ、いや、違うな……どんなカードでも即座に使いこなしてしまうの方が正しいか、だから「またデッキについて悪口言われても気にしなくていいよ」って僕は言ったけど、神楽坂本人はかなりそれが傷つくらしい。

んで、僕は神楽坂と協力して神楽坂だけのデッキを作ったわけだ、それからかな僕と神楽坂が親友と呼び始めたのはでも神楽坂かくらさかの人のデッキを真似するのは一種の趣味のようなもので未だにデュエルフィールドデュエルフィールド決闘場に足を運んでは他人のデッキを研究しているらしい。

おっと、少し話すぎた、いけない、今決闘中デュエルだった。

「じゃあ次は僕のターン、ドロー!!」

さつきも言ったがあれは神楽坂かくらさかの本当のデッキ（ついでに僕の暗黒界はこの前にコピーされた）

ならあの伏せモンスターは100%ヤツだ、

そしてあの3枚の伏せカードは確実に伏せモンスターを守る

罨カード………なら。

「魔法カード、暗黒界の雷を発動、

相手の伏せカードを1枚破壊する、僕は神楽坂かくらさかの伏せモンスターを破壊！」

空から降ってきた雷が伏せモンスターに直撃する

「カウンター罨発動、マジックジャマー、

手札1枚をコストに暗黒界の雷の発動を無効に」

直前に雷は煙となり消滅してしまった。

「まだだ、もう1枚魔法カード、暗黒界の取引、

お互いのプレイヤーはカードを1枚引きその後1枚捨てる、

僕は手札から暗黒界の刺客カーキを捨てる、

カーキは捨てられたとき場のモンスター1体を破壊する効果をもつ、

よって神楽坂かくらさかのモンスターを今度こそ破壊！」

「へっ、させねーぜ、もう1枚カウンター罨、天罰、

手札1枚をコストに効果モンスターの効果の発動を無効にし破壊する」

「く、そこまでして守るカードか、じゃあかなり大切と見た」

「それはどうかな？」

ニヤリと笑う神楽坂……どやっ

「なら、もう1枚魔法発動、抹殺の使徒！

相手の伏せモンスターをゲームから除外する」

「なっ！これは俺のデッキに対する最高のアンチカード!？」

「今度こそ破壊だあ！」

「でも破壊はさせねえ！最後の伏せカード、神の宣告を発動！」

ここで神の宣告!？

神の宣告とはモンスターの召喚、魔法、罫の発動、

どれでもライフを半分支払えば発動と効果を無効にできる

超レアカード、なぜかこの世界の人はライフ半分とじゃ

釣り合わないといって使えないカード扱いする。

普通に強いのに神宣、まあ神楽坂はその神宣のよさに気づいてい
るから

デッキに入れたんだろうけど。

LP4000

LP2000

「はあ、守りきったぜ………」

しかしこれで神楽坂の魔法・罫は0、

つか攻撃反射型のカードじゃなかったの!?

しかしこれでモンスターを心置きなく破壊できる。

「最後にもう1枚魔法カード発動、愚かな埋葬、

デッキのカードを1枚墓地に送る、僕は暗黒界の龍神グラファを墓地に送る。

暗黒界の策士グリーンを召喚、そしてグリーンを手札に戻し墓地の暗黒界の龍神グラファ(ATK2700)を蘇生!」

「なんだ、効果破壊の次は戦闘破壊か、そんなにこのモンスターが怖いのか?」

凄く厄介なんだよあのカードは、特にリバーズされると、しかし攻撃力1500以上のモンスターで攻撃すれば確実に破壊できる。

ここまで言えば皆も神楽坂が何デッキか分かったよね?

じゃあ答え合わせ!!

「グラファで伏せモンスターを攻撃、ダークネス・バースト!」

「俺の伏せモンスターは……………闇霊使いダルク(DEF1500)」

伏せカードから茶色いローブを着た小さな少年が出てくる。

やはり…………闇霊使いダルク、

リバーズした時、相手の闇属性モンスター1体のコントロールを得る

つまり神楽坂のデッキは霊使いシリーズによるコントロール奪取デッキ。

霊使いの特徴は炎、水、風、地、闇、光の6種類
がいてそれぞれリバーシしたとき扱っている霊と
同じ属性のモンスターのコントロールを奪えるという、
そして霊使いのステータスはみなATK500/DEF1500。

相手のモンスターを奪うというトリッキーな戦い方をする、
だがもちろん弱点もある、

まず守備力が1500と低い、それではすぐに破壊されてしまう、
しかしそれを神楽坂は和睦の使者や攻撃の無力化などで
相手の攻撃を防いでいる（この決闘ではまだ使っていないが）

そして2つ目、霊使いは霊使い自身がモンスターを操っているので
霊使い本人が破壊されれば洗脳は解けコントロールは元
戻ってしまう。

そう考えると案外突破口はいくらでもあるデッキだな。

「そのまま攻撃だグラフア！」

グラフアの攻撃がダルクに当たる……しかし！

「ダメージステップ時に手札の牙城のガーディアンを捨て効果発動
だぜー！」

手札から！？しまった、盲点だった……

「牙城のガーディアンは手札から捨てることで1ターンだけ

モンスター1体の守備力を1500上げるんだ!」

よって神楽坂のリバースしたモンスター闇霊使いダルクの守備力は

闇霊使いダルクDEF1500 DEF3000

攻撃力2700のグラフィアを超えた。

優LP4000 LP3700

300の反射ダメージを受ける、だが300ぐらいどってことない、

しかしダルクの効果が発動してしまう。

「闇霊使いダルクがリバースしたため雷堂らいどうのグラフィアのコントロールを奪う!」

「くそ!」

これで僕の場にモンスターは0、不味いな。

「僕はカードを1枚伏せターン終了」

優 LP3700

手札 1枚 伏せカード×1

「へっ!なら次は俺のターンだ!ドロー!」

ダルクを守備表示に変更し、カードを1枚伏せる。

そしてグラフィアでダイレクトアタックだ!」

「なら俺のターンドロロー！よっしゃー！
俺は暗黒界の龍神グラファを生贄に、でろや！
偉大魔獣ガーゼット（ATK0）！」

体に少しだがグラファの面影を残した魔人が出現する、
ヤバイなあ〜

「偉大魔獣ガーゼットの攻撃力は生贄にしたモンスター
1体の攻撃力を倍にした数値になる、よって攻撃力は
5400だああ！！そしてガーゼットで
グレートラッシュ
優の伏せモンスターを攻撃！偉大拳！！！」

僕の裏側のカードが表になる、紫色の丸いばい菌。

伏せモンスター ジャイアントウィルスDEF100

「ジャイアント・ウィルスは破壊されたとき相手に500のダメー
ジを与える」

神楽坂 LP2000 LP1500

「うわぁ！汚ね！何か付いた！」

大丈夫、ソリットビジョンだから。

「そしてジャイアントウィルスは破壊されたとき
デッキから同名モンスターを2体特殊召喚する」

僕の場合にさつき破壊されたウィルスが2体現れる。

「モンスターを場に残しちまったか、俺はモンスターをセットし

ターン終了だ」

神楽坂 LP1500 偉大魔獣ガーゼット ATK5400
手札 0枚 闇霊使いダルク DEF1500
伏せモンスター×1、伏せカード×1

「僕のターンドロ」

んー、ナイスな引きだここでこのカードとは、
僕のドロカも上がってきたのかな？それとも偶然か。

「僕は墓地の悪魔族3体、カーキ、グラフア、ウイルスの3体を除
外して、

ダーク・ネクロフィアを特殊召喚」

僕の周りに黒い霧が漂う。

「な、なんだこの霧!？」

そして黒い霧の中から『カタカタ』と不気味な音を立てる
人形を抱えた人型悪魔が現れる。

「ダーク・ネクロフィア、出現! (ATK2200)」

「な、なんだ、脅かしあがって何かと思えばたった攻撃力2200の
モンスターじゃねーか、こんなんじゃ俺のガーゼットには敵わな
いぜー!」

「そうかい、確かにね、じゃあ僕は神楽坂の伏せモンスターを攻撃、

ねんがんさつ
「念眼殺！」

「伏せモンスターは闇霊使いダルク、だが破壊されたため効果は発動できないぜ！」

「ジャイアントウィルスを守備表示にしてカードを1枚伏せターンエンド」

優 LP1000 ダーク・ネクロファイア ATK2200

手札 1枚 ジャイアントウィルスDEF1000×2

伏せカード×1

「へっ、このターンで俺の勝ちだな、これで優との戦歴は12勝4敗！」

数えてたの！？そして僕結構負け越してるなあ！
確かにあんま勝った覚えはないけど！

「行くぜえ！偉大魔獣ガーゼットでダーク・ネクロファイアを攻撃、
グレートクラッシュ
偉大拳！」

「畏発動！ガード・ブロック、このカードの効果で戦闘ダメージを0に、
その後カードを1枚、ドロー！」

「だが変な気持悪いモンスターは破壊だ」

はい、ここでファラオの命台詞！！

「それはどうかな？」

「な、どうゆうことだ！」

「周りを見てみれば？」

「ま、周り……ん？おかしいぞ。

あの変なモンスターを倒したのに黒い霧が消えない！」

「ダーク・ネクロフィアは死んでも持っていた

人形に取り付いた靈魂が神楽坂のモンスターに取り憑く」

ダーク・ネクロフィアが現れたときに出現した

黒い霧が神楽坂の偉大魔人ガーゼットの周りに集まり

ガーゼットの中に入る。

「……そして取り憑いたモンスターは自分のご主人様に牙を向ける

！」

ガーゼットのコントロールが僕に移った。

よし、計画通り！

「なっ、奪うどころか逆に奪われただど！？」

さあ、どうする神楽坂？

「く、カードを1枚伏せターン終了」

神楽坂 LP1500 闇霊使いダルクDEF1500

手札 0枚 伏せカード×1

「僕のターンドロワー、手札抹殺を発動、手札を全て捨て捨てた枚数ドロワーする、1枚ドロワー」

「俺の手札は0枚よって何もしない」

「そして手札抹殺で捨てた暗黒界の策士グリンの効果、神楽坂の伏せカードを破壊する」

「ええーい！まだだ！まだ終わらんよ、畏発動、和睦の使者、このカードの発動に成功したためこのターン俺はダメージを受けず俺のモンスターは戦闘で破壊されない」

「ちっ、ターンエンド」

優 LP1000 偉大魔人ガイゼット ATK5400
手札 1枚 ジャイアントウィルスDEF1000×2
伏せカード×0

「く、やべえな、ドロワー！！
へっ、来たぜ！魔法カード強欲な壺を発動！！
デッキから2枚ドロワー！」

「ここで強欲な壺かよ！」

「俺はモンスターをセット、そして……
魔法カード、太陽の書を発動」

「太陽の書おお！！！」

「太陽の書、このカードの効果により

裏守備のモンスター1体を表側攻撃表示にする、
対象は俺の裏モンスター、そして俺の守備モンスターは
闇霊使いダルク ATK500」

ちよ、今回3枚目のダルクですか!?

「これでガーゼットを奪い返すぜ!」

奪ったモンスターで召喚されたモンスターが
奪われた後奪いかいしたのか…… ややこし!

「ガーゼットでジャイアントウィルスを攻撃!本日3度目の偉大拳
!」
グレートクラッシュ

ガーゼットの巨大な腕に吹き飛ばされるジャイアントウィルス。

「でもジャイアントウィルスが破壊されたから神楽坂に500のダ
メージを与える」

神楽坂 LP1500 LP1000

「俺はターンエンドだ、ライフは並んだがモンスターでは俺の方が
有利だぜ!」

神楽坂 LP1000 偉大魔獣ガーゼット ATK5400
手札 0枚 闇霊使いダルク ATK500

「僕のターン、ドロー……」

「さあ、どうする雷堂?」

「……………」

「どうした雷堂、諦めたのか？」

え〜っと……………こんな勝ち方していいのかな？

「じゃあ暗黒界の尖兵ベージ（ATK1600）召喚……………
攻撃表示のダルクに攻撃」

「なな！攻撃表示のダルク！？あっ！本当だ！って汚いぞ雷堂！！」

「汚くない、これで僕の勝ちだ神楽坂！」

神楽坂 LP1000 LP0

「かー！負けちゃったぜ！」

決闘デュエルの後、僕と神楽坂は寮の前の芝生の上で風に当たりながら
夜空を見ている、理由は何となく、らしい。

「あーあ、あと少しで勝てたのに……ぶー」

芝生の上で横になって文句を言う神楽坂。

「そう、僕が本気を出せばもっと早く勝てたけどね」

「な、なんだと!」

「ははははは!」

「はははじゃねーよったく……」

雷堂さ、何か俺と話するときだけ、何か冷たくないか?」

「そんなことないよ」

「そんなことあるぞ、絶対!」

「そう……だとしたら、神楽坂と話すときは
変な気遣いとかいらず、そのまんまの自分を出せてるってことじ
ゃないかな？」

「な、なんだよそれ／＼」

「つまり僕はそれだけ神楽坂の事を信頼している
ってことだよ、本当に仲のいい友達とかは変な気遣いなしに
言いたい事をそのまんま言える……からかなあ」

「そ、そうか……そうだよな、俺たち親友だしな」

「うん、そうだね、だからこれからもよろしく」

「ああ、もちろんだとも」

「ふわあああ〜〜ねむ、えーっと、
もう１１時か、夜更かししちゃったな〜」

「１１時はまだ夜更かししている時間じゃねーよ、
テスト前日ならなおさらだ」

「そんなことは言ってたって眠いもんはなむ　　ふわあ〜
おやせみ」

「おやすみじゃねー、ここで寝るなよ、
風引くぞ、ほら、肩貸してやるから立て」

「むにゃむにゃ……おんぶ」

「おんぶじゃねー、いい年こいて甘えてんじゃねー！」

「じゃ……じゃあ……おひめしゃま……だっ」

「なんでだよ！男をお姫様抱っこしてら普通に気持悪いだろ、俺はそっち系の趣味はない……！」

「……………」

「……ZZZ」

「って、マジで寝やがったこいつ。

はー、しゃーね。

よっこいしょっと、お、意外と……かなり軽いな
ちゃんと飯食ってんのか、お母さん心配だわ」

「……ちもちわる」

「おま！起きてんのかよー！」

「……………ゼットゼットゼット」

「おい、わびわびゼットゼットゼットゼットって

言う馬鹿がどっからくる」

「いいかやはいべえ〜」

「ったく偉そうに、今回だけだぞ」

「……………おんにきゆう〜」

『ガチャ』

「あー、もう消灯時間過ぎちゃってるわ、
暗い、よく前が見えん、先生に見つかる前に
部屋に戻らないと……………」

「……………」

「うーし、おい、雷堂、お前の部屋に着いたぞ。一回おきる」

「……………」

「だめだ、完全に落ちてる、じゃ
よっこいしゅと、これだよし
じゃあな、雷堂、明日のテスト、頑張って絶対ブルーに上がって
やる……………」

「おみゃーじゃむちやる」

「ってやっぱ起きてたのかよ！って寝言か？まあいい
さて俺も寝るか、その前にシャワー浴びてワックス落とさないと

.....
絶対ブルーに上がってやる」

第33話 「俺は毎日1時間かけて髪の毛をセットしているぜ」by神楽坂(後

スクラップデツキ強し！今日テストが終わってその後テスト勉強ストレスを発散させるために友達とカラオケ行ってきた、んで歌ったりデュエルした。

結果「Sin」に勝って「ライトロード」に勝って「インフェルニティ」に勝った。

ま、同じ位負けたけど、くそ！100%完成すればきつと圧勝できるのに！

今回初登場神楽坂君、なんかこんなキャラでいいのかな？2話しか出てないキャラを書くのは意外と難しい、なんか妙に熱血系になっ
てしまっている。

そして僕は案外1話や2話しか出てこないゲストキャラが意外と好きらしい、

神楽坂とかダーザンとかもけおとか。

そついや神楽坂に下の名前ってあるのかな？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3171v/>

実はカイザーはショタコンだった！？

2011年10月25日02時09分発行